
夢色彩のカーバンクル

倉元裕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色彩のカーバンクル

【Nコード】

N6452Y

【作者名】

倉元裕紀

【あらすじ】

前世の記憶。それは夢を通して伝えられる、過去の自分からの贈り物。世代を超えて伝えられる、忠告、運命、そして思い出。世界中の人々が必ず見るその記憶を、レオンはなぜか見られずにいた。そこで彼は冒険者になることを決意する。自分の魂を象る遺産、その場所を示すと言われている導きの妖精、カーバンクルに出会うために。世代を重ねる人間たちと、不死の存在であるカーバンクルが共存する世界。その中で成長していくレオンの物語。

雪解けの道

まだ雪が残っているからなのか、荷馬車越しに伝わってくる振動も控えめだ。まるで今日の日の僕の為に、雪を残しておいてくれたみたいに。春が雪解けを先延ばしにしてくれていたのだろうか。

きつと、明日からは本格的な春。

自然と顔が綻ぶ。

もつとも、村を出る時から、ずっと緩みっぱなしだったけれど。澄んだ心地いい空気。

何かの果物を干した物だろうか。甘い匂いが漂ってくる。

何より、抑えきれない期待。

レオンは馬車の外に目を向ける。

抜けるような青空。雲一つない、まさに快晴。

本当にいい日だ。

神様と、そしてイブ様に感謝しないと。

「おい。坊主」

荷馬車の御者の声。まだ若い男性だ。たまに村までやってくる行商の人らしい。今日までほとんど面識はなかったが、レオンの旅立ちの事を聞いて、ついでだからいいよと快く馬車に乗せてくれた、優しい人だ。

レオンは馬車の中から顔だけ出して聞いた。

「何ですか？」

御者の男性は、手綱を握ったまま、ちらりとだけこちらを見る。

口元が少しあがっていた。

「見えるだろ？」

彼の言葉の意味がすぐには飲み込めなかった。だけど、彼と同じように前を向いてみると、すぐに分かった。

山を下りた先。まだ遠いその先には、見渡す限りの平原が広がっている。

そして、その広大な土地にぼつりと、だが確かに町が見えた。
自治都市ユースアイ。

「うわぁ・・・！」

目を輝かせるレオンを見て、御者は少し苦笑したようだ。

「ちっさい町だよなぁ」

「小さいんですか？」

きょとした顔で聞くと、今度は声を出して笑われた。それがどうしてなのか分からなかったので、レオンはますます首を捻った。
「小さい小さい。まだ出来て400年くらいだし、それに、交通の要所ってわけでもないから、あんまり大きくならないんだよなぁ」
「へえ・・・」

「でも、住んでるのはいい奴ばかりだから、坊主みたいな田舎者にはちょうどいいな。せいぜい腕を磨いて、名のある冒険者になってくれよ。出来たら、サイレントコールドくらいの」

レオンは照れて頭を掻く。

「いや、そこまでは、ちよつと・・・」

「そうか？じゃあ、俺のお得意様になつてくれればいいや」

男はそこでまた笑った。やっぱり理由は分からなかったが、レオンもつられて笑った。

ひとしきり笑ったところで、御者がまた一瞬だけこちらを見た。

「というか、坊主。お前、ジーニアス？」

ジーニアスとは魔法が使える冒険者の総称だ。つまり、彼の質問の意味は、貴方は魔法が使えますかという事である。

「いえ、魔法は全然」

「でも、サイレントコールドの故郷だよな？お前の村」

「あ、はい。でも、僕は全く才能がないみたいで。一応調べて貰おうと思っているんですけど、たぶん魔法はダメですね。だから、アスリート志望で頑張ってみようかと」

アスリートとはジーニアスの反対。つまり魔法が使えない冒険者の事。冒険者を大別すると、このどちらかになる。アスリートの方は、剣とか弓とか、体力勝負の冒険者が多い。

「それは苦勞しそうだな。お前はあんまり身体が大きくないし……っというか、明らかに弱そうだな。俺の方が強いんじゃないか？」

酷い言われようだが、まったく異論はなかった。レオン自身も、それは自覚している。

実際、レオンは村の中でも、あまり腕っ節が強いとは言えなかった。身長は普通くらい。身体もあまり逞しいとは言えない。幼い頃は、よく女の子と間違えられたほどで、きっと、母親に似たのだろうとよく言われる。黒い髪と濃い瞳はまさに母親ゆずりである。だが、母親には魔法の才能が少しだけあったのに、それはレオンにはさっぱり遺伝しなかった。

多少残念ではあるが、レオンはあまり気にしていない。父親も母親も、レオンの旅立ちを応援してくれた。優しい両親だから、それだけで十分だ。

レオンは苦笑しながら言った。

「そうですね。一応はいろいろ訓練してみたんですけど」

「なんかさ。一年くらいたったなら、あそこの雑貨屋か何かで働いてる気がする」

「そんな事は……ないとは言切れないですね」

もしダンジョンで大怪我でもしたら、そうなっているかもしれない。

その返答に、御者の男は少し口元をあげる。

「謙虚だねえ。まあ、身体が小さいアスリートでも、伝説になった奴はいるんだ。スニークとかはいい例だよな。お前も大方、その辺りを目指してるんだろ？」

その質問はレオンには答えにくいものだった。

普通はそこで、はいとかいいえとか、はっきり答えられるのだ。

冒険者を志す人達は、みんな確固たる目標というか、指針がある。サイレントコールドとかスニークというのは、冒険者として伝説になった人達に与えられた称号で、今を生きる冒険者達の目標でもある。だが、彼らの名前には、それ以上の意味もある。

仕方なく、レオンは正直に答える事にした。

「いえ、その・・・なんていうか、僕は分からないんです」
「へ？」

男が驚いた表情でこちらを見る。予想していた通りの反応だった。そんなに驚かせて申し訳ないという気持ちだが、レオンの心の中で急速に膨らんだ。

若干焦りながらも、慎重に言葉を選んで説明する。

「そのですね・・・実は全く前世の記憶がないんです。イブ様どころか、夢自体も全く見た事がなくて。だから、冒険者になったら分かるんじゃないかと思って、決心したんです。もし一人前の冒険者になれば、アーツを手に入れられたら、前世が分かるんじゃないかって」

これで分かって貰えるだろうかと不安になりながら、レオンは御者の男の顔を見つめる。

その男は目を見開いたまま固まっていた。彼のこんな顔を見るのは初めてだ。村を経ってからまだ一日半ほどの付き合いだが、いつも気さくで余裕のある男。まだ若く見えるが、自分よりは明らかに年上だし、自分が彼の年齢になった時、彼くらい落ち着きある大人になれているとは思えない。そんな男が、思考停止するほどの事実なのだ。頭では分かっているものの、目の当たりにしてみると、自分でも意外なくらいだった。

「・・・やっぱり変ですか？」

おずおずと聞くと、男はやっと我に返ったようだった。

「あ、いや・・・まあ、そうだな。少なくとも、そんな奴は初めて聞いた」

「初めてですか？やっぱり珍しいんですかね」

「珍しいっていうか・・・そんな奴がいるとは思わなかった」

レオンはそこで、かねてからの懸念を相談してみる事にした。

「これ・・・ギルドに話しても、受け入れて貰えると思いますか？」

男は難しい顔をしながら前を向いた。

レオンにしてみれば、前世が見えないというのが、冒険者を志す最大の動機でもあり、また、最大の懸念でもあった。自分には見えないその前世というものを、多くの冒険者は自分の指針にする。前世が剣士ならば剣士の道を、魔術師なら魔術師の道を志すものなのだ。それが最も自分に適した道で、何より、前世の記憶がその楽しさを教えてくれる。

その指針がない自分は、いわば真つ暗闇にいる状態。これがどれくらいのハンデなのか、自分では分からないのだが、不安は不安だった。

黙ったまましばらく考えていたが、やがて唐突に口を開いた。

「俺さ。今は見ての通りの商売人だけど、夢の中では料理人なんだよ」

突然の話題に、レオンは反応が出来なかった。

「料理人っていつても、俺に見えるのは見習いの時の記憶だけなんだけどさ。しかも、そんなに大きくないレストランなんだ。だから、まあ、そんなに腕がいいわけじゃなかったんだろうな。だけど、料理に魅せられているのは、もの凄く伝わってくるわけ。見習いだから、自分の好きな料理なんか作らせて貰えないんだけどさ。でも、それでも楽しかったんだ。食材を前にした時の高揚感だけは変わらない。今だって、料理人じゃないけど、料理は好きなんだ。昨日の煮込み料理も旨かっただろ？」

レオンは頷く。確かに素人の料理ではなかったが、行商だから料理も自然に身についたのだらうと思いきんでいた。

「そんな俺でも、今は料理人じゃなくて行商をやってる。もちろん、食材をみる時には役に立つ事もあるけど、せいぜいそんな程度。だから、まあ、前世なんてその程度だと思えばいいんじゃないか？ギ

ルドの方も、まあ困るかもしれないけど、みんながみんな、前世と同じ道を選ぶってわけじゃないと思うし・・・ユースアイのギルドは小さいところだから、いきなり追い返したりはしないと思うな。もつと大都市だと、大勢いて忙しいから、坊主みたいな初心者相手にされないかもしれないけど」

「そうですか・・・」

レオンは少し考え込む。

そこで男が可笑しそうに言った。

「今から戻れっというのはお断りだからな
慌ててレオンは首を振る。

「いえ！全然。あの、話して貰ってありがとうございます」

「あんな話でよければいつでも。しかし・・・前世の記憶がないから冒険者になりたいっというのも、結構な話だよなあ」

「やっぱり変ですよね」

「だなあ。でも、もしかしたら、お前、凄い奴なんじゃないか？」

突然の言葉に、レオンは戸惑う。

「え・・・何ですか？」

「だって、前世がないなんて奴、相当なレアなわけだ。もしかしたら、お前1人かもしれない。実は、凄い秘密があるとか、そういう事かもしれないだろ？」

「いや、秘密って言われても」

「もしかしたら、歴史に名を残すんじゃないか？サイレントコールドみたいに」

「だから僕、魔法使えませんって」

「じゃあ、スニークみたいに」

「僕の事、弱そうだって言ってたじゃないですか」

「いや、失敗したなあ。そんな大物だとは思わなかったから」

「あの、人の話を・・・」

「俺、伝説の男の旅立ちを案内した男になったわけか。どうせなら、もう少し為になる話をしとくんだったなあ。いや、今でも遅くない

か。そうか。そうだな。よし、じゃあ、とりあえず、俺の女性遍歴をざっと・・・」

全く為にならない予感しかなかった。

「いや、それはちよつと・・・」

「そうか？ 確実に為になると思うけど。お前だって、これから何人もの女性を泣かせることになるわけだし」

「勝手に変な予定を立てないで下さい」

「いやいや。絶対泣かせるぞ。冒険者だって、いろんな所をふらふらするわけだし。つまり、それだけ出会いがあるわけだからな。

特にお前は、腕っ節は弱そうだけど、見た目は悪くないっていうか・・・絶対、各所で女の子をひっかけていくタイプだな」

「人聞きが悪いですよ」

そこで急に、男の目が細くなった。

「よく考えたら、そういうタイプの男が一番迷惑なんだよなあ。うるちよろしないで一力所に留まってくればいいんだけど・・・でも、お前は伝説になってしまいうわけだから、そんなわけにもいかないだろうし」

何か言い返そうとしたが、なにやら雲行きが怪しかったので、黙り込む。

男の横目には明らかな敵意が込められていた。

「そうか。そうだよなあ。将来伝説になるとはいえ、今はまだひよっこなわけだ。ここでさくつと処分しておくって手もあるよなあ。いや、それどころか、ここで俺が倒せば、もしかして、俺が伝説の男って事に・・・」

「いえ、ならないです・・・よ、ね？」

最後の方は声にならなかった。男がすつとこちらを向いたからである。

もの凄い目をした男に睨まれる格好になった。

まだ平原の手前の山奥。

逃げたら逃げたで、気温や獣といった敵がいる。食料もほとんど

ない。

どうしよう。

だが、不意に男の表情が緩んだ。
助かった。

レオンの正直な感想はそれだった。

男がまた前を向きながら言う。

「まあ、そういう事だから」

急な言葉に、レオンは戸惑う。

「何がですか？」

「不用意に女に手を出すのはまずいつて事。変なところで恨みをか
つたりするからさ。だから、気をつけた方がいい。為になった？」

「・・・はい」

気をつけるもなにも、そんなつもりはさらさらないわけだから、
はつきり言つて余計なお世話だったが、口にすることは出来なかつ
た。

少なくとも、さっきの眼差しを忘れるまでは。

何事もなかったかのような口調で、御者の男は口を開く。

「しかし、天気いいなあ。これだと、明日の朝には着けそうだ。
お前もそのつもりで準備しとけよ」

「あ、はい。分かりました」

男は機嫌良さそうに口笛を吹き始める。全く聞いた事のない、テ
ンポの速い曲だった。

レオンはなんとなく、眼下に広がる平原を見つめる。

下っていく山道も、徐々に雪が減りつつある。標高が下がってき
た証拠かもしれない。ずっと山奥で育ってきたレオンにとって、初
めての下山。不安もあるが、やはり期待の方が大きい。御者の彼が
言うように、多くの人との出会いがあるだろう。最初に会った彼か
ら得た、記念すべき最初の教訓は、多少残念な内容だったけれど。
でも、面白い。

レオンは微笑む。きっとこれからそうだ。きっと楽しい事がた

くさんあるはず。

この先の平原。春の草原の中にある小さな町。ユースアイには、その姿も徐々に近づいてくる。

風も次第に暖かくなる。

春。

旅立ち。

雪の下から新芽が顔を出す。そんな季節だった。

導きの妖精

毛の長いマフラーを引きずったヒヨコが、頭の上を右往左往して
いる。

簡単に表現するなら、そんな感じだった。

レオンは自治都市ユースアイのギルド事務所にいた。正確には、
冒険者ギルド・アンリミテッドのユースアイ支部事務局。だけど、
この町まで連れてきて御者の人も、ここに来る途中で道を尋ねた人
も、皆がここを、単にギルド事務所と呼んでいた。それどころか、
目の前に座っている受付のお姉さんでさえ、正式名称では呼ばなか
った。レオンが正式名称を知ったのは、この入り口に書いてある
のを読んだからだが、それも掠れてしまっていて、かなり読みにく
かった。

入った途端にいかつい男達に睨まれる。そんなシチュエーション
を予想していたのだが、聞いていた通り、人は少なかった。それで
も、ぴりぴりした雰囲気の方が数人ベンチに腰掛けていたので、レ
オンは少し緊張した。

それでも、何事もなく窓口まで行き、冒険者見習いとして登録し
たい旨を説明すると、あっけなく手続きが始まった。田舎者のレオ
ンにとって、こういう手続きは初めてなので、何か失敗しないか心
配だったが、とりあえず、最初は上手くいったようでほっとした。

その矢先に、頭に飛び乗ってきたのが、この生物だった。

「……あの、すみません」

おずおずと聞くと、受付の女性がこちらを見上げる。自分より年
上のお姉さんで、理知的で落ち着いた雰囲気の人である。彼女はレ
オンの書類を作ってくれているらしく、椅子に腰掛けたままだった。
「はい。何か？」

ブラウンの瞳には、こちらをからかっている色は見えない。だが、

レオンの今の状態に気付いていないわけがない。

やや躊躇したものの、聞かないわけにはいかなかった。

「この、頭の上をうるちよろしてるのは・・・」

当然の質問だと思ったのだが、受付の人はきよとした顔で聞き返してきた。

「カーバンクルですけど・・・」

「いえ、それは僕にも分かります」

それくらいはレオンも知っていた。色違いだが、村に一匹だけいたからである。

「そうじゃなくてですね・・・なんで、僕の頭の上をうるちよろしてるんですか？」

受付のお姉さんは、ようやく理解したという顔になる。

「あ、すみません。最近だと、みなさん既にご存じの場合が多いので、説明を省略させて頂いていたんです」

はあそうなんですかと、レオンは生返事を返す。つまり、知らなかった自分の方が珍しいという事のようなのだ。

「そのカーバンクルは、そうやって貴方の前世を見ているんです。もちろん全部は見られませんが、一部を読みとる事が出来ます。それを私に伝えて貰って、今度は私がギルドのレコードを調べます。そうすれば、貴方のおおよその適性が分かるんですよ」

そんな事が出来るとは初耳だった。村にいたカーバンクルは、ただのペット同然で、ほとんど役には立っていなかったからである。

「カーバンクルって、そんな事が出来るんですか？」

「あ、でも、それはギルドに住み着いている子だけです。他の場所にいる子には出来ないみたいです。特技とか芸みたいなものじゃないかとか、そういう役目として居着いているんじゃないかとか、諸説あるみたいですけど・・・」

「へえ・・・」

そこで、レオンの頭の上にいたカーバンクルが、受付の女性の方に飛び移った。反動のようなものはほとんど感じない。感じたのは、

ふさふさの毛の感覚だけだった。

藍色の瞳が一瞬だけこちらを向くと、そのまま受付の女性の頭の上って、そこでまたくるくと堂々巡りを始めた。

それを全く気にかける様子もなく、受付の女性は微笑んで、右手を部屋の奥に向けた。

「もうしばらくかかりますので、そちらにおかけになってお待ち下さい」

レオンは軽く頭を下げてから、示されたベンチに腰掛けた。入った時にそこにいた男達は、もういなかった。

他に見るものもないので、レオンは、女性の頭の上をくるくる回っているライトイエローの生物をなんとなく眺めていた。女性は気にする素振りもなく、書類作りに精を出しているようだ。

カーバンクル。別名、導きの妖精。

見た目で一番近いのは、キツネやイタチかもしれない。同じ4足歩行の生物。それを子供サイズに縮小して、体毛を長くふさふさにした生物というのが、だいたいの外見である。

だが、その実態の多くは謎に包まれている。

例えば、体重が非常に軽い事。体毛や瞳の色が様々な事。群を作らない事などが挙げられる。

だが、最大の不思議は、この生物には死というものがないという事実である。

カーバンクルには寿命がない。少なくとも、自然死した個体は知られていない。さらに、カーバンクルは食事出来るが、しなくても生きていける。食べても排泄はしない。眠る事もするのだが、それが必要なのかは不明。呼吸が必要なのかすらもはっきりしない。水中を普通に歩く個体もいるという噂だった。もっと言えば、どうやって数を増やしているのかも、まるで分からない。オスとメスがあるのかすらも分かっていないのだ。

今までにいろいろな学者が調べたが、まるで何も分かっていない。捕らえようにも、いつの間にか逃げてしまう。だから、大昔にもう

諦めてしまったというのが、レオンの村の長老の話だった。

まさに不思議生物なのだが、大昔の人達の間でも、そもそも生物となのかという話にはなっただけらしい。

そこで、とりあえずのカテゴリとして、カーバンクルは妖精という事になっている。他に妖精と分類されているものはないから、専用枠である。それだけ特殊な種なのだ。

そういうのはつきりしない存在なのだが、人を襲うわけでもないし、作物を荒らす事もない。気ままだが、大人しいし、鳴いたり暴れたりするわけでもない。特別な世話も必要ないし、懐いた人間なら言うことも聞く。そして何より、見た目が愛らしい。

そういうわけで、レオンの村ではペット以外の何者でもなかった。何か特殊能力があったわけではないが、見た目で少し癒される。見かけたら撫でてやって、何か食べ物でも与えてみる。それを食べる姿にまた癒される。はつきり言って、かなり良いご身分である。だけど、まあそれくらいはいいかなと思わせるくらいの愛らしさがあった。

だけど、ここのカーバンクルは立派に仕事をこなしているようだ。能力の理屈は不明だし、見た目には、人の頭の上をくるくる回っているだけなのだが、このギルドの一翼を担っているらしい。思ったより多才だった事に、レオンは驚きだった。

やがて、仕事が終わったのか、ぐるぐるしていたカーバンクルは不意に足を止めて、そのまま女性の頭の上で丸くなった。色合いもあって、金の王冠みたいに見える。

妖精は目を閉じていた。まさか、そこで休憩するつもりだろうか。その数秒後、女性は書類を持って立ち上がった。まったく頭上を気にする様子はないが、カーバンクルの方もバランス感覚がいいのか、張り付いたように動かなかった。

そのまま、女性はカウンターの奥の扉の向こうに消えた。

見るものがなくなってしまったので、仕方なく、事務所の中を見回してみる。

木で出来た建物。このベンチも、カウンターも椅子も、全部同じ木材を使っているようだ。照明はあまり多くないが、それでも十分なのだろう。あまり広くはない部屋に、事務員らしき女性が1人。レオンの母親くらいの年齢だろうか。その女性も、さっきの受付の人も、全く同じ服を着ている。ギルドの制服なのだろうか。黒が基調で、なんだが格好いい。そういう服を着ている人は、もちろんレオンの村にはいない。御者の人は小さい町だと言っていたが、レオンにしてみたら、十分都会である。

ここから始まる。

不意に頭を過ぎったその言葉に、レオンは急に気分が高揚してきた。緊張していたためだろうか、今まで忘れてしまっていたワクワク感が戻ってきたのである。

新しい世界。その始まりの場所。思ったより、劇的な事はなかったが、田舎者の自分にはこれくらいがちょうどいい。あまり刺激が強すぎても困る。

ここから頑張って、何とか一人前の冒険者になる。とりあえずはそれが目標だが、そこまでの道のりを想像するだけでも、レオンは楽しみで仕方なかった。

新しい出会いがあつて、新しい事を知って、新しい自分を見つける。

そこでレオンは、ふと気付いた事があった。

自分の前世を見たい。それがこの旅立ちの目的のひとつでもある。だが、さっきの受付の女性は、あのカーバンクルが自分の前世を読みとってくれると言っていた。そして、詳しく調べるとも言っていた。

もしかして、それではつきりするのだろうか。

はつきりしてしまうのだろうか。

もしここで分かってしまったらと思うと、レオンの胸中は複雑だった。目的が達成されるのだから、もちろん悪いわけではない。だからといって、こんなにあっさり分かってしまうと、自分の悩みはな

んだったのかと思えてしまう。

どちらがいいんだろう。

聞きたいような、聞きたくないような。

レオンの予定では、自分の前世が分かるのは、見習い冒険者卒業の時だった。

一人前の冒険者として認められるには、魂の試練場というダンジョンを攻略しなければならない。その最奥で、その冒険者はカーバンクルと会おうと言われている。そのカーバンクルが、自分の魂の場所まで案内してくれると言われているのだ。

その魂の名前がアーツ。

前世の自分が、来世の自分の為に残した遺産。それを手に入れる事が、冒険者の証。

それを手に入れたら、自分の前世の事が分かる。

そんな予定を立てていたのだけれど。

「レオンさん」

不意に名前を呼ばれて我に返ると、いつの間にか、受付の女性が戻ってきていた。頭の上の妖精もそのままである。本当に装飾品みたいだった。

レオンは慌てて立ち上がって、窓口に向かう。

ここで分かってても、まあ、それはそれでいいじゃないか。懸念がひとつ解消されたと思えばいい。どちらにしたって、冒険者を目指すのは一緒なんだから。

だが、どうやらそんな話ではなかったようだ。受付の女性の表情は、傍目にも分かるくらい困惑顔だったのである。

「あの・・・申し訳ないんですけど、該当するレコードが見つからなかったんです」

レコードというのはよく知らないが、要は、自分の前世がよく分からなかったという意味だろう。

嬉しいような、残念なような、入り交じったような表情で、レオンは頷いた。

「そうですか・・・あの、やっぱり、珍しい事なんですか？」

女性は控えめに頷く。少し揺れたはずだが、頭上のカーバンクルに起きる気配はない。

「ええ、まあ・・・それで、出来たら、レオンさん自身が見た前世の記憶を教えてくださいませんか？そこからまた探してみますので」「記憶ですか」

レオンは苦笑した。ないものは教えようがない。

「あの・・・？」

「あ、いえ、実はですね・・・あの、驚かないで下さいね」

「驚くような前世なんですか！？」

何か期待するような響きが含まれていた気がしたが、それは必死に無視した。

「実は、僕、前世の記憶がないんです。今まで全く、夢を見た事がなくて・・・」

レオンはなるべく驚かせないようにゆっくりと言ったのだが、無駄だったようだ。

思いつきり気まずい静寂。

受付の女性は完全に固まっているし、奥で事務をしている人も、手が止まっていた。

他に誰もいなかったのが、救いといえば救いだった。

カーバンクルだけが呑気に眠っている。

どうしようかと困り果てたところで、受付の女性が絞り出すように言った。

「・・・あの、冗談ではないですよね？」

レオンは慌てて手を振る。そう思われるのが一番困る。

「いえいえ！そんな、冗談なんて・・・」

それを見て、受付の女性は額に手を当てた。何やら難しい顔をしていた。

「・・・もしかして、何か問題があったりしますか？」

もしかしたら追い返されるかもしれないという懸念が、再び顔を

見せ始める。

しばらく間があつてから、女性はこちらを向いた。

「えつとですね。ギルドに加盟する事は可能です。それ自体には、特に資格というものは必要ありませんので。ただ、前世が分からないというのは、レオンさんにとって不利になります。適性が分からないという事になりますから、何でも手探りという事になります。ですが、あの、もちろん、ご存じだと思いますが・・・」

そこで女性は間を取った。レオンもなんとなく姿勢を正した。ここからが、特に重要な話なのだ。

「冒険者は戦闘に重きを置きます。最初はある程度の安全を確保してありますが、基本的には命がけです。ですから、手探りと口で言うのは簡単ですが、その手探りにも命の危険がつきまといまいます。人より苦勞するのはもちろんですが、冒険者の場合は、苦勞だけで済まない事もあるんです。あと・・・これは申し上げにくいんですけど、レオンさんが仲間を探されるときに、恐らく障害になると思います。他の皆さんも命がけです。冷たいようですが、適性を十分に生かせていないレオンさんを受け入れる人は少ないと思うんです」

正直、シヨックな話だった。

こんなに自分にハンデがあるとは思っていなかった。自分だけで済むならともかく、仲間が見つからない可能性まであるのだ。

そうなったら、ずっと1人で戦うのだろうか。

それは無理だろう。何より、辛いだろう。

だけど。

レオンは微笑んだ。

「大丈夫です」

女性の瞳が少し大きくなる。

「心配してくれてありがとうございます。でも、とりあえず、やってみようと思うんです。あまり強くなれないかもしれないし、仲間も出来ないかもしれないけれど・・・でも、やってみないと分からないですから。とにかくやってみます。それでもダメだったら、村

に帰るなり、他の仕事を見つけるなりします。それくらいの決断は出来るつもりです。だから、挑戦だけはさせてくれませんか？」

「しばらく1人のままかもしれません。1人はつらいと思います。無理して冒険者にならなくてもいいんですよ？」

「1人じゃないですよ。ここまで乗せてきてくれた行商の人が言っていました。この町は良い人ばかりだって。だから、なんとかariusます。ギルドの受付のお姉さんも、すごく優しい人ですし」

女性の真摯な瞳としばらく見つめ合った。

だが、やがてふつと微笑んでくれた。

「分かりました。では、ギルドとして正式にサポートさせて頂きます。何か分からない事がありましたら、何でも聞いて下さい」

「はい。これからよろしくお願いします」

レオンが頭を下げると、女性も少し笑って頭を下げる。

「よろしくお願いします」

その揺れには耐えられなかったのか、黄色のカーバンクルが頭からカウンターに滑り落ちてきた。

だが、目覚める気配はなかった。

気持ちよさそうに眠っている。

レオンと女性は、それを見て笑った。

「お疲れみたいです」

「そうですね。レオンさんの前世がなかなか見えなくて、大変だったみたいです」

「・・・すみません。起きたら代わりに謝っておいて下さい」

「それでしたら、今どうぞ。撫でてやると喜びますから」

レオンは少し意表を突かれたが、すぐに撫でてみた。

村のカーバンクルとは色が違ってても、手触りはほとんど同じだった。ふかふかでふわふわ。いつまでも触っていたくなる。

「・・・あの、名前はなんて言うんですか？」

「私ですか？」

その言葉に、レオンは気付いた。

「あ・・・そういえば、聞いてませんでしたね」

「聞きたかったんですか？」

女性は悪戯っぽく笑う。なんというか、年上の余裕みたいなものを感じた。

少しどきどきしたが、そこで蘇ってきたのは御者の言葉だった。妙なトラブルは遠慮したい。

「あ、いえ、すみません、その・・・聞かなくても、大丈夫ですよ
ね」

戸惑ったように言うと、それが可笑しかったのか、女性は吹き出した。

「すみません。そんなに困るとは思わなかったので・・・」

「そ、そうですよね。こちらこそ・・・」

「ケイトと呼んで下さい」

そう名乗ってケイトは微笑んだ。理知的で落ち着いた、ブラウンの髪と瞳の女性。恐らく20歳前後だろう。格好いい制服と、まとまったヘアスタイルのせいで大人っぽく見えるだけかもしれないけれど、少なくともレオンより年下という事はない。

「あと、この子はシニアです。もちろん、私が名付けたわけじゃないですけどね。だけど、このギルドで一番の年上なのは間違いないです」

「ということは、もしかして、町が出来てからずっといるんですか？」

「はい。少なくとも、もう400歳以上」

「へえ・・・」

どういうわけか、カーバンクルは一カ所に居着く事が多いらしい。人から聞いた話だったが、ここの妖精も、その例に漏れないようだ。その最長老の大御所も、今は愛らしい姿で寝息をたてていた。

マスター・ガレット

ユースアイはのどかな町だった。

きつと住みやすく豊かなのだろう。少なくとも、レオンのいた村とは比べものにならないほど過ごしやすい。この時期、村はまだ雪解けしている頃だが、ここは完全に春の装いである。町の周囲は綺麗な緑一色だったし、空気もまったく冷たくない。山を下つてきたとはいえ、ここもそこそこの標高があるはずだが、それでもこんなに違いがあるのかとレオンには驚きだった。

町の中は思ったほどうるさくはないが、もちろん、村よりも圧倒的に人が多い。そもそも、町の大きさが違うのだ。村何個分だろうかと思えるくらいの広さがある。大通りには石畳が敷いてあつて、石造りの建物もある。どちらも、村にはなかった物だった。そもそも、道なんて概念がない場所だったのだ。

そんなわけで、田舎者のレオンだと、道に迷う可能性が十分にある。闇雲に歩いたら、確実に迷子になる自信があつた。ギルド窓口のケイトさんに、大通り沿いにありますと説明されていたので、とりあえず石畳の上から出ないようにしているが、それでも不安なので、度々道を尋ねた。結局、歩いて10分くらいですと言われた場所にたどり着くまでに、30分はかかっただろう。もつとも、あまりの物珍しさに、思わず商店などを眺めたりしていたので、それで余計に時間をとられたのもあつただろうけれど。

それでもなんとか、目的の場所にたどり着いた。まだ日は高い。もしかしたら、日が暮れるまで迷う羽目になるかもしれないと覚悟していたが、なんとかなったようだ。

レオンが立っているのは、木製の巨大な両開きのドアの前。看板には、ガレットの酒場の文字。

見上げると、本当に巨大な建物だった。レオンにしてみれば、こ

の町の建物はどれも十分に立派な物ばかりだったけれど、この建物は立派を通り越して、否応なく威圧感が感じられる。恐らく、木造3階建て。もしかしたら、4階があるのかもしれないが、レオンにとっては大差ない違いだった。幅も奥行きも、もの凄く広い。凄い物だという感想はもちろんなあったが、どちらかというと、倒れてきそうで怖いなという思いが強かった。いったいどうやって、こんな巨大な物を支えているのだろうか。

何はともあれ、自分はここでお世話になるんだ。

レオンは深呼吸した。

やっぱり、少し緊張する。

そう思った時だった。

「じゃあ、ちよつくら行つてきまーす」

扉越しに、女の子の声が聞こえた。活発そうな、明るい口調だった。

それに答えたのは、対照的に、低くて、野太い声だった。

「しつかりと息の根を止めてこい！」

もの凄く物騒な発言だったが、声に似合い過ぎていた。

「分かつてるって。というか、今日も来るわけ？」

「俺の勘がそう言ってる。新米はこの時期になると、懲りもせずに次から次へとやってくる、相場は決まってる」

「そっかー。まあ、そうかもね」

「だから、ここできつちり処分しておかねえと面倒な事になる」

「でもさー、ケイトさんからの依頼を待った方がよくない？」

「あんなもん待ってられるか！とつと行つて、さくつと仕留めて来い！それがめえの仕事だろうが！」

「はいはい。じゃあ、まあ、出会い頭にぶすつとやってくるよー」
そこで扉が開かれようとしていた。

レオンはどうしようか迷った。

新米って、自分みたいな冒険者見習いの事だろうか。

その息の根を止める。処分する。さくつと仕留める。

何でだろうか。

ケイトさんからの依頼とか言っていたけど。

その理由は分からない。分からないけれど、もしかして大ピンチだろうか。

逃げようかとも思ったが、扉が開かれるまで一瞬だったため、そんな暇はなかった。

扉の正面にレオンは立っていたため、必然的に、出てきた人物と目があった。

彼女もまた、ブラウンの瞳をしていた。年の頃は、たぶんレオンと同じ10代半ばくらい。利発そうな顔立ちに、栗色の髪を高い位置で縛ったヘアスタイルが相まって、より活発そうな印象が際だっている。

扉越しに聞こえた声は彼女のものだろう。だけど、顔立ちはともかく、あまり荒事が出来るようには見えなかった。一般的な少女のどちらかという華奢な体つき。しかも、厚手の淡いピンクの服の上に、白いエプロンを着けている。すごく平和的な格好だ。

それでも、出会い頭にぶすつとされないか、一応警戒してしまった。

「あ、もしかして、見習い冒険者の人？」

少女がさばさばとした感じで聞く。

ここではないと言ったら、今度こそ刺されるのだろうか。

だが、レオンが返事をする前に、少女がすたすたとこちらに歩み寄って来て、あつという間に腕を掴んできた。

「え？あ、いや、その・・・」

慌てるレオンに、少女は笑いかける。屈託のない笑みだった。

「まあ、いいからいいから。お父さんに挨拶するんでしょ？」

「お父さんって？」

「いいからいいから。とにかく、入った入った」

楽しそうにそう言いながら、少女はレオンを店内に引っ張り込んだ。

店内は想像通り、もの凄く広かった。

中央の奥にカウンターがあり、その両脇には上り階段がある。そして、それ以外の場所には、丸いテーブルとイスが山ほど置いてあった。こんな大規模な建物の中に入るのは、もちろん初めてである。床も壁も木製で、特に光沢があるわけではないのだが、不思議と輝いて見えた。照明がたくさんあるせいだろうか。その照明も、見上げるくらい高い位置にある。

物珍しさに店内をキョロキョロ観察しているレオンを、少女はぐいぐいとカウンターまで引っ張っていく。屋内には食欲をそそるいい匂いが漂っていた。

店内のテーブルには空席が多いが、それはまだ昼間だからだろうか。それでも、こんな時間から酒を飲んでいるお客が10人ほどいた。そして、その全員が強面で、体つきがいい。間違いなく荒事をしている人達だろう。

つまり、冒険者達。

彼らと同じ場所にいる。その事実嬉しくなったが、目が合うと睨み返されたような気がしたので、じろじろ見るのは控えた。

10秒余りの道のりで、カウンターまでたどり着く。その辺りは、つんとした匂いが漂っていた。お酒の匂いだろうか。

そこにいる人物を見て、レオンは驚く。

なんというか、本当に想像通りの人物だったのだ。ギルドでは肩すかしだったが、時間差でついに巡り会ってしまった。特に会いたかったわけではないけれど、意味もなく感動した。

カウンターにいた男は、少女と言葉を交わす事なく、いきなりレオンに質問した。

「見習いか？」

「あ、はい・・・あの、ガレットさんですよね？」

男は値踏みするようにレオンを見てから、少女の方を向いた。

「おい。お前はとっとと仕事してこい」

「なんでー？こっちの方が面白そう」

「見せ物じゃねえんだ。いいから、さつさと終わらせてこい」

「しつかにないなあ。まあ、また後で会えるからいっかなー」

少女は諦めたようにそう言つと、不意にレオンの肩を叩く。

レオンがそちらを向くと、少女は不敵な笑みを浮かべた。

「頑張つてね。うちのお父さん、この町で最強だから」

「最強？」

「じゃあね。また後で」

そう言つてウインクすると、軽やかな足取りで店から出ていった。何を頑張るんだろうとレオンは首を捻つたが、よく分からなかった。とりあえず、刺されなくて済んだ事が、よかったといえよかった。

「名前は？」

唐突に問われて、レオンはまたカウンターの男に視線を戻す。

「あ、すみませんでした。レオンです」

男は腕を組んだ。それだけで、剥き出しになった二の腕に相当な大きさの力瘤が出来た。

まさに想像通りである。

カウンター内に立っている目の前のこの男こそ、レオンがおぼろげに想像していた人物そのものだった。冒険者に志願した自分を出迎えるのは、きっとこういう人物だろうと思つていたのである。

浅黒い肌に逞しい体つき。厳めしくて、彫りの深い面構え。頼りになる人物というのはもちろんだが、見習い冒険者を指導する立場の人物としても、申し分ない容姿だった。具体的には、それだけの威厳と威圧感が間違いなく備わっている。そして、腕っ節もあるに違いない。少なくとも、腕相撲では絶対に勝てないし、腕を折られたとしても不思議はなかった。

まだ名乗つて貰つていないが、彼が恐らく、この酒場の主人のガレットだろう。

「レオン。お前、ギルドに行ったか？」

「はい。それで、ここに挨拶してくるように言われて・・・」

「そうか」

男はレオンの言葉を遮ってそう言った。

こちらをじっと見つめてくる。見つめるというのは穏やかな表現で、レオンにしてみれば、睨まれている感じだった。

「1年だ」

突然、男はそう言った。

「はい？」

「1年だけは面倒みてやる。だが、それで駄目なら諦める。これが約束出来るか？」

レオンは自分に問いかけてみた。

周囲からは静かな話し声が聞こえてくる。誰もこちらを気にしている様子はない。それも当然だと言えるだろう。自分はまだ見習い以下の、とるに足らない存在。

レオンの答えは一つだった。

「あの・・・1年もお世話になっていいんですか？」

こんな自分を1年も面倒をみてくれるなんて、こんなに有り難い話はない。

男の太い眉がぴくりと動く。

だが、次の瞬間、にやりと笑った。男臭い、だけど、さっぱりして印象のいい笑みだ。

「ガレットだ。寝床と飯は俺に任せろ。特に、お前の身体はまだまだ成長の余地がある。もつと食わせてやるから覚悟しろ」

「食わせてって・・・そこまでして貰っていいんですか？」

そう聞くと、ガレットは笑った。

「謙虚な奴だな！いいから食え！とにかく食え！ちゃんとギルドから金を貰ってるから、そんな事は心配いらねえ。お前が立派な冒険者になって、そこで儲けて金を返せばいいんだよ」

「あ、なるほど・・・」

レオンは頷いた。そういう仕組みだとは知らなかった。

「お前、何も知らないんだな。最近は、妙な知識ばかりつけた連中

が多いから、それが当然ってふんぞり返ってる奴がいるんだ。そういう奴を見極めて、腐った奴を半殺しにするのが俺の仕事だ」

「半殺しって・・・」

店に入る前の、物騒な会話が頭を過ぎる。

「そういうわけだったんだが、俺はもう決めた。お前は面倒みてやる！1年間、せいぜい頑張ってみろ！」

そう言って、愉快そうに笑いながら肩を叩いてきた。床が抜けるんじゃないかと思うくらいの衝撃で、きっと骨が少し歪んだだろう。だが、半殺しに遭うよりは何倍もいい。

「これからよろしく願います」

頭を下げるレオンを見て、ガレットはまた笑った。そして、自分がイスに腰掛けると、レオンにも座るように言った。

レオンも近くのイスに座った。

「俺も昔は冒険者だったんだ」

ガレットはそう切り出した。

「お前のような見習いの時期も当然あった。だから、多少はアドバイス出来る。ただ、専門的な事は難しいが・・・レオン、お前はジニアスか？」

「いえ、一応アスリートの方を」

前世云々の話は、出来たら避けたいところだった。

ガレットはレオンの身体を一瞬だけ眺める。

「そうか・・・しかし、お前だと重い鎧は無理かもしれねえな。武器屋には行ってみたか？」

「いえ、まだ全然」

「そうか。なら、まだ日が高いうちに行ってこい。鎧の仕立てには時間がかかるから、一日でも早い方がいい」

「分かりました」

「時間があつたら、道具屋と、あと伝承者にも会ってこい」

「伝承者？」

「それも知らねえのか・・・くそ、肝心な時に、あの馬鹿娘はいね

えしな」

馬鹿娘というのは、恐らくさつきまでいたエプロン姿の少女だろう。今はどこかに行っているが、それは目の前の父親が追い払ったからである。だが、それを堂々と指摘する度胸はない。

「まあ、あの馬鹿に期待しても仕方ねえな。とりあえず、今日するべき事は分かったな？」

「はい。場所が分からないですけど」

「それは教えてやる。だが、その前に・・・」

急にガレットはイスから立ち上がって、そのままカウンター奥のドアを開けて、その中に入ってしまった。

調理場だろうか。開けた瞬間に、いい匂いが漂ってきたので、なんとなくそう思った。

そういえば、まだ昼食を食べていなかった。

お腹が減った。そう思った瞬間だった。

ガレットがドアの向こうから姿を現す。だが、レオンの目が釘付けになったのは、彼が持っている物だった。

羊肉だろうか。その巨大なステーキ。

こんな肉の塊を見るのは、お祭り以外では初めてだった。ガレットはその肉が盛られた器を、レオンの前に置いた。

「とりあえず、今日はこれくらいで勘弁してやる」

レオンはそれをまじまじと見つめてから、急に居ても立ってもいられなくなってきた。

「いえ、あの・・・こ、こんなに!？」

ガレットは可笑しそうに言う。

「食べねえってのか?これくらい食わねえと、体力つかねえぞ」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

「何だ?男だったら、はつきり言ってみろ」

「こ・・・これ、凄く高価なものなんじゃ?」

レオンにしてみれば、当然の疑問だった。

こんな豪華な食事を食べる事なんて、村では滅多にない事なのだ。

それこそ、一年に一度の祭りくらい。量もそうだが、この金銭感覚のギャップに、戸惑わざるを得ない。

だが、しばらくの沈黙の後、ガレットは大笑いした。

「気にするな！とにかく食え！食って食って食いまくれ！そうしねえと、ここの一番って時に力が出ねえぞ！」

そう言われても、なかなか踏ん切りがつけられるものではない。

「さっきも言っただろ？ギルドから金が出るんだ。つまり、お前の先輩達が出した金だ。その先輩達も、見習いの頃はギルドの金で飯を食ったんだ。俺だってそうだ。お前は俺が出した飯を食って、それを血と肉にして、次の奴らの為に金を稼げばいいんだよ」

正直、まだ迷っていた。レオンの村はあまり裕福とは言えないからである。

だけど、これが通るべき道なんだ。

レオンは肉を切って、口に入れた。

歯ごたえがあって、肉汁が口の中に広がる。

「美味しい・・・美味しいですね！」

控えめに口にしたが、実際には想像以上の味に感動して泣きそうだった。

次々と口の中に放り込む。その勢いは全く衰えない。

ガレットはイスに座って、そんなレオンを眺めていた。相変わらずの厳しい顔の中にも、どこか優しいものが含まれていた。

「そうだな・・・夏までに体重を、今の半分増やせ」

その言葉に、レオンは吹き出しそうになった。

「半分！？半分って・・・ぶくぶくになりますよ」

「誰が肥えろって言ったんだ？食って、鍛えて、筋肉にするんだよ。いいか？夏までだ！そうしねえと、一年で魂の試練場を攻略するなんて絶対出来ねえ。とにかく、必要なのは身体だ！鍛えて鍛えて鍛えまくれ！」

そこで、店のドアが開いた。

聞こえてきたのは、先ほどの少女の声だった。

「あつれー？まだ生きてたの？」

いきなりの発言に、レオンはむせた。

「お前、仕事は？」

ガレットの声が少し低い。その目の前にいるレオンは、ステーキを頬張りながらも若干不安になった。

レオンは振り返ってみた。

少女は父親の威圧感をものともせず、すたすたとこちらに歩いてくる。

「途中でホレスに会ったから、任せてきちゃった。別にいいでしょ？」

「あいつか？なんで町にいるんだ？」

「知らないけど、別にいいじゃん、どこにいたって。それよりも・
・彼、ご飯食べてるって事は、合格なの？」

「何か悪いか？」

「悪くないけど・・・へえー」

少女がこちらの顔をまじまじと見つめてくる。やや切れ目だが、大きな瞳。あまりに遠慮のない視線に、レオンは少したじろいだ。

「おつかしいなあ・・・ちょうどぼっこにされてる頃だと思って、楽しみにしてたのに」

「楽しみって・・・」

そんな事しまないで欲しいと、レオンは心底思った。

少女はガレットに視線を戻す。

「何がよかったの？なんか、私の方が強そうだけど」

ずばずば言うなあと思ったが、どちらが強いかはともかく、自分が弱そうに見えるのは確かである。それに、実際に喧嘩する事になったら、自分は女の子を殴れないだろうから、そういう意味では間違いないと言えない。

「ギルドが許可したんだつたら、そもそも俺がどうこう言える立場じゃねえんだよ。合格も不合格もねえ」

そうなのかと思ったが、案の定、少女はすぐに反論した。

「うつそだー。今まで何人も追いついたくせに。ギルドが断った人よりも、お父さんが追いついた人の方が、絶対多い」

「俺が追いつくような奴は、どうにもならねえ奴らばかりなんだよ。そういう奴をギルドで追いついたりしたら、変に逆恨みする馬鹿もいるから、一旦許可してこっちまで連れてこいつて言っただけだ。そこで俺が綺麗さっぱり諦めさせてやる。断りの代理をしてるだけなんだよ」

「お父さんだって、逆恨みされたら困るでしょ？」

「俺に逆恨みする度胸があるなら、いいじゃねえか。その時は面倒みてやる」

「私とかお母さんとかを狙ってきたらどうしてくれるの？」

「いい度胸だ。そんな奴はどうしようもねえから、きっちり止めを刺してやれ」

「私の身は可愛くないのかー？」

「可愛いだあ？普通の娘だったらまだ分かるけどな」

「私、普通の娘！」

「誰が普通なんだよ。普通の娘は、親父の殴り合いを見て喜んだりしねえだろうが」

「むう。でも、血を分けた娘なんだから、普通は少し心配になるものでしょ？」

「心配したなあ。昔は」

「普通は今も心配でしょ！私、年頃の娘なんだけど！」

「年頃は年頃でも、お前は棘があり過ぎるんだよ！お前に手を出そうなんて命知らずな男がいるわけねえだろうが！」

「それはお父さんのせいだって！俺を倒せる男じゃないと嫁にやらかとか、そんな恥ずかしい事を堂々と言われたら、誰だってちよつと引くに決まってるでしょ！」

「それだけじゃねえだろうが！お前が今まで何人の男を返り討ちにしたと思っただけだ！そんな女に誰が近寄ろうとすんだよ！」

「下心丸出しの奴だったら、身を守って当然でしょ！」

「それらしい守り方があるだろうが！普通の娘は実力行使に出たりしねえんだよ！」

「実力があるんだからいいでしょ！」

「まずそこが普通じゃねえんだよ！」

いい加減、レオンは口を挟む事にした。

「あの！」

凄いい形相の2人に睨まれて、レオンは思わず両手を挙げた。その両手にはナイフとフォークが握られたままである。

圧倒的な視線に負けそうになりながらも、レオンはなんとか進言した。

「・・・喧嘩はやめませんか？他のお客さんもいるし」

そう言って周囲に視線を走らせてみるが、どういうわけか、誰も気にした様子はなかった。

もしかして、いつもの事なのだろうか。

ガレットとその娘は、2人同時に大きく息を吐いて、そして、一瞬で口元に笑みを見せた。

「・・・そうね。今日はまあまあよかったかも」

「そうだな。悪くない」

レオンには、その言葉の意味が分からなかった。

「え？・・・あの、どういう意味ですか？」

2人は何食わぬ顔で言った。

「親子のコミュニケーションなの。たまにやるんだけど、今日は結構いい戦いだっただわ」

「ストレス発散でもある。なかなかスッキリするんでな」

レオンの身体に、どっと疲れが押し寄せた。

どこからか、その戦いだったのだろうか。気を揉んだ自分が馬鹿みたいである。

そこで、ガレットが思い出したように言った。

「ベティ。そいつが飯を食い終わったら、伝承者の所まで案内してやれ」

「デ이지ーのどこ？」

「そうだな・・・それと、ニコルの所も」

「ニコルもー？大丈夫なの？」

「真面目な奴だから、大丈夫だろ」

「染まつちやったら困るでしょ」

「いざとなったら、俺がどうにかする。とにかく、会わせてみる」

「はい。まあ、面白そうだからいいけど」

なんて素直な返事なのだろうか。さっきの口喧嘩は本当に嘘みtaiである。そういえば、店に入る前の会話も結構スムーズなものだった。

そこでレオンは気付いた。

「あ・・・ベティさんっていうんですか？」

そちらを向いて聞くと、ベティは微笑んだ。栗色のポニーテールと瞳が印象的な、活発そうな少女。腕が立つようだが、それももしかしたら冗談なのかもしれない。

「そう。ベティ。その親父の娘で、ここでも働いてるからよろしくねー」

「あ、はい。僕はレオンです。よろしく」

「レオンはさあ・・・」

すぐに会話を始めようとするベティをガレットが止めた。

「先に飯を食わせてやれ。冷めちまうぞ」

「あ、そうだねー。さあ、とつとと食えー」

ベティが笑いながらレオンの背中を叩く。

その衝撃で食べ物が変な場所まで入ってしまい、レオンはしばらく咳が止まらなかった。

名店の看板娘

自称、ガレット酒場の看板娘のベティは、気さくというよりは、かなりの話好きな人だった。

なんとか豪華ランチを攻略したレオンを待っていたのは、彼女との苛烈なトーク。質問責めのフルコースだった。レオンを武器屋まで案内してくれる道すがら、彼女の口が休む事はない。全く遠慮のない視線と物言いに圧倒されて、レオンは個人情報ほとんど吐露する羽目になっていた。

他にも、村の事、家族の事、友達の事、さらには、気になった女の子の事まで。

そして、レオンがなるべく言うまいと思っていた事も、あつという間に暴露させられた。

「へえー。それって、記憶喪失みたいなものじゃない？」

石畳の道から、脇道に入った所だった。

ベティがそう評価したのは、前世を見た事がないというレオンについてである。

「記憶喪失ですか？」

「そうそう。こう・・・なんていうの？強いショックとか受けたら人って記憶を忘れちゃう事があるみたいなんだ。私が懲らしめてやった奴らが、よく言うのよねー。あの日の事が思い出せないって」それは思い出せないのか、それとも思い出したくないのか。いずれにしても、聞いてて楽しい話ではなさそうだ。

「前世がない人っていうのは、ちよつと聞いた事ないし。だから、忘れてると思うのが普通なんじゃないかなー。案外、お父さんに1発貰ったら、ショックで思い出すかも。やってみたら？」

「え、いや・・・1年経つてもダメだったら、その時はお願いしま

す」

ベティは可笑しそうに笑う。屈託のない笑い方だった。

「分かった」。その時は私も加勢してあげる」

「やめて下さい。そもそも、一発だけなのに、どうやって加勢するんですか」

「特別製の重いやつを貸してあげる。それで、ドカンと・・・ね？」
何か、ハンマーみたいな物を振り下ろす仕草。

「ねって言われても・・・逆に現世の記憶も忘れてしまいそうなので、出来たら素手の方でお願いします」

「あ、ここだよ」

レオンの言葉を華麗にスルーして、ベティは足を止めた。

彼女のすぐ脇に建っているのは、普通の民家をさらに縮小したような、はつきり言って小屋みたいな所だった。レオンも立ち止まって、そこをまじまじと見るが、見れば見るほどこじんまりとした建物である。看板のような物もどこにもない。小屋自体は石を積んで造つてあるようだ。

「・・・ここ、何ですか？」

ベティはその言葉も無視して、その小屋のドアを無造作に開けた。

「たのもー」

そう言つて、レオンの腕を掴んで小屋の中に引きずりこんでいく。引きずられるまま中に入ったレオンだったが、中を見ても、そこが何なのか分からなかった。狭い室内には大きい台と椅子が2つあるだけ。商品らしきものもない。レオンたちが入ってきたドアとは反対側、台を挟んだ向こう側に同じ大きさのドアがあるが、他には窓すらない。

だが、人間なら1人だけいた。

台にもたれ掛かるようにして、奥の方を向いていた少女が、こちらを振り返る。

一瞬少年だろうかと思うほどの中性的な顔立ち。服装も、白いシ

ヤツの上にポケットの多い黒のベストという、どちらかというと男性的なファッションである。それでも彼女を女性だと思ったのは、整った小さな顔と線の細い身体、そして、ベティと同じポニーテールからだった。ただし、髪色はやや赤みがかったライトブラウンで、瞳の色も明るい。凛々しい顔立ちとギャップがあつて、どこか不思議な印象がした。

少女は一瞬だけこちらを見たが、すぐベティに視線を戻した。

「何？あれならまだ出来てないよ」

容姿は少年っぽいが、声は確かに女性のものだ。

「そうじゃなくて、彼、今日見習いで来たんだ。だから、鎧の注文」
「何？」

少女がこちらを見る。レオンはとりあえず、挨拶した。

「どうも初めまして。レオンと言います」

こちらをまじまじと見る少女。なんとなく気まずかったが、とりあえず黙っている事にする。

「・・・なんか弱そうだけど、大丈夫なの？」

やっぱりそう見えるんだなあと、レオンはちよつと落ち込んだ。

「さあ？一応お父さんがオツケー出したから、たぶん大丈夫なんじゃない？」

「ガレットさんが？へえ・・・」

信じられないといった表情だった。そんなに弱そうに見えるのだろうか。

「まあ、そんなわけだから、鎧作つてあげて。出来るだけ軽くて丈夫なやつ」

「そんなの当たり前。みんなそう言うよ。もっと詳しい注文はないの？」

「そうだねー。とりあえず、あんまり重い鎧は無理なんじゃないかって・・・後は、初心者だから、安くて適当なやつでいいんじゃないかなー。どうせすぐ壊すだろうし」

酷い言われようだったが、もしかしたら、最初はすぐ壊れるのも

のなのかもしれない。

だがやっぱり、その注文ではダメだったようだ。少し呆れたような顔をして、少女は奥のドアに手をかけた。

「父さんに聞いてくるから、ちょっと待ってて」

そう言い残し、少女は扉の向こうに消えた。

小屋の中は静かになる。

レオンはベティに聞いた。

「あの・・・父さんってというのは？」

ベティは不思議そうな顔で聞き返す。

「父さんって、父親の事だけど？」

「それくらい知ってます。さっきの人のお父さんは何をしてる人なんでしょうか？」

「武器屋ってというか、鍛冶職人なんだ。向こうに工房があるの。ここは、一応店なんだけど、商品は陳列しないんだって。注文貰ってから作りたいんだってさー。その人に合った物しか作りたくないからって」

「へえ・・・」

「すごいんだよー。ジェフさんは、王様から賞を貰った事もあるんだから」

「本当ですか!？」

ベティはあっさりと言ったが、それはもの凄い事なんじゃないだろうか。王様直々に賞を授与される事なんて、滅多にない事のはずである。

「だから、たまに遠くからお客さんが来る事もあるんだ。よかったね。そんな人に武器とか鎧の面倒をみて貰えて」

「あ、はい。僕にはもったいないような気がしますけど」

「そんな事ないと思うなー。あの一家は、みんなマニアなんだよ」

「マニア？」

「そうそう。あの家は・・・」

そこで、奥のドアが開いた。顔を出したのは、先ほどの少女であ

る。

「こっちに來て」

何の前置きもなしにそう言われたので、レオンはすぐに反応出来なかったが、ベティの方は慣れた様子で少女の方に歩き出す。

それを見て、少女の方が止めた。

「ベティ。その格好で入るの？」

言われた本人は立ち止まって、自分の服装を確認する。淡いピンクの厚手のワンピースに、白いエプロン。春らしい装いだと言える。「まあ、いいんじゃない？余所行きってほどじゃないし」

「汚れたら大変だよ。着られなくなってから後悔しても遅いんだからね」

「怖いこと言うなあ」

ベティが迷っているところを、レオンは始めて見た。服の事は気になるのだろう。やっぱり女の子なんだと、失礼な感想を抱いてしまった。

「分かった。私、留守番してるね。ジェフさんによろしく」

「はいはい。誰か来たら、適当に接客しといて」

「適当でいいのー？」

「適当がいいの。変な注文だけはとらないで」

「変な注文って、どんな注文？」

そこで少女は口ごもった。若干だが頬が朱い事に、レオンは気付いた。

「・・・とにかく、よろしく。レオンさんは、こっちにどうぞ」

そう言って、少女は扉の向こうへ消えてしまった。

いったい何があったのだろうかと思って、レオンはベティの顔を見たが、彼女はいつもの微笑みを返すだけだった。少し悪魔的な笑みだったかもしれないが。

とりあえず、それは見なかった事にして、レオンも奥の扉を開ける。

そこは屋外だった。すぐ前に下り階段があって、その終点の先に

金属製の扉がある。その扉の前に少女が立っていた。

レオンはそこまで歩いていく。

どうやらそこは、地面をくり抜いて作った地下室のようだ。石の壁面に鉄の扉。レオンの村にはない、立派な物だ。

扉の前まで来ると、熱気のような物を感じた。それと同時に、金属を叩くような音もはつきりと聞こえてくる。

「服が汚れるかもしれないけど、それくらいは大目に見て」

少女はにこりともしなかったが、冷たいというよりも、むしろ格好いいと思った。不思議な感覚だ。

「あ、はい。それは平気です」

「あと、なるべく静かにしてて」

「静かにつて？」

「父さんは仕事中なので」

「あ、なるほど」

レオンは頷いた。鍛冶仕事の邪魔をしないでくれという意味だろう。

それを見て、少女は扉を開けた。重そうな扉に見えたが、少女はそれを軽々と開ける。

中はまさに鍛冶場そのものだった。それも、レオンの村の物とは比べものにならないほどの広さである。一番奥に炉があつて、鍛冶台が3カ所。他の場所には、注文された物なのか、金属製品が所狭しと並べられている。鎧や剣といった物はもちろん、鎌や鍬といった農具もある。

その鍛冶台の一カ所では、男性がまさに鍛冶作業中といった様子だった。剣か何かだろうが、細長い金属を炉に入れて軟らかくしてから、鍛冶台に移して叩く。しばらくして、それをまた炉に戻すといった作業をしている。

レオンはその流れるような作業にしばらく見入っていたが、少女がいつの間にか室内に入っているのを見て、慌てて自分も中に入った。

服が汚れると忠告されていたが、恐らくそれは避けようがないだろうと思われた。目に見えるくらいの煤が宙を舞っているのが見える。

レオンが室内に入ったのを確認してから、少女は作業中の父親に声をかけた。

「父さん」

すると、男は手を止めてこちらを見る。

レオンが想像していたよりも、ずっと小柄な男性だった。少なくとも、ガレットさんに比べたら子供のようなものだろう。だが、身体は引き締まっているし、腕も十分逞しい。鍛冶職人としての風格は十分にあつた。

男はしばらくレオンをじつと見つめる。見えているのかいないのか、分らないくらい細い目である。ついでに言うと、髪が全くない。ベティと少女が同じ年くらいだろうから、この男性とガレットさんも、その年代は変わらないはずだが、まだ毛がふさふさのガレットさんに比べると、この男性はだいぶ老けて見えた。

しばらくレオンの身体を観察した男性は、ふっと視線を少女に移し、そして再び作業に戻ってしまった。

何だっただんだろうと思っていると、少女が突然こう言った。

「もう終わり」

「・・・はい？」

「出ましょう」

少女はスタスタと歩いて、扉から出て行ってしまった。

仕方なく、レオンもそれについて行く。

そのまま階段を上ろうとする少女を追いかけながら、レオンは聞いた。

「あの・・・今のは何だっただんですか？」

少女は振り返りもせず答える。

「父さんはあれで大抵の事が分かるの。武器は5日くらい。鎧は2週間くらいで出来ると思う。だから心配しないで」

「心配っていうか・・・例えば何が分かるんですか？」

見ただけで、何が分かるというのか。

「身体とか靴のサイズとか、手の大きさとか、あと、使いこなせる武器とかも」

「・・・どうしてそんな事が分かるんですか？」

「プロだから」

そんなにプロって凄いのか。

「でも、使いこなせる武器なんて、自分でもよく分かりませんけど」
レオンは村にいた時に、剣や弓に一通り慣れるくらいの訓練はしたが、専門家がいたわけではないので、まだ初心者くらいの腕しかない。

「体つきでいたい分かるんじゃない？私も詳しくは知らないけど」
もしかしたら、適当なのかもしれない。

レオンはちよつと心配になったが、よく考えたら、武器や鎧を仕立ててくれるだけでも十分恵まれた話である。ここであれこれ注文するのも、おこがましいだろう。

そう納得した頃に、少女が階段を上りきって扉を開ける。

そこでレオンは初めて気づいた。

小屋の中から男性の声がする。もしかして、お客さんだろうか。

レオンも階段を上りきって室内を覗いてみると、やはり男性がいた。

彼はすぐにこちらに気づいたようだ。

「あれ？見ない顔だね。お客さん？」

彼が聞いているのは、ベティではない少女の方である。だが、答えたのはベティだった。

「そう。今日来た冒険者見習いなんだ。だから、そのうちラッセルのところにも行くと思うよ」

「ああ、そうなんだ」

そこで、ラッセルと呼ばれた青年は納得したように微笑んだ。背が高いが、濃い瞳と髪をしていて、真面目で誠実そうな青年である。

彼は黄土色のエプロンをしていて、両手でやつと持てるくらいの大
きさの木箱を抱えていた。

「それ、注文してたやつ？」

聞いたのは明るい髪の少女である。

青年は嬉しそうな表情で答える。

「そうなんだよ。やつと届いたから、すぐに持ってきたんだ。ずつ
と待たせてたから、申し訳がなくて・・・とにかく、中身を確認し
てくれる？」

そう言つて、ラッセルは木箱を少女の前の床に置いた。少女はす
ぐに蓋を開けて中身を調べ始める。中に入っていたのは鉱石の様だ
った。だが、鉄とか銅というわけではなさそうだし、明らかに精錬
前である。そのままでは使えないはずだから、自分達で精錬するの
だろうか。

ラッセルはそんな少女をしばらく見てから、レオンの方を向いた。
「僕はラッセル。冒険者向けの道具屋してるんだ。ダンジョンに
挑戦する頃になったら、いろいろ道具が必要になると思うから、そ
の時にはよろしく」

すごく話しやすそうな人だった。

「僕はレオンです。その時はよろしくお願いします」

「ラッセルは店長なんだよー。それも、結構やり手な」

ベティの言葉に、レオンは驚いた。レオンとそう変わらない歳に
見える。少なくとも、20歳は越えていないはずだ。

ラッセルは照れたように頭の後ろに手をやる。

「やり手ってほどでもないけど・・・前の店長だったお爺さんが引
退したから、成り行きで僕が店長なだけで、そんなに腕があるわけ
じゃないんだ。僕が作った店じゃないからね」

「でもさー、仕入れ代行みたいな事まで始めてるし。それって、な
かなか才能がないと出来ないと思うなー」

「それだつて、お爺さんのコネがあったからだしね。道具屋という
よりは、便利屋みたいなものだと思って貰えればいいよ。レオン君

も何か特定の素材が欲しくなったら、僕に言ってくれば都合出来るかもしれないから、その時はよろしく。もつとも、そこまでギルドは面倒みてくれないから、取り寄せた素材はタダではないけどね」

そこで、鉱石を調べていた少女が木箱の蓋を閉めた。

「うん。これならたぶんいける」

ラッセルがすぐにそちらを向いた。

「よかった。じゃあ、下まで運んでおくよ」

「それくらい、私がやるから・・・」

「いいよ。こんな重い物持って階段で転んだら、怪我じゃ済まないかもしれない。そんな事をお得意様にさせられないよ」

ラッセルはそう言って、木箱を持ち上げた。そのまま奥のドアに向かい、それを足で開けて、ドアの向こうに消えていった。それを後ろから少女が追っていく。

どういうわけか、それを見届けたベティがクスクスと笑い出した。

「・・・どうかしたんですか？」

レオンが聞くと、ベティは意味ありげに微笑む。

「ラッセルも、なかなか頑張るよねー」

「え？まあ、仕事頑張ってますけど」

「そうじゃなくてさー・・・レオンは、リディアの事どう思う？」

リディアという名前に心当たりがなかった。

「誰ですか？」

「あ、まだ言ってなかった？さっきまでいたのが、ジェフさんの娘のリディア。ここの受付と、あと、細かい装飾品とか作ってるんだ」

「明るい髪と瞳をした、中性的な顔立ちの少女。彼女の名前がリディアという事らしい。物言いがつつけんどんな感じだが、それが格好いいと思わせる不思議な印象の少女だった。細かい装飾品とは、アクセサリーとかの事だろうか。」

「へえ・・・そのリディアさんがどうかしたんですか？」

「だから、レオンはリディアの事、どう思った？」

「どうって言われても・・・なんとなく格好いい人ですね」

レオンがそう言うと、ベティが何度か頷いた。

「そうそう。まあ、そういう事なんだ」

「・・・どういう事ですか？」

「だいたい分かるでしょー？」

「全然分かりませんけど」

その言葉に、ベティが苦笑する。珍しい表情だった。

「レオンはさあ・・・」

「はい？」

「人生の楽しみを、半分くらい損してると思うな」

レオンはその言葉に首を捻るばかりだった。

伝える者達

通されたのは、立派な調度品でいっぱいの部屋だった。

ベティの案内で次にやってきたのは、とある民家だった。民家と言っても、お屋敷と言ってもいいほど立派な建物である。綺麗に整えられた庭の周りを、高い柵が囲っている。入り口にも、家紋らしきものが彫られた門が設えてある。広さはそれほどでもないという事だが、それを補って余りあるほどの風格がその家にはあった。

その応接間らしき一室。初めて座るソファという物の感触に多少戸惑いながらも、レオンにはもつと気になる事があった。

自分の隣に座っているベティが、口元とお腹を押さえて身悶えているからである。しかし、彼女は別に、体調が悪いわけではない。ただ、笑いを堪えているだけなのだ。

その原因は、レオンの正面に座っている老人にあった。

立派な白髭を蓄えたお爺さんである。ただ、顔にはしわが深く刻まれているし、目蓋もほとんど上がっていないように見える。さきほど見てきた鍛冶師のジェフさんよりも明らかに年上の、真正正銘の老人である。この部屋に入ってくる時も杖をついてたし、非常にゆっくりとした足取りだった。座っている今も、かなり腰の曲がった前傾姿勢だ。

だが、ベティの笑いのツボにはまったのは、そのお爺さんの頭である。

きつと既に髪がないのだろう。そんな曖昧な表現になってしまうのは、その頭を占拠している生物、いや、妖精がいるからだだった。

歳経た木の幹のような焦げ茶色の毛。その中から、木の葉のような深緑の瞳がふたつ、ぱつちりと開かれてこちらを見ている。老人の頭の上で腹這いになっているが、眠っているわけではないようだ。

なんとなくだが、レオンにも、ベティが言わんとする事は分かった。つまり、お爺さんの頭上のカーバンクルが、ちょうどお爺さんの髪の毛みたいに見えるという状況。偶然なのか、故意なのかは分からないが、この奇跡的なフィット感。それでいて、その奇跡を全く意に介した様子のない、老人と妖精の堂々たる役者振り。レオンはそれほどではないが、確かにユニークな絵だとは言える。

それでも、本人を目の前にして、中々そこまで笑えるものではない。幸い、お爺さんは気にする様子はないが、もしかしたら見えていないだけかもしれない。その事が、さらにベティの笑いを誘っているのかもしれないが。

まだ笑いを堪えているうちはいいが、そのうち大声で笑い出すのではないかと、レオンはひやひやしていた。

そこで、部屋に少女が入ってくる。お盆の上に、ティーカップが4つ。紅茶のようだった。

「面白いでしょう?」

レオンの前にカップを置きながら、少女が言った。一点の曇りもない笑顔だった。

「え? あ、いや・・・」

何の事ですかとも、そうですねとも答えにくい質問だった。かといって、そんな事ないですよと答えるのも、隣で身悶えている少女のせいで説得力がない。

レオンが答えあぐねていると、少女が老人の隣に腰掛ける。ごく洗練された座り方だった。育ちがいいとはこの事かと思い知る。

レオンは自然と背筋を伸ばした。

「お楽にして下さい。いいんですよ。ベティくらい横になって貰っても」

実際、ベティはソファの背にもたれ掛かるようにして横を向いている。寝転がっていると言っても過言ではない。だが、さすがにそこまでリラックス出来なかった。というか、リラックスとはまた別の問題だ。単に笑い顔を隠しているだけである。

「いえ、それはちよつと・・・」

「冒険者さんともなると、普段から気を抜かないものなのですか？」

「まだ見習いなので分かりませんが・・・とりあえず、僕は大丈夫です」

「そうですか・・・でもご遠慮はなさらないで下さいね」

少女は微笑む。その微笑みも、ベティの屈託のない笑みとは少し違う。どこか抑制された、品格を感じさせる表情だ。

とりあえず、笑いから抜け出せないベティは放っておく事にして、レオンは話を切り出す事にした。

「あの、僕はレオンと言います。今日、見習い冒険者になったばかりです。よろしく願います」

「私はデイジーです。こちらが祖父のフレデリック。よろしく願います」

デイジーが少しだけ頭を下げる。もの凄く優雅な動きだった。田舎者のレオンは、こういった所作に全く免疫がない。否応なくそわそわしたし、そして、ドキドキした。

これが本物のお嬢様なんだ。

所作もさる事ながら、彼女は見た目でも、落ち着きと洗練さを兼ね備えていた。ほぼ黒髪と言えるほどの濃いダークブラウンの髪は、艶やかに真っ直ぐ腰まで伸びていて、前髪も綺麗に切り揃えられている。派手さはないものの、小さく整った顔立ちをしていて、華奢な肢体を象牙色のワンピースが包んでいる。一輪の花という表現がぴったりの、慎ましい可憐な少女だった。

レオンもちろん綺麗な人だと思ったが、それよりも、自分が場違いみたいで気が引けた。彼女自体は綺麗な花でも、それを育てあげた環境を連想してしまう。彼女の洗練された所作が、彼女の後ろ盾を否応なく思い出させるのだ。

彼女に見入ってしまいそうになっていたレオンは、なんとかそれを振り払った。今日の目的はとりあえず顔を見せておくというもの

だったが、もちろんお見合いではない。冒険者見習いとしての訪問である。そして、レオンには聞いておきたい事があった。

「あの、デイジーさん。こんな事聞くのもおかしい話かもしれないんですけど・・・」

レオンはその質問をデイジーにする事にした。本当はお爺さんの方がいいのかもしれないが、彼女の方が話しやすそうだったからである。

「何でしょうか」

デイジーの黒い瞳が瞬く。何か引き込まれてしまいそうで、レオンは直視出来なかった。

「伝承者っていうのは何なんでしょうか？僕、そういった事を全然知らないで・・・」

「あ、いえ。知らない方も、たまにいらつしゃいますよ」

そう言つてデイジーは微笑む。レオンは少し気が楽になった。

「簡単に言つと、伝承者というのは、伝説の冒険者の記憶を伝える人達の事です。偉大な事を成し得た方々が培った知識や経験を、今を生きる冒険者達に授ける事。それが伝承者の仕事です」

「記憶という事は・・・つまり、伝説になった人達が前世だったという事ですか？」

「そうです」

あまりにあつさりとした答えに、レオンはいまいち驚けなかった。

「・・・それって、凄い事ですよね？」

「凄いと言いますか、珍しい事だとは思いますが」

「いえ、だって・・・という事は、デイジーさんも、前世は伝説だったという事ですか？」

その言葉に、デイジーは笑つて首を振った。

「私ではありません。祖父です」

レオンはそちらを見た。

なんというか、どう見ても普通のお爺さんだった。だけど、伝説の冒険者が前世という事は、もしかして、若い頃は名のある冒険者

だったのだろうか。

表情から読みとれたのか、デイジーが説明する。

「祖父が冒険者だった事は一度もありません。武器の訓練所等で冒険者に関わってはいましたけれど、どちらかというと、ずっと裏方の仕事をしていたそうです」

「そうなんですか？ちよつと、もったいないような・・・」

冒険者になつていれば、それこそ偉大な功績が残せていたのではないだろうか。そう思つての発言だったのだが、フレデリックさんは全く微動だにしない。

そんなレオンを見て、デイジーはまた小さく首を振つた。

「祖父は、これが自分のなすべき仕事だと思つていたそうです。そして、今思い返してみても、自分の選択は正しかったと思つています。自分が冒険者になつていても、きつと大成出来なかった。それでは自分の役目を果たせなかったと・・・これは、祖父の口癖です」

「役目ですか？」

「つまり、自分の経験を伝えたい、後輩を指導したいという思いが強かったという事ではないでしょうか。レオンさんは、ソードマスターの話聞いた事はありませんか？」

ソードマスターも伝説となつた冒険者の1人だ。レオンもその称号はもちろん知っていたが、具体的な事はほとんど知らない。詳しい逸話を知っているのは、レオンの故郷の村が出身であると言われている、サイレントコールドこと、イブという名前の女性についてのみである。

「いえ、全然・・・称号を聞いた事はもちろんありますけど」

「ソードマスターは、その称号の通り、比類無き剣技を誇つたとされる冒険者です。しかも、それが大剣でも細剣でも、例え初めて握つた剣であっても、自由自在に扱う事が出来たとか」

「へえ・・・」

凄い事だとは分かつたが、あまり実感がわかなかつた。まだ剣の

技術でそれほど苦勞した経験がないからだろうか。

「そんな彼ですが、非常に子供好きだった事でも知られています。彼が冒険者になったのも、身よりのない子供達に孤児院を作る為だったそうです。そこで自分が剣を教えて、冒険者として独り立ちさせる。そんな計画だったのですが、資金が集まって、孤児院を建てる話がまとまった矢先、彼は姿を消してしまったのです」

「え……どうしてですか？」

「そこで彼は最後の戦いに向かったのだらうと、そして彼は帰ってこられなかったのだらうと言われています。事実、その時期には天災が多発していたのですが、彼がいなくなった翌年から、ぱったりとやんでいるのです。つまり、天災に匹敵するような強大なモンスターと戦って、相打ちになったのではないかと……そして、自分がいなくなってもいいように、孤児院の話だけはまとめておいたのではないかと、そう言われています」

応接間に沈黙が満ちた。

まるで知らないその伝説の人物について、レオンは想像でしか触れる事が出来ない。彼は最後の戦いに向かう時、どんな心境だったのか。もう戻って来れないと分かっていたのだろうか。そんな強い敵を倒せた事ももちろんだが、自分がいなくなった後の事まで考えていた。今の自分には遠すぎて見えないような強さだ。

デイジーは微笑んだ。この静かな空気にも全く水を差さない、淑やかな笑みだ。

「祖父の記憶のほとんどは、子供達との思い出なんだそうです。ですから、戦うのは自分の役目じゃない。自分の役目は教える事だった……」

「……そうですね。すみませんでした。もったいないなんて言うて」

十分立派な役目なのだ。その価値を昔の自分が教えてくれたのだから、なおさら無視は出来ない。

レオンはフレデリックさんに頭を下げる。お爺さんは愉快そうに

少しだけ笑った。弱々しい笑い方だが、十分優しさも感じられる。頭上のカーバンクルは、その深緑の双眸で、じっとこちらを見つめていた。

「それに、ソードマスターの記憶を受け継いでいる人は祖父だけではありません。ですから、どなたか他の記憶をお持ちの方が、立派な冒険者になっておられるのではないのでしょうか」

それは確かにそうなのだ。偉大な人物の記憶ほど、多くの人に分化して伝えられる。何を隠そう、レオンの母親も、サイレントコールドの記憶を持っていると言っていた。

そこでレオンは気付いた。

もしかして、自分の母親も伝承者だったのだろうか。仕事としては、ただの主婦というか、農家だったわけだが、その資格があったという事なのだろうか。

「すみません。伝承者っていうのは、伝説の冒険者の記憶を持っている人って事ですか？」

デイジーは少し首を傾げる。

「どうでしょうか・・・そういう方ばかりとは限らないと思いますけれど」

「えっと・・・もう少し詳しく説明していただけませんか？」

「もしかして、どなたか記憶をお持ちの方に心当たりがあるのですか？」

思ったより勘がいい。レオンはその洞察力に驚く。

それだけで、ばれてしまったようだ。デイジーは口元に手を当てて、少し笑った。特にやましい事があったわけではないが、レオンは気まずくなる。

「一応ですが、ギルドから伝承者として認められるには条件があるんです」

「あ、ギルドに認めて貰わないといけないんですね」

「そうですよ。だって、お仕事ですから」

全くの正論だった。自分で名乗るだけでお金が貰えるわけがない。

「すみません。僕、田舎者なので・・・」

デイジーはクスツと笑う。上品さの為か、嫌らしさが全くない。

「ギルドの条件は3つです。1つ目は、16歳以上である事。2つ目は、ギルドで面接試験を受けて、それに合格する事。つまり、そこで冒険者の助力になり得る人がどうか、見極めるのだと思います。そして、3つ目は・・・」

そこで祖父の頭に目をやる。

「カーバンクルと共にある事です」

レオンは驚いた。カーバンクルが何かの役に立つのだろうか。

そこでふと、ギルドでの会話を思い出す。

「もしかして、何かの記憶を伝えてくれるとか、そういう事ですか？」

ギルドにおけるカーバンクルは、志願者の前世を読みとって、それを受付の女性に伝える役目を果たしていた。だったら、逆の使い方も出来るのだろうか。

デイジーは頷いて肯定する。

「必要だと判断すれば、この子はソードマスターの記憶を直接レオンさんに見せてくれます。それがレオンさんの悩みを解消するきっかけになったり、場合によっては、突然剣の腕が上達する事もあります。伝説となった人の記憶を伝える。それが伝承者の仕事です」

「へえ・・・」

ようやくレオンにも伝承者の役割が分かった。要は、先人に話を聞きにいくという感じだろうか。その道で伝説となった人にアドバイスを貰いにいく。それがただの言葉ではなくて、直接見る事が出来るものならば、確かな価値があるのではないだろうか。

「それに、すぐ隣に武器の訓練所もあります。今はギルドのものですから、レオンさんも使っていただけます。遠慮なく使って下さい」

「あ、はい・・・お世話になります」

そういえば、フレデリックさんは、若い頃に武器の訓練所に関わっていたという事だった。このお屋敷の隣にある建物がきつとそう

なのだろう。

レオンは閃いた。

「もしかして・・・例の孤児院っていうのが、それですか？」

何の根拠もない思いつきである。口にした途端に、自分でも、どうしてそんな事を思い付いたのか不思議になった。

デイジーは驚いた表情を見せたが、すぐに微笑んで、首を横に振った。

「違います。ソードマスターが生きていたのは、この町が出来るより、ずっと前ですから」

「そうですか・・・そうですよね」

「でも、同じかもしれませんね」

「え？」

祖父を見ながら、デイジーは優しく微笑んだ。

「ソードマスターの記憶があつたから、祖父が携わったのです。彼が建てた孤児院も、祖父が大きくした訓練場も、同じ思いで出来たものです。だから、同じかもしれません」

少し前とは違う静寂。

暖かくて、ずっと居たくなるような、心地よさが満ちる。

レオンも、大昔の伝説の男性に思いを馳せる。

皆が持っている前世というものの重みが、ほんの少し分かったような気がした。どういうわけか、自分にはそれがないわけだが、特に困った事はなかった。だけど、今、ほんの少しだけ、羨ましいと思つた。

この町の歴史よりも長い時間を経ても、伝わってきた物。

「・・・そろそろ帰ります。大事なお話をありがとうございました」
レオンが腰を上げようとする。いい加減帰らないと、日が暮れてしまう。まだ行くところが他にもあるのだ。

それをデイジーが止めた。

「もうちょっと、待ってあげたらいかがですか？」

「はい？待つつて・・・」

レオンは自分の隣を見た。

そして、呆れた。

妙に静かだとは思っていたのだ。

ベティはいつの間にか、ソファの上で寝息を立てていた。

正体不明

「いやー。ごめんごめん」

「いえ、まあ・・・起きて貰えてなによりです」

あまり悪びれた様子のないベティに、レオンはその言葉を返すのがやっとだった。

ソファの上で眠りこけていたベティを起こすのに、レオンは予想外の苦勞をさせられた。最初は普通に声をかけてみたのだが、全く反応がない。仕方ないので、肩を揺すってみたのだが、それでもダメだった。そこで、最終手段として、頬を叩いてみる事にした。叩くと言っても、そんなに強く叩いたわけではない。顔に少し違和感がある程度でも、気になって起きるだろうという目論見だった。

だが、ベティの反応は過剰防衛以外の何者でもなかった。

「私も油断してたなー。まさか、会った初日に、しかも他人の家で、レオンに襲われるとは思わなかった」

さらっととんでもない事を言うので、レオンは周囲を気にしたが、幸い誰もいなかった。裏路地と言ってもいいようなところだから、人通りは少ない。

日も少し陰り始めている。

「襲ってません。人聞きが悪い事を言わないで下さい」

どちらかというと、襲われたのはレオンの方だったが、もう指摘する気力もない。

そんなレオンの主張を聞いているのかいないのか、ベティは両の拳を打ち合わせながら、何度か頷いて言った。

「でも、バッチリ迎撃したし。うんうん。さすがにお父さん仕込みなだけはあるなー。スカートじゃなかったら、もう一発蹴りが増えて、6連コンボだったのに」

「・・・是非毎日スカートにして下さい」

「レオンはスカートが好きなのー？」

「何でそんな話になるんですか。被害縮小の為です」

「でも、もし本気で襲われてたら、私、スカートでも蹴りは出すよ？というか、それでもし中を見られたら、見た物を忘れるまで徹底的にやるから、うーん・・・どっちがいいんだろうね？」

どっちにしろ、蹴りが出る事は避けられないらしい。

レオンは溜息を吐く。

「・・・というか、僕が襲ってないと分かっているながら、5回も攻撃してきたんですか？」

その指摘に、ベティは真顔で頷いた。

「見習い冒険者なんでしょー？あれくらい普通に避けられないと」
出だしの裏拳を貰った時点で、見習い冒険者としては残念な感じだが、その後の、眉間を狙いにきた右手の突きと、それを必死に避けたあとに、胸ぐらを掴んできたのはすぐに弾いた。だけど、その後の牽制のビンタにお膳立てされた、左のアップパーは避けられなかった。この後に、ズボンだったら蹴りがお見舞いされていたようだが、もし出ていれば、恐らく綺麗に入っていただろう。

つまり、レオンから見て、2勝3敗。蹴りがあつたなら、2勝4敗。

しかも女の子相手に。

情けないと言われても、全く反論出来なかった。

落ち込んだ様子のレオンを一応心配してくれたのか、あっけらかんとした様子で、ベティが肩を叩いてくる。

「まあまあ。冒険者もいろいろあるし、多少弱くてもなんとかなるって。これから強くなればいいんだから」

「・・・そうですね」

「そうだ。レオンはスニークの事知ってる？」

スニークも伝説の冒険者の称号である。この町に来る荷馬車の中でも、名前が出た人だ。

「えっと、称号くらいは」

「あの人も最初は弱かったんだって。というか、女の子だったって噂だし」

「確か、本当の名前を誰も知らなかったって人ですよね？」

「そうそう。名前どころか、性別とか年齢も分からなかったって。変装の達人だったっていうしねー。ずっと正体を隠してたから、どんな事してたのかとか、いつ死んだのかとかも分からないんだって」

「・・・そんな人が伝説に残るような事をしたって、どうして分かったんですか？」

「あ、ここだよー」

ベティがまたもやレオンの質問を無視して立ち止まった。本日2回目だ。このマイペースぶりに、既に慣れ始めている自分に驚きだった。

今度も立派な民家だが、フレデリックさんの家ほどではない。木造平屋だが、そこそこの広さがある。ユースアイでは、これが平均的な民家のようなだ。今日だけでも結構町の中をうろろしたが、だいたいこれくらいの民家が多い。それか、もう少し狭い代わりに二階建てか。ガレットさんの酒場や、フレデリックさんのお屋敷は別格である。この家も、広い庭があつて、ガレージのような物が建っているから、もしかしたら裕福な方なのかもしれない。

ベティは躊躇う様子もなく、勝手に敷地内に入っていく。仕方ないので、レオンもその後続いた。

ところが、彼女が向かったのは家の方ではなく、ガレージの方だった。

その扉の前に来たところで、レオンは尋ねた。

「こんな所に、伝承者がいるんですか？」

もう1人伝承者に会いに行くのは知っていた。だけど、それ以外の事は何も聞いていなかったのだ。

「うん。大抵こっちにいるんだー。ここがニコルの部屋みたいなも

のかな」

「へえ・・・」

広さはともかく、あまり住み心地がよさそうな建物ではなかった。特に、冬は凍えそうだ。隙間風が吹きそうなくらいだから、この時期でも、きつと朝晩は寒いだろう。同じ伝承者であるフレデリックさんと比べると、生活にかなりの差があるように思えた。

ガレージからは、何か、カチャカチャという小さい物音がする。

「レオン」

「はい？」

「ちよつと、ノックしてみて」

ガレージのドアをノックしろという意味らしい。入り口には、窓のついたドアがあるのだが、その窓には張り紙でもしてあるのか、室内を窺う事は出来ない。

「・・・僕がですか？」

今まで、止める間もなく、何でも自分でやってきたベティだけに、急にそんな簡単な事を頼むのは違和感があつた。

ベティは微笑みながら言った。

「いいからいいから。とにかくやってみて」

「別にいいですけど、何で急に・・・」

「今度からはレオン１人で来るわけでしょ？ だったら、慣れておいた方がいいと思うな」

「慣れないといけないような事があるって事ですか・・・」

多少うんざりしながらも、レオンはドアの前まで進み出る。ドアをノックしたくらいで、何か起こると思えない。だけど、妙な緊張感が、レオンの身体を包んだ。

呼吸を整える。

そして、軽くドアを叩いた。

その直後だった。

子供の悲鳴。何かの金属製品が崩落したような物音。どちらもガレージ内からだった。

自分のノックなど、軽く音が出る程度である。思いもよらぬ過剰反応に、レオン自身が一番戸惑った。

すぐにドアが開く。

その向こうにいたのは、まさしく子供だった。性別ははっきりしないが、身体つきから言っても、レオンより年上という事はある。レオンは16歳ながら小柄な方である。そのレオンより明らかに小柄だから、恐らく12歳くらいだろうか。その小柄な身体を、グレイのシャツとモスグリーンの膝丈のズボンで包んでいる。子供らしいファッションだった。

だが、一番の注目点は、その子供が、両手を目元に当ててしゃくりあげている事だった。

どう見ても泣いている。

「泣かしたー」

背後から、これ以上ないくらい無責任な声が飛んてくる。振り返ると、ベティの悪魔的な微笑みが目に飛び込んできた。

「え？いや、その・・・」

泣かせるつもりはなかったし、泣かせるような事をした覚えもない。だけど、もしかしたら、本当に自分のせいなのだろうか。

レオンはもう一度子供の方を見た。

よく分からないけれど、とにかく可哀想だった。見ていて、気の毒な気分になる。

とりあえず、謝ろう。

「えっと・・・その、ごめんね」

なるべく優しく言ったが、効果はない。子供はやや俯いたまま、すすり泣くだけである。

まさに途方に暮れた。

泣いている原因も分からないし、どうやったら泣き止むかも分からない。

レオンはまた振り向いた。ベティに助けを求めたのだ。

困り果てたレオンの表情を見て満足したのか、ベティが意味あり

げに頷く。そして、子供の方を向いて、やや大きな声で言った。

「ニコルー。仕事だよー」

その言葉に、レオンは意表を突かれた。確か、ニコルというのは、ここに住む伝承者の名前のはずだ。だけど、フレデリックさんの孫のデ이지ーが言うには、伝承者になるには16歳以上でないといけないはずである。だから、きつとこの子はニコルという人物とは別人だと思っていたのだが。

レオンは子供の方に視線を戻す。

びっくりした。

ニコルと呼ばれた子供が、レオンの目の前で目を輝かせていたからだ。

「近!？」

いつの間に寄ってきたのか。というか、さっきまで泣いていたのはなんだったのか。

ニコルの目は、全く赤くなっていない。髪は濃い色だが、瞳は明るいブラウンだった。子供らしい、大きな瞳だ。

「本当に!？仕事って事は冒険者見習いだよね?うわあ!凄い!ねえ、どこから来たの?ジーニアス?それともアスリート?なんかあんまり強くなさそうだけど、うん、でも、これくらいの方がいいなあ。ちよつと弱いくらいの方が工夫しがいがあるし。僕、ニコルって言うんだ。僕のところに来たって事は、伝承者の仕事だよな?うわあ……。やった!嬉しい!もう何でも聞いてね!特に、鍵開けとか、そういう細かい作業なら、もうなんでも!あと、ちよつとした仕掛けだね。そういうの、ガジェットって言うんだけど知ってる?ここにもいっぱいあるんだ。君も絶対気に入ると思うよ!どうどう?見ていかない?見ていかない?」

いつの間にか、右手を両手で包み込まれていた。

レオンはゆつくりとベティの方を振り返る。

「……だいたい分かりました」

おおよその事は、ニコル本人の口から暴露されていた。

ベティは少し笑いを堪えながら言った。

「良かったねー、ニコル。これからはレオンが実験に付き合ってくれるから」

「そうだよね・・・うわあ！ダンジョンで試せるなんて、楽しみ！」

「いや、試すって、僕はまだ・・・」

レオンの言葉をニコルが遮る。

「あ、そうか。もしかして、まだ成り立て？」

「え？あ、うん」

「そっか・・・うんうん。でも大丈夫。楽しみは後にとっておかないとね！」

それはいったい何が大丈夫なのだろう。とりあえず、レオンの安全を保証しているわけではなさそうだ。

「じゃあとりあえず、僕の作った物を見ていつてよ。なんなら、実際に・・・」

「あー、ゴメン。ニコル」

そこで割り込んだのは、意外にもベティだった。

「レオンは他にも行くとこあるから、また今度でいいかなー？出来たら今日中に回っておきたいんだよね」

そんな話は聞いていなかったレオンだったが、何も言わない事にした。ベティの表情が、いつもとさほど変わらないながらも、目元が真剣に見えたからだった。

ニコルは残念そうな表情を顔いっぱい浮かべたが、すぐに頷いた。

「仕方ないね。じゃあ、えっと・・・レオンだったっけ？また今度おいでよ。いろいろ用意しておくから」

「あ、うん・・・また今度、よろしくお願いします」

レオンが軽く頭を下げると、ニコルは笑顔に戻って、ガレージの中に戻っていった。

ドアが閉められ、辺りは静かになる。

それを見届けてから、レオンは息を吐いた。何もしていないが、

何か終わったという達成感があつた。

振り返ってみると、ベティは既に帰り道を歩き出していた。

慌ててレオンもそれを追いかける。敷地から出た辺りで彼女に追いついた。

「他に行く場所なんてあるんですか？」

開口一番にそれを聞くと、ベティは口だけで微笑んだ。珍しい表情だった。

「ないよー」

「じゃあ、どうして嘘を言ったんです？」

「レオンはまだ心の準備が出来てないから」

「僕ですか？」

ベティは前を向いた。その横顔は、いつもの彼女よりも大人びて見える。そのギャップにレオンは驚き、そして、一度大きい鼓動が聞こえた。

「ニコルは悪い子じゃないんだけど・・・うーん、いや、違うな。」

ニコルは悪い子なんだよ」

あまりにもあっさりと言い切ったので、レオンは一瞬思考停止した。

「・・・えつと、ニコルさんって、さっきの子の事ですよ？普通の子供に見えましたけど」

「そうなんだけどねー。なんていうのかな、ニコルは悪戯っ子なんだ」

「悪戯っ子ですか？それって、そんなに珍しい事じゃないような・・・」

ある程度の悪ふざけは、子供なら誰だつてするだろう。

「あの子はちよつと違うんだ。なんていうのかな・・・ニコルは自分がした事が悪い事だつて分からない子なんだよね。私はニコルじゃないから、本当はどう思ってるのかは分からないけど」

「僕はもつと分かりませんけど・・・それが僕とどう関係するんですか？」

ベティはこちらを向いた。優しい微笑み。これもまた珍しい表情だ。

「私はね・・・うつん、私達は、つまり、今日レオンが会った人みんなだけど、ニコルの事が嫌いなわけじゃないんだ」

レオンは黙って頷く。

「だからね、レオンにも嫌いになつて欲しくないなーって、思っただけなんだ。ちゃんと準備してからじゃないと、初対面の人に一瞬で嫌われるような、そんな子だから」

その理屈は分からないでもない。

でも、理由としては弱い。

「・・・それだけじゃないと思いますけど、違いますか？」

ベティはまた前を向いた。横顔だけでは、表情は読みとれないが、少し寂しそうに見える。

「私はニコルが嫌いなわけじゃないけど、でも、やっぱりちょっと怖いな」

言葉の最後が少し小さかった。口にするのが嫌だったのかもかもしれない。あるいは、口にするのを躊躇うくらい怖いのだろうか。

それ以上に、ベティの口から怖いという言葉が出てきた事が、驚き以外の何者でもなかった。怖じ気付く事のない、怖いもの知らずの女の子だと思っていたのだ。

その彼女が恐れているのが、何の変哲もない子供。

「昔はね、ニコルと一緒に遊んだりもしたんだよ。だけどね、だんだん遊ばなくなつたんだ。本当に、ニコルの事は嫌いじゃないんだよ。だけど、なんとなく一緒にいなくなつた。これは、私だけじゃなくて、みんなそうなんだ。そして、最近、やっと理由が分かったんだ。ニコルといるとね、影響されるんだよ」

「影響ですか？」

「私も悪い事が分からなくなつてた。ニコルみたいに、社会のルールが見えなくなるんだ。それが怖くなって、ニコルから離れていったんだよ」

「えっと、つまり・・・僕も影響されるかもしれないという事ですか？」

ベティは頷かなかった。

「レオンはニコルにとって初めての仕事なんだ。あの子が伝承者になったのは、つい最近の事だから。初めてだから、何が起きるか分からないんだよ。レオンがどうなるかも分からないし、ニコルがどうなるのかも分からない。だけど、ニコルにしてみたら、今が大きな節目なんじゃないかって思うんだ。だから、なるべく上手いって欲しいって、そう思ってるだけなんだよ」

そこでベティはようやくこちらを向いた。いつもの屈託のない笑みだった。

「もちろん、一応レオンも心配してるんだけどね。でも、多少レオンの根性が曲がった程度の事なら、お父さんがどうにかしてくれるから平気だよ。命の保証は出来ないけどねー」

どこか、言葉に迫力がない。

今の説明を聞いただけでは、レオンには、この町の人達とニコルの関係が分からなかった。嫌われているわけではないが、皆から距離を置かれている。口で言うのは簡単だが、上手く想像できそうもない。

だけど、なんとなく、レオンはベティの様子を見ただけで、どうい感じの話なのかは分かった。もちろん、楽しい話ではない。だが、辛い話かというと、少し違う気がした。

寂しい話というのが、一番しっくり来る。

「・・・分かりました」

「何が？」

「要は、ニコルさんと町の人達が馴染む事が出来ればいいんですよ？」

その言葉に、ベティは少し戸惑ったようだ。

「いや・・・別に、そこまではしなくていいと思うけど。レオンはとりあえず、冒険者になればいいんじゃない？そうすれば、ニコル

の仕事も成功って事になるわけだし」

「いえいえ。町の人達に恩返し出来るかもしれないですし」

「でもなー。1年しかないんだよ？」

「1年でだめなら、もう1年頑張ります」

「そこまではお父さんも面倒見てくれないと思うけど」

「その時は、どこかのお店で働きます」

「・・・なんていうか、本当にそうなってそうで嫌だなー」

ベティは呆れ顔をしてから、それでも、すぐにいつもの微笑みに戻った。

「まあいい。せいぜい頑張れー」

声が低い。どうやら、ガレットさんの物真似らしい。

レオンは笑った。

「さすが親子ですねえ」

「そう？こっこの、ニコルは上手なんだよー。なんといつても、スニークの伝承者だから」

変装の達人のノウハウを生かしているのだろうか。

「へえ・・・というか、スニークの伝承者だったんですか」

「そうだよー。昔から、家の鍵とか普通に針金みたいなので開けてたし。たぶん町中の家の鍵は開けたことあるんじゃないかなー」

当たり前前みたいに言ったが、もちろん一般的な趣味とは言えない。

「いや・・・それ、泥棒ですか？」

「練習してたんだってさ。だから、ニコルの家は鍵穴がないんだよー。なんか、ネジみたいなのを差してドアを固定するんだ。それだったら、ニコルも開けられないから」

自分の子供基準の防犯対策をしているらしい。

「・・・それ、ドアの内側で使うんですよね？じゃあ、出かける時どうするんですか？」

「それは気にしないんじゃない？だって、ニコルは閉まってる鍵にしか興味ないから」

もはや、防犯対策ではなかった。

「・・・出かける時に閉められない鍵って、意味ないですよね？」
「そもそも、泥棒なんて滅多にいないし。それに、ニコルに開けられるって事は、普通の泥棒なら開けられるって事だから」

正論みたいな口調で言ったが、きつと何か間違っているだろう。けれど、これ以上聞くと深みにはまりそうなので、レオンは話題を変える事にした。

「・・・えっと、ニコルさんって、16歳ですか？」

伝承者なら最低16歳。だが、全然そうは見えなかった。何かの特例だろうかと思つての質問である。

だが、ベティはあっさり認めた。

「そうそう」

「本当ですか？なんていうか・・・失礼ですけど、幼く見えますよね」

「見えるねー。全然胸もないし」

全然寝癖がないと言っているのと同じくらいの軽い発言だった。

レオンはそこにも深入りしない事にする。

「・・・というか、あの、もっと失礼なんですけど、ニコルさんは女性ですか？」

子供っぽいのもあるだろうが、鍛冶屋で会ったりディアどころではないくらい、見た目では性別が分からなかった。

「私はそう思うけど」

「・・・私は？」

「本人は秘密だつて言ってるからねー。というか、男女どちらの服でも似合うし、変装も上手だし」

「・・・ご両親に聞いてみたりはしないんですか？」

「何か、口止めされてるんだって」

どうしてそこまでして隠すのだろうか。

「一緒にお風呂に入ったりとか、ないんですか？」

「だって・・・もし男だったら恥ずかしいし」

それは確かにその通りだ。

「レオンが入ってみればー？女だったら儲け物でしょー？」

「儲け物って・・・」

「でも、胸がないからダメかー」

ベティは平然と言ったが、さすがにレオンは恥ずかしくなった。

「そういう事を言うのはさすがに・・・」

「あれー。レオンはない方がいいの？」

「違います。変な話をしないで下さい」

当然というべきか、やっぱりベティは止まらなかった。

「やっぱり大きい方がいいでしょ？私よりもデイジーの方が実はあるんだよー」

一瞬デイジーの胸元を思い出そうとした自分に気付いて、慌ててそれを打ち消した。目の前のベティに至っては、首から下を見られそうにない。

レオンはしどろもどろになる。

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

「じゃあ、形の問題？それとも触った時の・・・」

「わー！わー！」

耳を押さえながら必死で叫ぶと、ようやくベティも止まってくれた。悪魔的な表情だった。弄ばれていたのは、間違いなさそうだ。

「レオンはさあ・・・」

次は何を言い出すのかと思って、レオンは心の準備をする。

だが、ベティの言葉は、今度こそ正論だった。

「いくら強くなっても、たぶん女の子には勝てないよねー」

思いつきり上半身から力が抜けた。

反論の余地は欠片もない。

「・・・せめてモンスターには勝てるように頑張ります」

不思議なもので、今ならばどんなモンスターにでも立ち向かえる気がしたレオンだった。

プロフェッショナル・アイ

「よし！休憩！」

その一言で、レオンの身体は看板が倒れるみたいに後ろに傾く。地面の衝撃。

固いけど痛くはない。土の匂いが鼻を掠める。

剣と盾を離して大の字になった。

空は青い。

小さな雲。

子供達の歓声。

レオンは深呼吸した。体内の熱い空気を吐き出すと、代わりに外の冷たい空気が入ってくる。

心地良い疲労感。

だが、それとは逆のもやもやしたものが、小さいながらも心の中にはあった。

やっぱり上手いじゃない。なんとなく、分かってはいたのだけだ。

小さく息を吐く。先ほどの深呼吸とは違い、心の中のわだかまりを追い出そうとしたが、今度は上手いかなかった。

レオンがいるのは、この町で一番大きい訓練所である。伝承者をしているフレリックさんが大きくしたという施設だ。場所はそのフレリックさんのお屋敷のすぐ隣。今はギルド所有の建物という事だが、どうやらフレリックさんが、今でも管理人の立場なようだ。

訓練所といっても、レオンのような冒険者見習いは全くいない。むしろ、子供達が剣を習いに来る場所になっているらしい。子供達が20人くらい走り回っても十分過ぎるほどの屋外スペースに、着

替えや休憩の為の小屋が併設されている。小屋といっても、家具さえ揃えれば、1家族が十分暮らせる規模の物だ。その中に、刃を潰した訓練用の武器や、簡易防具が大量に保管されている。

自分の武器と防具が出来上がるまで、レオンはここで戦闘訓練をする事にした。どんな武器が用意されているか分からないというのがなんとも言えないところだが、とりあえず、鍛えておくに越した事はない。

「レオン」

まるで刃のように硬質な男性の声に、レオンは身体を起こす。

その彼が、ちょうどこちらに向かつて水筒を差し出したところだった。お世話になっている酒場のガレットさんが用意してくれた水筒である。小屋の前に置いていたはずだが、わざわざ持ってきてくれたようだ。

「アレンさん。どうもありがとうございます」

水筒を受け取りながら、御礼を言う。そのまま彼は、レオンの正面に座り込んだ。

少し長めの黒い髪。黒い瞳に、鋭い顔の輪郭。だが、彼の一番の特徴は、間違いなくその長身だった。かなり大柄なガレットさんよりもさらに上。彼より背が高い人間を、レオンは見た事がない。体つきは筋骨隆々というほどではないが、それでも鍛え上げられているのが分かる。正確としては、無口というほどではないが、どちらかというと寡黙な人物。頼りになるお兄さんという印象が強い。

それがアレン。彼はこの町の警備の他に、この訓練所の教師をしている。レオンがここを初めて訪ねた時に出迎えてくれたのが彼だった。そもそも教師は数人しかいないようだが、そんな縁もあってレオンの訓練に付き合ってくれているのだ。

「やつぱり上手くいきませんね。村を出る前に、少しは訓練したんですけど」

レオンから話を切り出す。アレンから話しかけてくる事はあまりないから、こちらから話さないと、ずっと沈黙が続くのだ。

アレンは表情を変えずに答える。

「そうでもない。レオンは筋がいい方だと思う」

その評価が、レオンには意外だった。

「・・・でも、僕、未だにアレンさんから一本も取れませんが」
誇張も何もなく、まさしくその通りだった。

この訓練所を訪ねて、今日は3日目である。初日にまず、アレンはレオンの腕がどの程度なのかを見てくれた。レオンが自己評価するなら、やっと剣の振り方を覚えたくらいの腕である。だが、それだけ出来れば十分だという事で、すぐに剣と盾と防具をつけて、アレンさん自ら訓練してくれる事になった。

実践形式というか、決闘形式である。剣の腕もさることながら、体格に結構な差がある。もう何十回と打ち合ったが、未だにレオンの剣が届いた事は一度もなかった。

「そんな簡単に一本取られても困る。それに、一本取って欲しいわけじゃない」

「え？そうなんですか？」

アレンは頷く。

「剣を通して、レオンの事を見せて貰っていただけだ」

「僕の・・・」

「剣は俺の専門分野だ。剣を通してなら、相手の事がほとんど分かる。だから、それに付き合っ貰っていただけだ」

「つまり・・・まだ訓練じゃなかったんですか？」

「強いて言うなら、剣を握る前に筋力トレーニングをさせていた。あっちが訓練だ」

確かに、妙に念の入ったトレーニングだとは思っていた。ちょっと騙されていたような感じもするが、自分は初心者なわけだから、それが普通なのかもしれない。

「ただ、あれだけ必死になって一本取ろうとしていた自分は何だったのか。」

空しくなったような、ほっとしたような、複雑な気分で溜息を吐

くと、アレンが唐突に質問してくる。

「レオン。もしかして、狩猟経験が相当あるんじゃないか？」

その指摘にレオンは戸惑いながらも頷く。

「あ、はい。父さんが狩人なので、よくついて行ってたんです。えっと、6歳からだから・・・そういえば10年間になりますね。もちろん、最初は見るだけでしたから、実際に狩りしてたのは、7、8年くらいだと思いますけど」

レオンのいた村では、狩りはとても重要なものだった。食肉を確保する上でももちろんだが、どちらかというと、山の動物達にこちらの縄張りを認識させるための仕事だった。

自然との共生。それがレオンの村の出身である、サイレントコールドことイブ様が大切にしていた教えである。

その答えに、アレンは大きく頷く。

「やはりか。お前の剣はそういう剣だった」

そういう剣と言われても、レオンにはさっぱりだった。

「えっと・・・どういう剣ですか？」

「まず、レオンは実践慣れしていた。普通は、いきなり人間相手に武器を振るうのは躊躇するものだ。相手が傷つくのを想像してしまうから、それを振り払うのには、相当な精神力がいる」

「いや、僕だって、結構躊躇してましたけど」

「確かにそうだが、普通はその程度じゃない。最初に人に相対する時は、誰もがどこかで負けたいと思っているくらいだ。相手よりも自分の剣を恐れる。自分の剣がとれくらい危険な物なのか分からないからだ。どんなに腕がある人間でも、最初は震えて力が出せない。だが、レオンは最初から俺を倒す気でいた。相対した俺なら分かる。レオンの剣は震えていなかった。それはある程度、他の生命を傷つけた事があるからだ」

そう言われると、確かにそうかもしれない。最初は確かに緊張したが、どちらかというと、上手く戦えるか心配していた為だった気がする。

土の上に座ったまま、アレンはこちらをじっと見つめている。

「そして、もうひとつ。レオンは戦士としての戦い方が、全く板に付いていない」

はつきり言われるとやはり残念だが、頷かざるを得ないところだった。

「それはそうですよ。まだほとんど訓練してませんから」

「いや、そうじゃない。レオンの戦い方は柔軟過ぎる」

「え？柔軟ですか？」

そう言われても、自覚はなかった。

「俺が教えている子供達は、ここに初めて来る時は皆真っ白な状態だ。他の戦い方を全く知らない。だから、ある程度教えていると、皆同じ様な戦い方になる。変な言い方だが、教師である俺の戦い方に染まっていくと言ってもいい」

「それはまあ・・・そうかもしれないね」

「だが、レオンの戦い方は、戦士の模範からまるで外れている。剣や盾の使い方は教わったようだが、はつきり言って全く様になっていない。俺には剣と盾が浮いて見えるくらいだ。それは、既にレオンの身体に他の戦い方が染み込んでしまっているからだ。その戦い方に、今日やっと確信が持てた。レオンはまさに狩人の戦い方をしている。大自然の、決して平坦ではない地形で生き抜くための、柔軟で軽快な身のこなし。そんなレオンに重い剣や盾を持たせても、上手くいくわけがない」

真っ直ぐな眼差しで、そう断言されてしまった。

たっぷり数秒間を空けて、レオンは尋ねる。

「えっと・・・それはつまり、僕には戦士が向いてないって事ですか？」

「そうだ」

「・・・あの、僕、一応アスリート志望なんですけど」

剣や盾が使えなければ、それを扱う事が専門であるアスリートにはなれない。

「レオン」

「はい？」

「ついてこい」

アレンが立ち上がりながらそう言うので、レオンも立ち上がる。彼が向かったのは、併設されている小屋の方だった。レオンもその後をついていく。ふと横を向くと、少し離れた場所で、男の子4人が小さなサイズの剣を一生懸命に振っている。なんとなく微笑ましい。デイジーからソードマスターの話を聞いていたからかもしれない。

アレンは小屋の前でレオンを待たせると、自分だけ中に入っていた。

待つこと数分。なんとなく空を見上げる。今日もいい天気だ。しばらくして、アレンが小屋から出てくる。

出てきた彼は、盾を持っていた。だが、さっきレオンが持っていた物よりかなり小さい。ガレット酒場で使われているお盆みたいだと思った。

「これをつける」

その盾を差し出しながら、アレンは言った。

「え・・・これ、つける物なんですか？」

レオンの中で、盾と言えば、手に持つ物である。

その発言を聞いたアレンは、黙ってレオンの左腕を掴んで、盾の裏側中央から伸びているベルトの様な物を巻き付ける。

取り付けられてみると、さっきまで持っていた盾ほどではないが、それでも少し重い。

「バックラーだ」

アレンはそれだけ言った。この盾の名前らしい。

「へえ・・・」

腕を動かしてみるが、思ったよりもしっかり取り付けられているようだ。だが、盾としては、面積が寂しいので心許ない。

「レオン、ひとつ宿題を出しておく」

「え・・・何ですか？」

「両利きになれ」

もの凄く端的な命題だった。

「・・・えっと、両利きってというのは、つまり、両手が利くようになれって事ですか？」

「そうだ」

「それって・・・そんな簡単になれるものですか？」

右利きの生活を既に16年も送ってきたのに、今更直せるものなのだろうか。

「簡単には直らない。だが、その盾を生かす為には必要な事だ。それは両手を空けながら、盾を利用する為の物だ。その方が、両手が使える分、より柔軟に戦える。だが逆に、分かつとは思うが、防御が手薄になる。防御を代償として、機動力と柔軟性を手に入れる。難しい戦い方になるが、レオンの狩人としての経験を生かすためには、これが最善だと思う」

「なるほど・・・」

理論としては分からないでもない。

「でも、両手が使えるとはいっても、具体的にどうしたら・・・」
アレンは頷いた。当然の疑問だったようだ。

「将来的には、二刀流出来るのが望ましい。つまり、左手でも武器を扱えるようになるのが理想だ。だが、とりあえず左手を空けておいても、武器や盾を捨てなくても道具が使えるし、あるいは、盾を捨てなくても弓の補助が出来るようになる。ただ剣を振るうだけではなく、場合によっては、弓や道具を使う。そういう幅広い戦術を意識するといい」

「なんていうか・・・頭を使わないといけませんね」

「そうだ。だが、それが出来ないレオンは生き残れない。レオンはガレットさんの娘のベティと面識はあるか？」

突然その名前が出てきた事に驚いたが、すぐに苦笑して頷いた。

「はい、もちろん。面識があり過ぎて困ってますけど」

面識だけならいいが、過剰なボディランゲージが伴っているのが抜けない。気を抜いたら大怪我をさせられそうな、ある意味で元氣過ぎる女の子である。

アレンはくすりとせぜずに、真顔で頷く。

「彼女も狩人だ」

「え？そうなんですか？」

初めて聞く話だった。よく考えたら、自分の事は大方白状させられたが、彼女の事は何も知らない。

「まだ数年ほだから、レオンよりは経験が浅い。だが、彼女には同僚というか、師匠がいる。元々は彼1人で狩人をしていたんだが、事情があつてベティが手伝うようになった。彼の名前はホレス。聞いた事はないか？」

「あ・・・名前は一度だけ」

この町に來た初日、ベティが口に出しているのを聞いた気がする。

「一度彼に会つてみるといい。彼は冒険者ではないが、かなりの腕利きだ。戦い方の参考になるかもしれない」

「あ、なるほど・・・分かりました」

「彼は日によつて居場所が違うが、ベティに言えば案内してくれるだろう」

「・・・そうですか。頑張つてみます」

「どうかしたか？」

「いえ、別に・・・」

何か災難が起こる気がするとは言えなかった。

そこで、2人に近づいてくる人物がいた。

レオンはすぐに氣付く。

「リディアさん」

鍛冶師のジェフさんの娘、リディアである。赤みがかつた茶髪を前と同じ高い位置で束ねている。どこか中性的な顔立ちの中に、明るい瞳が不思議な印象を放っているのは相変わらずだが、珍しく今日はスカート姿だった。珍しいとレオンが評価出来るのは、ベティ

から、リディアはスカートをほとんど穿かないと聞いていたからである。そのためか、以前は格好いい印象が強かったが、今日は一段と女性らしく見えた。

彼女は、布に包まれた大きな箱のような物を小脇に抱えている。

「アレンさん、レオン、こんにちは」

リディアは軽く頭を下げる。レオンだけ呼び捨てなのは、年齢を意識しての事だろう。彼女は17歳。レオンよりも年上なのだ。これも、聞いてもないのにベティが教えてくれた情報である。

「こんにちは。こんな所までお仕事ですか？」

「そう。ベティがここだって、言ってたから」

「もしかして、僕に用事ですか？」

「アレンさんもいるなら、ちょうどよかった。とにかく、はい、これ」

持っていた箱を、両手でレオンに差し出す。

「・・・はいつて、何ですか？これ」

リディアは即答した。

「武器」

「・・・僕の武器、箱ですか？」

「中身に決まってるでしょ。開けてみて」

「え？あ、はい・・・」

剣とか槍にしては箱の大きさが小さかったので、中身が想像出来なかった。そもそも、武器をわざわざ箱に入れてこなくてもいい気がする。

布を取ってみると、中身は木箱だった。

その蓋を慎重に開ける。

中に入っていたのは、革の帯。

そして、黒い柄と鉄の刃。

レオンは取り出してみた。

「・・・ナイフですか？」

言葉通りの、それは短剣だった。正式にはダガーと呼ばれる物だ。

長さは30センチもない。箱の中身は、それが3本と、それを腰に下げる為のベルトのようだ。食事用のナイフよりは大きいものの、武器としては小型の物で、しかも軽い。扱いやすいのは間違いないが、威力は心許ない気がする。

だが、手に馴染むのは確かだった。子供の頃から狩りの度に握っていた物とよく似ているのである。思わず懐かしさを覚えたほどだった。鍛冶師のジェフさんが、自分を一目見て勝手に作った物だが、とりあえず、慣れている武器という点では間違いない。さすがの職人の目である。

「これは、投擲用か」

アレンが呟くように言った。

リディアが軽く頷いて答える。

「はい。だから、アレンさんに投げ方を教えて貰った方がいいと思
って」

「いや、投擲は専門じゃない。ホレスが知っていればいいが・・・」

「ホレスさんは接射が上手いですから」

「そうだな。知らない可能性が高い。そうになると・・・」

2人はそこで黙った。

レオンは、そんな2人をキョロキョロと眺める。

「えっと・・・もしかして、教えてくれる人がいないって事ですか？」

アレンとリディアは顔を見合わせた。

「いや、いるにはいる。もの凄い名手が」

「そう。だけど、ちょっと事情があつて・・・」

そこで突然、声が割り込んできた。

「事情って何の事ですか？」

レオンも驚いたが、それ以上に驚いたのは、アレンとリディアの方だった。いつもクールな2人だけに、驚いた顔は珍しい。

声の主の方に3人は注目する。

日傘の影の中にいたのは、長い髪が目を引き、落ち着いた容姿の

少女。3人のリアクションに戸惑っているようだが、それもどこか抑制されていて、育ちの良さを感じさせる。

この訓練所の隣にあるフレデリックさんのお屋敷。そこに住んでいる彼の孫娘。

「あ・・・デイジーさんですか。急に声がしたので驚きました」

レオンが笑いながら言うと、デイジーも微笑みを返す。

「それは失礼をいたしました。何か深刻な話かもしれないと心配になったものですから。この訓練所で、何か足りない物がありますか？」

「いえ、全然。ちょっと、この・・・」

そこでリディアに口を塞がれた。

だが、レオンが両手で持っているのだから、当然気になっただろう。デイジーは自然と箱の中身を見て、そして嬉しそうな声を上げた。

「まあ・・・素晴らしい一品ですね。これはジェフさんの作品ですか？」

聞かれたリディアは、諦めたように息を吐いてから、レオンを解放する。

「そう。お父さんの。バランスは私が調整したけど」

「ジェフさんもしリディアもさすがですね。とても綺麗に出来ています」

綺麗かと言われると、確かに綺麗かもしれない。だが、刀身はともかく、柄はただ真っ黒なだけの味気ないデザインだから、女の子の趣味としては微妙なところではある。

だが、デイジーの発言はここで終わらなかった。

「レオンさん。ちょっと、使ってみてもよろしいですか？」

さすがに耳を疑った。

「・・・使えますか？」

その言葉に答える事なく、デイジーは勝手に箱からスローイングダガーを一本抜き取る。それを見て数秒間うつとりしてから、彼女

は重さを確かめるように、短剣を握った右手首をスナップさせる。妙に手慣れてると思った、次の瞬間だった。

デイジーの右手が一閃した。

放たれた短剣は直線を描くように真っ直ぐ飛び、20メートルほど先にあつた木の幹の真ん中に突き刺さる。

完全に玄人の投擲だった。

誰も声が出ない。

デイジーは満足げに微笑むと、リディアの方に向き直る。

「綺麗ですね。本当に美しいバランスです。あれだけ重心がしっかりしていれば、かなり長い間使えるでしょうね」

専門家みたいな感想だった。

今度は、レオンの方を向いた。

「レオンさん。また今度、よかつたら触らせて下さいね。他にも、剣の事なら、何でも聞きにいらして下さい。それでは、私、ここで失礼いたします」

デイジーは優雅に一礼すると、機嫌良さそうに、門の方へと歩いていった。

しばらく、誰も喋らなかつた。

最初に口を開いたのは、アレンである。

「・・・そういえば、そろそろ差し入れを持ってくる時間だった。失念していた」

フレデリックさんが高齢の為か、代わりにデイジーがここまで差し入れを持ってやってくる事が多い。レオンも何度か顔をあわせている。

だが、今更後悔しても遅すぎた。

一応気になったので、レオンは聞いてみる事にした。

「デイジーさんはどうして・・・あんな事が出来るんですか？」

投擲と云えばいいのだが、なんとなく口にするのが憚られた。お嬢様の趣味としては、間違いなく一般的ではないはずだし、趣味程度の腕ではないのがレオンにも分かった。

アレンはすぐ隣に建つお屋敷の方を向きながら言った。

「彼女の祖父がソードマスターの伝承者なのは知っているだろう？」

「あ、はい」

「彼女は幼い頃から、お祖父さんに可愛がられていた」

「・・・えっと、それで？」

「それだけだ」

「・・・そうですか」

女の子にはそれらしい可愛がり方がある気がする。

「なんていうか・・・この町の女の子は、皆さん逞しいですね」

デイジーもそうだし、狩人をしているベティもそうだ。

だが、反論する人が1人いた。

「みんなじゃないけど」

リディアのどこか冷めた声に、レオンは慌てる。

「そ、そうですよね！リディアさんは違いますよ・・・ね？」

言い切る自信がなかったレオンだった。

「一緒だと思う？」

「いえ！そんな・・・」

じつと見つめてくるリディアの視線に、レオンは耐えきれなくなつた。

「そ、そういえば、今日は、リディアさん、スカートですね。素敵だと思います」

「デイジーは大抵スカートだけど」

「で、でも、リディアさんは、珍しいじゃないですか！その、いつもは格好いい感じですけど、今日は一段と可愛らしいっていうか・・・」

自分で言つてて恥ずかしいくらいだった。

言われた本人はもつと恥ずかしかったのだろう。視線を逸らしながら、頬を赤らめているのが分かる。

レオンの左腕を一瞥してから、ぶっきらぼうな口調で言う。

「・・・鎧と盾はもうちょっとかかるから」

その言葉を残し、リディアは足早に去っていった。

残ったのは男2人と短剣3本。

よく分からないけれど、とりあえず、解放されてよかったという
思いでいっぱいだった。

そこで、いつの間にか木に刺さった短剣を回収してきてくれたアレ
ンがぽつりと言う。

「レオンは友人に恵まれているな」

どこか、認めにくい言葉だった。

「・・・そうですね。とりあえず、武器も手に入っだし、使い方を
教えてくれる人も見つかったし」

だけど、後で何かとんでもないしっぺがえしが来そうな気がする
のは何故だろう。

レオンの背後では、無邪気な子供達の歓声が響いていた。

必要不十分

細長い金属棒が穴の中を這いずり回る。

金属が擦れ合う音。

針金から手に伝わってくる振動。

その両者を感じ取りながら、構造を想像する。

傍らに置いてある本に載っている図と比較しながら。

これだろうか。

100年ちよつと前に作られた型。

別のツールを取り出す。

針金を曲げて、形を微調整する。

上を押さえて、下の本体の方へ差し込む。

カチツという、確かな手応え。

「・・・やった」

レオンの口から、達成感と共にその言葉が零れ出たその時だった。
「ちよつ・・・うわっ！」

その声の後に小さな炸裂音がしたかと思うと、レオンの背後で、
積んであった酒瓶が崩れ落ちたかのような、盛大な音が鳴り響いた。
思わず両手で耳を塞いだレオンだが、数秒後、恐る恐る振り返る。
元々散らかっていたガレージ内だったが、今はさらに多くの、よ
りどりみどりの物が床に散らばっている。

その中心にいるのは、黒っぽいショートヘアの、子供にしか見え
ない人物の後ろ姿。レオンと同じ16歳という事だが、どうも臍目
に見ても、12歳くらいにしか見えない。ついでに性別不詳という
謎の人物。今は床に座り込んでいるから、腰に巻いた上着がスカ―
トみたいに見える。だから、なんとなく女の子っぽく見えるが、立
ち上がってこちらを向いたら、ハーフパンツを履いているのがはっ

きりするので、その時点で性別に自信が持てなくなる。見る方向によって印象が変わる、万華鏡みたいな人物である。

そんな人物だが、今はここからでも分かるくらい肩が震えていた。怒っているのか、泣いているのか分からないけれど、いずれにしても不機嫌なのは間違いない。

「その・・・ごめん、ニコル」

レオンが控えめに謝ると、ニコルは大きく溜息をついて、床に寝ころんだ。

逆さまの顔も、目が大きくて子供っぽい。明るい瞳が自然と目を引くが、それほど怒っている様子ではなかったので、レオンはほっとした。

「まあ、いつかぁ・・・元々見込み薄だったんだよね」

息を吐き出すようにそう言った。ニコルは声が少し高い。だけど、男の子だとしても、声変わりしていない場合もあるから、それほど不自然ではない。

邪魔をしてしまった手前、レオンは一応聞いてみる事にする。何か作っている時のニコルは、ちょっとした物音にも敏感なのだ。自分の呟きが邪魔をしたのは明らかである。

「何を作ってたの？」

「うーん・・・一言で言うなら、魔法妨害装置かなあ。ちょっとアイデアがあつて、もしかしたら、魔力に干渉して、魔法を妨害出来るんじゃないかと思ってたんだけど」

「え・・・それって、もしかして凄い事なんじゃ？」

魔法の才能はからつきしなレオンだが、そんな発明品は聞いた事がない。もしかしたら、偉大な発明ではないのか。

「でも、そもそも、魔法を妨害したかったら、術者の前に、閃光弾とか火薬とかシンバルとか、とにかく大きな音とか光を出す物を投げればいいだけだし」

「なかなかシンバルは持つて行かないと思うけど・・・それだって、確実に妨害出来るわけじゃないよね？」

「確実なのは、まあ、攻撃する事だよね。出来たら息の根を止める事」

「でも、それだって、相手に護衛がいたらダメなわけだし」

「まあね。というか、音とか光が効かないモンスターもいるだろうから、結局、確実なのは人間相手の時だけかなあ」

「・・・今気付いたけど、ニコルが想定してるのは、人間同士の戦いなのか？」

「人間はいいんだよ。さっき言ったように、閃光弾とか投げればいいんだから。だけど、モンスター相手には何が効くか分からないから、もし魔力妨害が出来るなら、一番確実でしょ？」

「ああ・・・なるほど」

「それでアイデアを思い付いたから、ちょっと作ってみてたんだ。だけど、やっぱりちよつと難しいな。そもそも、僕には魔力が見えないから、確かめようにも確かめられないし」

レオンは不意に思い付いた提案を試してみる。なるべく悟られないように、自然な感じを心がけた。

「だったら、誰か町の人に頼んでみたら？魔法が使える人がいるはずだし」

その提案にも、ニコルは浮かない顔のままだった。

「あんまり頼みたくないなあ。もしかしたら、魔法が暴発するかもしれないし」

「でも、もし成功したら、凄い事だよね？」

「そうでもないよ。魔力を利用した装置なら、同じ様な物が結構あるから」

「そうなの？そっか・・・」

それ以上の言葉を思い付かなくて、レオンは口を閉ざした。勧誘失敗。

そこで、鈴が転がるような音がする。

音の方を見ると、長い黒毛のカーバンクルが床に散らばった金属の球のような物を転がして遊んでいる。遊んでいるというより

も、その物体の丈夫さを確かめているような、慎重な手つきだった。その妖精が不意にこちらを向く。闇そのものの様な漆黒の中に、アメジストの様な瞳が輝く。

「クロ。おいで」

ニコルが身体を起こしながら呼ぶと、クロはそちらに悠然と歩いて行って、膝に飛び乗った。

頭を撫でているニコルも、撫でられているクロも、同じように目を細める。

その微笑ましい光景にレオンも口元が綻ぶが、心はすっきりとしない。

ここに訪問するのは6度目だが、このガレージに、ニコルとクロ以外がいた事は一度もない。それとなく聞いてみると、ニコルはあつさりと、他には誰も来ていない事を認めた。寝食をする時はさすがに家に帰るらしいが、それ以外はずっとこのガレージで、1人と1匹。たまに、酒場のベティや道具屋のラッセルが訪ねて来る事もあるらしいが、その頻度もかなり少ないらしい。その理由は簡単で、ニコル自身が、研究の邪魔だからと言って追い返すかららしい。

ニコルは自分で周りから距離を取っている。

これはベティの評価である。最初に訪問した時の嘘泣きは、人を追い返す時の常套手段であるらしい。他にもいろいろな手があるらしいが、結局は、わざと相手に嫌われようとしている。その結果が今の環境らしい。ベティは昔のよしみがあるから、ラッセルはたまに資材を運びに行くから、そして、レオンは仕事相手だから話して貰えるらしいが、他の人ではこうはいかないという事だった。

自分でこしらえた孤独。その中にいるニコルは、傍目には寂しうには見えない。

もしかしたら、本当に寂しくないのかもしれないとベティは言っていた。そういう一般的な感性の持ち主ではないらしい。だけど、付き合って日が浅いレオンには、そう簡単に受け入れられる話ではなかった。

きつと寂しいに違いない。だから、何かのきつかけで外に出て欲しい。

そう思っで、それとなくいろいろ誘っでみているのだが、今のところ、上手くいく気配は全くない。元々レオンは口が上手くない。もつと口が上手いはずのベティだつて試したはずなのだ。それでも上手くいかなかったわけだから、難敵なのは間違いない。

そんなこんなで、訓練が終わつた後に毎日のように訪ねている。その結果、ニコルには変化はないが、レオンの鍵開けの技術はメキメキと上達していた。もちろん、悪いわけではないが、素直に喜べないところである。

「それで、その鍵開けられたんだよね？」

いつの間にか目の前にいたニコルに、レオンは仰け反るほど驚いた。

「近っ！！」

その驚きように、ニコルは頬を掻きながら苦笑する。頭の上にはクロが乗っでいて、薄紫の双眸がなければ、完全に髪の毛と一体化していた。

「レオンも、僕の気配くらいは感じられるようになって欲しいなあ。その調子だと、不意打ちとかで大怪我しそつで心配なんだけど」

確かに、今不意打ちされていたら、大怪我どころではなかったかもしれない。

「そつだよね・・・ごめん」

「まあ、僕で慣れてくれたらいいよ。それで、その鍵は分かつた？」

「あ、うん」

ニコルは腕を組んで、関心したように何度か頷く。だけど、見た目は子供なので、威厳は全くなかつた。

「レオンは勉強熱心だよな。あと、手先もそこそ器用だし」

「そ、そつかな？」

「冒険者よりも、怪盗とかになつてみたら？」

あまりにさりげない口調だつたため、一瞬頷きそつになつた。

「・・・いや、そもそも、そんな職業あるのかな」

「スニークは元々泥棒だったんだよ。悪い奴からしか盗まなかったとかじゃなくて、大金持ちから手当たり次第に盗んでた大泥棒」

レオンは知らなかった。そして、聞いた瞬間に、出来れば知りたくなかったと思った。伝説の冒険者の功績が、少し霞んだような気がした。

「・・・だけど、結局偉大な事をしたから、伝説になったんですよ？」

「さあ・・・僕はその頃の記憶は知らないから」

ニコルは少し首を捻ってそう言った。らしくない、不自然な動作だった。何か前世の記憶で気になる事があるのだろうか。

「それよりも、その鍵が済んだって事は・・・そっか。基本はそんなところだね。あとは応用すれば、大抵の鍵はなんとかなるよ。普通の鍵は、だけどね」

「普通じゃない鍵って？」

「ダミーの鍵とか、特別な加工がしてある高級な鍵とか、魔法の鍵。あとは、錆び付いて開かなくなった鍵とか」

「なるほど」

凄く具体的だった。経験が相当あるのだろう。

「とにかく、あとは経験あるのみ。というわけで、これから毎日、夜な夜な・・・」

レオンはそこで言葉を遮った。

「・・・泥棒の真似事は遠慮します」

ベティ情報によれば、ニコルは練習と称して、町中の家の鍵を開けて回った事があるらしい。

そんなレオンの反応が可笑しかったのか、ニコルは軽く笑いながら言った。

「冗談だよ。僕が集めた鍵があるから、それを持って帰って練習したらいいと思う。あとは、まあ、ダンジョンで余裕があったら、必要な鍵でも開けてみたらいいよ。もちろん、罠がなかったらだけ

ど」

そこでレオンはかねてからの疑問を尋ねてみる事にした。

「あの、前から気になってたんだけど」

「何？」

「こういう鍵開けの技術って、ダンジョンで必要なの？」

冒険者といえば、戦闘のイメージしかなかったレオンである。

ニコルの回答は無関心そのものだった。

「さあ」

「さあって・・・」

「だって、僕、ダンジョンに行った事がないし」

「それはそうだけど」

「とりあえず、ラッセルの店で解錠用のツールが売ってるから、鍵があることはあるんだよね。だけど、例えばドアとか檻とかだったら、壊して通る事も出来るし、魔法で開ける事だって出来るから、

まあ、他のメンバー次第なんじゃないかな」

「他のメンバー・・・」

今のレオンにとって、それは最大の懸念だった。

「もしかして、まだ仲間がいないの？」

ズバリ尋ねられて、レオンは答えに窮した。だが、それで十分答えになっていた。

ニコルは特に表情を変えずに、あっさりと言った。

「だったら、覚えておいた方がいいよね」

「え？」

「だって、レオンは魔法が使えないし、壊して通るほどの力もないし。火薬とか使って吹き飛ばす手もあるけど、水が多いと使えないし、数に限りがあるわけだから、出来るなら取っておきたいしね」

とても論理的だった。きっと正論である。

だけど、1人で行く事をあまりにあっさり想定しているから、それが気になった。

クールとかドライとか、そういう風にもとれる。もしかしたら、

これがニコルの強さだと言う人だっているかもしれない。身体は小さいけれど、頭も技術もある。強い敵がいたら隠れる事が出来る。不意をつく事だって出来る。

まるで、1人でいるために培ってきたような能力。

レオンはやっぱり、少し寂しいと思った。ニコルが寂しそうじゃないから、そして、ベティが寂しそうだったから、その両者を知っているレオンは、その対比が余計に寂しい。

でも、これは結局、レオンの印象でしかない。

ニコルの心の中は分らないのだ。ここ数日通い詰めた程度では、分かる方がおかしい。

だが、もし分かったら、何か変えられるかもしれない。

相手を理解する方法がないだろうか。

そこで、レオンは思い出す。つい先日、訓練所でのアレンさんの言葉。

良い手かもしれない。

「ニコル」

突然レオンが表情を明るくしたので、ニコルは訝しんだのかもしれない。少し顔を傾けて聞いた。

「何？」

「僕に何かガジェットを作ってくれない？」

ガジェットというのは、ニコルが作っている怪しげな装置の事だ。それが一般名詞として広く定着している物なのか、それともニコルが勝手にそう呼んでいるのかは知らないが、今はそんな事はどうでもいい。

レオンの言葉を聞いたニコルは、文字通り目を輝かせていた。

「本当！？いいの！？」

言い出したのはレオンの方だが、その喜びように、思わずたじろいだ。

「う、うん・・・」

「うわぁ！嬉しい！本当は、いつ言い出そうかって思ってたくらい

なんだ！だけど、やっぱりこちらからは頼みにくいでしょう？頼みにくいんだ。頼みにくいんだよ、これが」

何故か繰り返されたので、レオンは気圧されて頷く。

「そ、そっか」

「そうなんだよ！だけど、もう、レオンから頼んできたからには、断るのは筋違いってものだよね！もう、任せて！使いやすくて、威力がばつちりな奴を用意してみせるから！どうせ、レオン以外は全て敵なわけだしね！木っ端微塵にしてみせるよ！」

自分は木っ端微塵にならないだろうか。それが果てしなく心配だった。

「出来たら、もう少し大人しいのでも・・・」

「そう？あ、そうか。レオンの戦闘スタイルがあるよね。分かっている分かってる。レオンはどうせ、重い鎧は無理でしょ？武器はどうするの？あ、投げナイフだっけ？」

「そ、そうだね。あと、軽めの剣も作ってくれてるみたいで」

これはアレンさんと、それからデイジーの提案だった。スロージングダガーだけだと臨機応変さに欠けるというのである。武器訓練の専門家であるアレンさんの意見はもちろん、何故か剣に関して尋常ではない知識があるデイジーのお墨付きまである。それを鍛冶屋のリディアに相談してみたら、あっさり承諾してくれたのだ。

ニコルはレオンの左腕を見る。そこには、バツクラーが取り付けであるままだ。重さに慣れる

為に、普段からつけて歩いている。最初は恥ずかしかったが、すぐに慣れてしまった。

「要は、軽い剣と飛び道具だね。なるほどなるほど。うん。任せて！特に、左手が使えるわけだから、どうにでもなる。うわぁ・・・！楽しみ！絶対凄い奴を用意しておくから、任せてよ。本当に、威力だけは保証するから！」

少し前のレオンの言葉は、綺麗さっぱり忘れられていた。

だけど、本当に嬉しそうなニコルの表情を見ると、何か言う

気が失せてしまった。

ただ、ニコルが作った物を通してなら、作った本人の事が分かるのではないかと思ったただだった。アレんさんが、剣を通して自分の事を知ろうとしてくれたように、話す以外の事で、知ろうとする方法があるような気がした。その為のアプローチのつもりだったのだ。まさかこんなに喜ぶとは思わなかったけれど。

でも、もちろん、悪い気はしない。

ニコルの表情につられるように、レオンの表情も笑顔になる。

ただ、漆黒のカーバンクルだけが、ニコルの頭上で眠そうに大欠伸をしていた。

雨音の帳

酒場の喧噪。

20以上あるテーブル席は、相当な場数を踏んでいると思われる熟練の冒険者達でほとんど埋まっている。彼らには昼夜の境といったものは曖昧なようだ。まだ昼間と言えるこの時間でも、既に何本もの酒瓶を転がしているテーブルが多い。それぞれが、次の行き先、戦術の見直し、あるいは単に世間話等、思い思いの事を話している。硬い岩を削っているような荒くれ者達の声が屋内を支配していた。

だが、そんな喧噪も、今のレオンの耳には入らない。いつものカウンター席。

レオンの全神経は、目の前の小さな金物に注がれていた。

細長い針金越しに伝わってくる内部の構造。外面の滑らかな金属盤からは想像も出来ないが、中身は精巧かつ緻密そのものだ。かれこれ数十分程こうしているが、あまりに複雑過ぎて、頭の中で上手く構造を想像出来ない。恐らく、そう意図された構造なのだろう。何かに書き留めながらならもつと効率があがるかもしれないが、まだ練習の段階だから、出来るだけ楽をしたくはない。

そうして完全に没頭していたレオンの後頭部を、突然硬質な円盤が襲った。軽く音が鳴る程度だったが、頭の中で少しずつ積み上げていた内部の想像図がどこかに雲隠れしてしまった。

「あー……」

一度忘れたものは、思い出そうにも容易には思い出せない。情けない声を出すレオンに、明るい少女の声が飛ぶ。

「レオンー。あんまり熱中すると、今に飢え死にするよー」

聞き慣れた声に体を捻って振り返ってみると、案の定、そこには見慣れた栗色のポニーテールと瞳の少女が笑っていた。

ここ、ガレット酒場の看板娘のベティである。多少元氣過ぎる女の子だと思っていたが、この酒場でお世話になっているからなのか、怖いことに、レオンは既に幾分慣れ始めている。

彼女はレオンの前に左手に載せていたお盆を置く。レオンの昼食である。今日は鳥のようだ。皿いっぱい肉の片隅に、熱を通した野菜が数種類だけ、申し訳程度に顔を覗かせている。

「あ、ごめん・・・ありがとう」

ベティはまだ右手にお盆を載せている。さすがに手慣れた様子で、そうしていると、れっきとしたウェイトレスなんだと思い知る。

レオンはふと店内を見回した。テーブルの一角では、店長のガレットが、顔馴染みらしき大男と悪態をつき合っている。顔が笑っているから、そういうコミュニケーションなのだろう。彼の両手にも料理を載せたお盆があるから、ちゃんとした仕事である。

「なんだか忙しそうですね」

「まあねー。雨が降つてると多いんだよ。やっぱり、どうせ行くなら晴れの日がいいんじゃないかな」

雨だと移動が困難になるし、火に関連した道具が使いにくくなる。日を選ぶのなら、雨の日は避けたいものなのだ。

意識を屋外の方へ向けてみる。喧噪の陰にうつすらと、雨が地面を叩いているのが分かる。

レオンはイスから立ち上がった。

「僕も手伝います。忙しそうだし」

ベティは少しだけ瞳を大きくしたが、すぐに可笑しそうに笑った。「あんまり手伝ってばかりいると、本当にうちの店員になるよー」

冒険者を目指している身としては笑えない冗談だったが、お世話になっている身分でもあるから、何もしないわけにはいかない。それに、レオンには別の目的もある。

「大丈夫です。それに、やっぱり聞いておきたいので」

その言葉に、ベティは少しだけ笑みを引っ込めた。

「聞いても無駄だと思うよ。みんなベテランだと思うし」

「ダメもとですから。どちらにしても、手伝いますよ」

そういうわけで、レオンは酒場の仕事を手伝った。

手伝うと言っても、出来た料理を運んだだけである。これまでも特に忙しそうな時は手伝う事があった。元々、接客するのは店長とその娘の2人だけ。たまにベティがいない事もあるくらいの、要は、あまり忙しくない酒場なのだ。

それでも、今日のような雨の日は、普段より忙しい傾向があるようだ。もっとも、店員はそれを気にする様子はない。注文が遅れるのはおろか、たまに注文を忘れている事もあるくらいの、良く言えばおおらかな、悪く言えば仕事がぞんざいな店なのだ。どこで忙しくするかを自分達で選んでいるとも言える。

だから、別にレオンが手伝わなくても、ガレットとベティが困る事はない。だが、お客の方から無言の圧力がかかっているような気がして、どうにも落ち着かない。じつとしているよりも、働いている方が、ずっと気が楽なのだ。

それに、レオンにとって、他の冒険者と接触する事には大きな意味がある。特に、今日は雨の為かお客さんが多い。いつもよりわずかながら期待が大きかった。

その期待も、見事に砕け散ったわけだが。

数十分後には、落胆した表情でカウンターに突っ伏しているレオンの姿があった。

「だから、無駄だつて言っただのにー」

隣に座るベティがこちらを見もせずと言つ。彼女の手には、レオンが挑戦中だった錠前と解錠ツールがあった。鍵穴に針金を突っ込んでカチャカチャと動かしているが、恐らく適当にいじっているだけだろう。

「いいんです。僕が諦めきれないだけなので・・・」

力なくそう言つと、そこでカウンター奥の扉からガレットさんが出てくる。昼食後の片づけが一段落したのだらう。相変わらずの山男の様な肉体の上に厳めしい顔が乗っているが、その表情もどこか

困っているように見える。

カウンター内のイスに腰掛けるなり、彼はレオンに言葉をかける。

「無駄だと言ってるだろうが」

数秒前に聞いた台詞だった。

「・・・ガレットさん、ベティさんと同じ事言ってます」

気まずそうな父親に対して、娘の方はくすくすと笑っている。

咳払いしてから、ガレットは諭すように言った。

「だがな。無駄なのは確かなんだよ。今この店にいる連中は、とうの昔に見習い冒険者を卒業して、魂の試練場どころか、この町の外れにある、20階層は下らねえって噂のダンジョンに挑戦しようって奴らばかりだ。そんな奴らにお前みたいなひよっこ混じったところで、最初のモンスターの餌になるのがオチだ。間違っても何かの役に立つわけがねえし、いたら邪魔なだけなんだよ。一時的にでもパーティを組んでやるなんて奴がいたら、そいつはよっぽどの大馬鹿か、妙な下心があるかのどちらかだ。この酒場内にそんな奴がいたら、今頃俺が直々に、そいつが正気かどうか確かめてるだろうよ」

「それは分かってはいるんですけど・・・」

ベティがそこで割り込んだ。声色を変えて、尊大な口調で言う。

「分かってるなら、つべこべ言わずに、とにかく実力をつける事だな。そうすりゃあ、仲間なんざ自然とついてくる。とにかく食べ！そして鍛えろ！身体が弱い奴は冒険者とは言えねえぞ！」

最近の彼女のマイブームなのか、父親の物真似である。気のせい
か、前よりも完成度が高い。

そこで本人が低い声で娘をたしなめる。

「ベティ。今、真面目な話をしてんだよ」

だが、素直に引き下がるベティではなかった。錠前をいじりながら
ではあるが。

「真面目に言わせて貰うなら、お父さんにも責任あると思うなー。
レオンの前に来た見習いを残らず追い返したのはお父さんでしょー

？」

ガレットは片眉を上げた。

「何でそれが関係あるんだ？」

「もし追いついてなかったら、レオンの仲間だったかもしれないじゃない？」

「そりゃそうだが、あれはもう去年の秋だろうが。もう半年になる。仮にまともな奴だったとしても、レオンとはもう実力差が出来ちまつてるだろうよ」

そこでレオンは顔を上げた。

「という事は・・・もしかして、今年来たのは、僕が初めてなんですか？」

自分の前に来た見習いが去年の秋ということは、冬になって、年を越してから来た人間はいないという事になる。

ガレットはどこか遠い目をして言った。

「そうだな・・・よく考えりゃ、早いとは思ってたんだよな」

「え？何がですか？」

答えたのは、隣のベティだった。

「レオンが来たのって、山奥の方からでしょ？」

「え・・・あ、はい。そうですけど？」

「だからまあ分かるんだよね。冬が終わったっていうのが。だけど、低地から来る人達は、いつ冬が終わったかなんて知らないから、もうちょっと暖かくなしないと来ないんだよね。まだこの辺りは雪が積もってると思うてる人もいるんだってさ」。特に、遠い所から来ようって人は尚更分からないから、この時期に来る人はあんまりいないんだよ」

移動するにしろ訓練するにしろ、選べるのなら雪がない方がいい。この店にいる人達が、雨が降っていない方がいいと考えるのと同じである。ずっと山奥で過ごしてきたレオンにとって、低地との季節のギャップに驚くばかりだが、その考え自体はもちろん理解出来るものだった。レオンだって、山を降りる為に春になるのを待ってい

たくらいなのだ。若干フライング気味ではあったけれど、それは、たまたま行商の人が村に来ていて、親切にも乗せてくれたからである。

「ということは、見習い冒険者が来るのは、これからが本番って事ですか？」

それならば、これから仲間が見つかる可能性だってある。

酒場の父娘は、2人ともこちらを見ないままに、同時に答えた。

「俺の目に適う奴だったらな」

「お父さんに追いつかれなかったらね」
全く同じ意見。

父娘は一瞬だけ視線を交わしたが、すぐに目を逸らした。仲がいいのか悪いのか、よく分からない。

それは置いておく事にして、レオンはこれからこの町にやってくる見習い冒険者の事を考えてみる。自分と同じようにまずギルドに行き、そしてこの酒場まで来て面接される。だが、レオンにしてみれば、それは何の障害でもない。なにせ、自分だって大丈夫だったのである。これ以上低いハードルはないとすら思える。

「それなら、焦る事はないですね」

その言葉が、まさにレオンの結論だった。

いつの間にか笑顔になって見習い冒険者を見て、酒場の父娘は顔を見合わせた。どこでそんな結論になったのかは分からないが、問題はなさそうだし、別にいいか。そんなお互いの考えを確かめ合ったのだらう。今度もやはり、視線を交わしていたのは一瞬だけである。

「まあ、そうだな。せいぜい頑張れー」

またベティによる口真似である。そう言いながら、いじっていた錠前とツールをレオンの前に置いた。もちろん、解錠出来ていないガレットは、そんな娘に冷ややかな視線を送っている。

「頑張ります」

レオンはそれを手に取る。これを解錠するのが、今日の目標だっ

た。

「でもさー、レオンは一体何を目指してるわけ？今やってる事といえば、食べて身体を鍛えて、泥棒の訓練をしてるだけでしょ？」

言い方は良くないが、内容は概ね間違っていない。

「ええ、まあ・・・泥棒に師事しているわけじゃないですけど」

「もつと武器の訓練とかしなくていいのー？」

「してまずけど・・・あんまり深く聞かないで下さい」

聞かれると、お嬢様であるデイジーの隠された一面に触れなければならぬ。もちろんベティは既に知っているだろうが、なんとなく、口にしにくい事柄なのだ。

「武器はスローイングダガーとショートソード。盾がバックラー。

まあ、ある意味でオーソドックスではあるな。初心者向きの装備じゃないが」

ガレットがレオンの身体を見ながら言った。彼が口にした装備を、レオンは今も身につけているのである。重さに慣れるためだが、防犯の意味合いも強い。部屋に置いておいて、なくなっていたら困る。「威力なさそうな装備だよー。ハンマーとかにした方がいいんじゃない？」

「・・・ベティさんはハンマー好きですよー」

「武器ならなんでも好きだよー」

「・・・ですよー」

あまり聞きたくない話である。

「というか、その鍵にしたって、そんなちまちまするより、扉を壊した方が早いんじゃない？」

ベティがレオンの手の中にある物を見ながら言う。確かに、ニコルも同じような事を言っていた。

「そうですね、鉄製の扉とかだったら、壊せないかもしれないですし」

「そっちだって、鍵穴がなかったら手も足も出ないわけでしょ？」

「ですね・・・両方出来るのが一番いいんでしょうけど」

「そういえば、レオンは畏の解除とかは習ってないの？」

レオンの手が止まった。

「・・・畏って解除出来るんですか？」

真顔で聞くと、ベティはこちらの顔を見たまま停止した。それを見て、そうやら常識だったらしいという事を思い知る。この町に来てからというもの、自分が世間知らずであるという事を思い知らされる事が多々あった。

だが、さすがと言うべきか、ガレットさんは、口元に余裕の笑みを浮かべていた。

「畏の解除は素人には荷が重い。身に付くまで結構時間がかかるんだよ。だから、とりあえずって事で、先に鍵の解錠から教えてるんだろうよ。鍵はコツさえ掴めれば簡単だし、レオンみたいに、力も魔法もない人間には必要な技術だ。それに、畏の方は解除しなくてもなんとかなる場合も多いからな」

「なんとかなるんですか？」

レオンはすぐに聞いた。これからダンジョンに挑戦する身なのだ。知っておける事ならば何でも知っておきたい。

ガレットは笑みを浮かべたまま答える。

「とりあえず、最低でも、畏に気づけねえと話にならねえけどな。だが、気づいたならまず、その場所を通らねえってのがひとつ。だが、どうしても通らざるを得ないって場合もある。その場合一番簡単なのは、わざとひっかかるって事だ」

首を捻る。

「・・・ひっかつたらまずくないですか？」

「お前自身がひっかかるんじゃないやねえ。例えば床を踏んで発動するような畏だったら、そこに重い物を投げてみるとか、扉に触れたら危なそうだったら、遠くから弓矢で射るとか、要は、畏が発動しても安全な場所にいるって事だな。具体的には、なるべく遠くから発動させるんだ。畏が解除出来ない人間は、大抵そういう手を使ってる」

「へえ・・・」

いちいち感心しているレオンに、ガレットは不思議そうな顔で聞いた。

「というか、お前、元狩人なんだろう？ 罾とか使った事あるんじゃないのか？」

「え？・・・いや、あんまり」

実際、レオンの父親はほとんど罾という物を使わなかった。だから、レオンもそれが普通の狩人だと思っていたのだ。

レオンはそこで重要な事を思い出した。

「あ・・・」

思わず発してしまった声に、ベティが食いついてくる。

「どうしたの？」

「はい、まあ・・・」

正直、忘れていた自分がなんとも情けない。自分で自分に呆れたが、それはともかく、今思い出せたのだから、忘れないうちに言うておかなければいけない。

「ベティさん。ちょっと頼みがあるんですけど」

彼女は真顔で言った。

「寝室に罾を仕掛けて欲しいとかー？」

もし頼んだら、命に関わる罾を用意されそうな気がする。

レオンはなんとか平静さを保ちながら、真面目に答えた。

「違います。あの、アレンさんから聞いたんですけど、ベティさんも狩人なんですよね？」

ベティは一度瞳を瞬かせてから、軽く頷いた。

「そうそう。それがどうしたのー？」

「アレンさんが言うには、ベティさんの師匠のホレスさんって人が、凄腕の狩人だとか」

「うん。何？もしかして、決闘してみたいとか？」

この少女の頭の中は、やはり偏っているようだった。

「そうじゃないです。僕の戦い方の参考になるんじゃないかって言われたので、出来たら会って話をしてみたいんですけど、僕でも会

って貰えるでしょうか？」

「レオンの戦い方？うーん・・・」

いつも即断即決のベティにしては珍しく、何かを思案している様子だった。

「あの・・・無理にとは言いませんけど」

ベティはそこで腕を組んで、少し首を傾げる。

「会つのは簡単なんだけどね」。ただ、レオンの参考にはならないかもよ？」

「え？そうなんですか？」

「とりあえず、ホレスは剣を使えないと思うし」

予想外の情報である。どんな武器でも使いこなせるような猛者を想像していたのだが。

「使えないんですか？」

「使えないと思うな」。ホレスっていえば、とりあえず弓なんだよね。あと、笛」

2番目が既に武器ではない。いくつもの武器を使いこなすのが理想とされた自分とはかけ離れたスタイルに思える。

レオンが首を捻っていると、ベティが笑顔に戻って屈託なく聞いてくる。

「どうするー？とりあえず、弓の腕だけは確かだけど」

「弓の腕・・・」

戦闘スタイルはともかく、弓もいずれば練習しなければならない。それならば、アドバイスのひとつも欲しいところだが、まだ弓は素人同然の自分が突然行ったら、迷惑ではないだろうか。

そこでガレットさんの一押しがあった。

「どうした？とにかく行ってみろ！ひよっこが遠慮するもんじゃねえぞ！」

レオンは頷いて、ベティに向き直る。

「迷惑じゃなかったらですけど、今度ホレスさんに会わせて貰えないですか？」

彼女はあつさり頷いた。

「いいよー。今から行く？」

なんというか、本当に躊躇しない女の子なのだ。

「今からはちよつと・・・」

反射的にそう言ったレオンに、ベティが少し笑った。

「雨降ってるしねー。じゃあ、明日？」

「そ、そうですね。明日晴れてたら」

「りょーかい。というわけで、お父さん明日休んでいい？」

その言葉に、レオンは自ずと気付かされた。

「あ、すみません・・・お店が忙しい時に」

だが、ガレットは笑って答える。

「さつきも言つたる？ひよつこが気にするんじゃないやねえ！分かったか！？」

「は、はい！」

その返事に一笑を返して、今度は娘の方に視線を移す。若干眼が据わっていた。

「ベティ。いい機会だ。この間のけりをつけてこい！」

「はい」

返事はこれ以上ないくらい軽い。

何事もなく話がまとまったようだが、当然と言つべきか、レオンは氣になった。

「・・・この間のけりつていうのは何ですか？」

父娘はまた視線を通わす。また何らかの意志疎通があつたようだ。

「まあ、来たら分かるよー」

ベティは自然にそう言つたものの、ガレットは、こちらから目を逸らして何も言わなかった。何か後ろ暗い事があるのだろうか。それにしたつて、滅多にない振る舞いである。

あからさまに様子がおかしい。

「・・・何か隠してませんか？」

「そうだ。レオンってさあ・・・」

ベティの言葉は続かない。無理矢理話題を変えようとしているのが明らかである。

「・・・絶対隠してますよね？」

「隠す程の事じゃないよー」

「だったら話して下さい」

「でも・・・」

そこでちらつと、父親の方を見た。また例の意志交換である。

ベティの表情に陰が差す。

「・・・聞いたら、レオンはどうなるかな」

声のトーンが暗い。いつも明るいだけに、より顕著に感じられた。よく分からない。分からないけれど、レオンは閃いた。

畏かもしれない。畏というか、深入りしたら危ない。避けよう。

そういう判断が、瞬時に採択された。

「そ、そういうえば、ホレスさんってどんな人なんですか？会う前に、少し聞いておいた方がいいですよー！」

必死の話題転換である。自分でも分かるくらい、不自然に明るい。だが、とりあえず畏は避けられたようだった。ベティが元の笑顔に戻る。

「ホレスはまあ、変わり者だよね。でも、私は好きだなー」

なんとも軽い好きだった。少なくとも、レオンが慌てないで済むくらいの軽さである。

「そうなんですか。良い人って事ですよー」

「そうだねー。あと、さっきも言ったけど、弓と笛が上手」

「弓はもちろんですけど、笛も教わってみたいですね」

「そっかー」

ベティにしては短い台詞だった。

彼女は、しきりに首を捻っている。

「・・・どうかしました？」

「うーん・・・なんか、まとまらないよね」

「何ですか？」

「笛が上手で、鍵開けも上手い。なんだそれーって言われそう」
悲しい事に、自分でもそう思った。

「・・・とりあえず、弓の方を優先で」

なるほど。戦闘系がないとしまらないものだな。

その日最後に得たのは、そんなどうでもいい教訓だった。

ファースト・エンカウント

自治都市ユースアイは、レオンの故郷の村程ではないものの、十分に丘陵地と言える場所にある。

レオンには低地でも、一般的な感覚からすれば高地。夏には避暑地として観光に来る人もいるらしい。周囲はなだらかな平原が広がっているし、未踏破ダンジョンとも距離があるから、モンスターがうろついている事もほとんどない。北から西にかけては大山脈の一角が占めていて、そこで育まれた大自然の実りと、天然の防衛網の恩恵を得ている。少し東に外れた場所には、大きな湖があつて、景観はもとより、水資源の宝庫でもあるらしい。ただ、春や秋には、湖に流れ込む川が氾濫する事が多々あるらしく、それを避ける為に、少し離れた今の位置に町が形成されたという事だった。

まだこの町に来て2週間程だが、住みやすい町だと思った最初の印象は揺らぐどころか、疑いような確信となっている。自然環境に恵まれた町なのは間違いないし、そこで生活する人々も、その豊かさを象徴するように、気質が穏やかな人が多い。レオンの村の人々も気性が荒いわけではないのだが、やはり育った環境そのままに、厳格で逞しい人が多かった。そんな中でも、レオンの家族は例外で、よくぼんやりしていると言われたものだが、この町ではそれほど浮いているわけではない。もちろん、田舎者で世間知らずなのは否めないけれど。

そんな穏やかな町だから、防衛の為の施設がほとんどない。せいぜい獣がやってくる程度の事しかないのだろう。町の周囲には簡単な木製の塀があるだけ。門には警備の人間が一応立っているが、申し訳程度に槍を立てかけているだけである。訓練所のアレンさんが警備と教師を掛け持ちしているのも、きつと警備だけだと暇過ぎるからだろ。言わば、警備員というかボランティアの自警団なのだ。

そのボランティアの警備員に、隣を歩くベティは慣れた様子で声をかける。普段は雑貨屋で働いていそうな、荒事とは無縁そうなお兄さんである。もしかしたら、一番重要な仕事は、ここを出入りした人間を覚えておく事なのかもしれない。腕っ節はともかく、記憶力ならば期待出来そうだった。

レオンとベティは、並んでユースアイから出て行くところだった。方角は西。畑や放牧地の横を抜けながら、短い草の生えた道を歩く。昨日は雨が降ったが、歩きにくいほどはぬかるんでいない。近くには木々がほとんどない為、これ以上ないくらい見晴らしがよかった。

右手には険しい山々。まだほんの少し雪が残っているようだ。

左手には平原が続く。それが途切れた先には山々が見えるが、あまり高いようには見えない。もしかしたら、レオン達が立っているこの場所の方が高いのかもしれない。

2人の目的地は、この町の郊外にあるというウイスキーの蒸留所だった。元々は、ベティの母親の両親の物だったらしいが、今管理しているのはベティの父親のガレットである。

「そういえば、どうしてわざわざ町の外に作ったんですか？」

急に思いついたので、レオンは聞いてみる事にした。

ベティがこちらを向く。いつものブラウンの瞳とポニーテール姿だが、今日はエプロンではなく、シャツの上に長袖の上着、そして薄汚れたズボンを履いている。完全に作業用のファッションだった。そして、背中に矢が詰まった矢筒を引っかけている。弓がないから危険はないはずだが、彼女が持っている、なんとなく不安になる。かく言うレオンも、同じ物を背負わされていた。結構重いが、苦になる程ではない。

「水がどうか、湿度がどうか、要はそういう事らしいよ。こだわりの銘酒なんだって」

「なるほど・・・」

レオンは頷く。場所にまでこだわって、味を追求したという事だ

ろっ。

「一応、ちょっとしたブランドらしいよ。少しだけけど、遠くからも取り寄せの注文があるくらいだから」

彼女はいつもの口調だったが、恐らく、そんなにありふれた事ではないはずだ。

「・・・あの、それって凄い事だと思うんですけど」

その言葉にも、ベティは少し首を傾げるだけだった。

「そう？でも、私は小さい頃から飲んでるから」

小さい頃からのというのも極端な話だが、何を隠そう、レオンも小さい頃からアルコールを飲んでいた。お湯で何倍にも薄めた物だが、極寒の冬を越す為の生活の知恵である。

「そうですか・・・さすが酒場の娘という感じですね」

「そうだねー。お陰で今だと何杯飲んでも平気だよ」

「・・・あの、子供の頃からってというのは、もしかして、薄めないで飲んでたんですか？」

ベティは当然といった様子で頷く。

「当たり前でしょー？もしかして、レオンはお酒だめなの？」

「アルコールに強い弱いはともかくとして、ユースアイには飲酒の年齢制限はないんですか？」

ちなみに、レオンの村にはなかった。だけど、普通はあるものだと聞いていたのだ。

「あるよー」

「あるよーって・・・いくつかからですか？」

「16歳以上」

「・・・ベティさんの小さい頃ってというのは、もちろん16歳未満ですよ？」

「そうそう」

「それって・・・どう考えても法律違反じゃないですか？」

そこでベティは微笑む。微笑みというには、邪過ぎる表情だった。

「ばれたらしょうがないよねー」

「いや、しょうがないって・・・」

たじろぐレオンだったが、ベティはすぐに表情を緩めた。

「まあ、本当の事を言つと、法律違反じゃないんだよ」

「え？そんなんですか？」

ベティは得意げに頷く。だけど、すぐに少しだけ目を細めた。

「私が子供の頃にはね、私のお母さんのお父さん、つまりお祖父さんがまだ生きてたんだ。そのお祖父さんがウイスキーづくりを始めた人だけど、よく仕事場まで遊びに行つてたんだ。それで、まあ、お祖父さんは優しい人だったんだけど・・・なんていうのかな、押しに弱い人だったんだよね。孫が可愛かつたんだと思うけど」

レオンには、おぼろげながらも話の展開がよめた。

「まさか・・・ウイスキーを飲ませて欲しいって言つたんですか？」

頼む方も頼む方だが、飲ませる方も飲ませる方である。

「そうなんだー。あの時のウイスキーは美味しかったな・・・きつと、孫娘への愛情がたつぷり詰まっていたからだよね」

美談みたいな言い方だったが、もちろんそんなわけがない。

「あの、ベティさん」

「何？」

「結局、16歳未満でお酒を飲んでるわけですから、法律違反ですよね・・・？」

ベティは右手の人差し指を立てて軽く振る。

「それが違うんだよ。私がお酒を飲んだのは、蒸留所の中でしょ？」

「・・・それがどうかしたんですか？」

「あそこはユースアイの法律の適応外なんだよ」

それだけ言われても、レオンにはさっぱりである。

「・・・えつと、すみません。もう少し詳しくお願いします」

「うーん、私もあんまり詳しくないんだけど」

「そこをなんとか」

「じゃあ、だいたいでいくねー」

彼女は右手の人差し指をくるくる回し始める。何の意味があるのかはよく分らない。

「自治都市ってだいたいの事は自分で決められるんだけど、一部だけ、国に認可して貰わないと作れない物があるんだって。たぶん、鉱山とか河川の開発とか、要は資源系だと思うけど」

「へえ・・・」

話が大き過ぎるので実感がわかないが、そういうものなのかもしれない。

「だけど、どういうわけか、お酒に関する施設も国の認可がいるんだよ。なんか、大昔にお酒が原因で争いみたいなのがあったらしくて、今の国になってからも、お酒に関する事は徹底しようって事になったんだって。歴史に学んだって事だと思うけど・・・あ、歴史の話ならデイジーが詳しいから、興味があつたら聞いてみたら？」

「えつと・・・あ、はい。機会があつたら」

正直、興味云々の前に、お酒で争いが起きたという史実を想像するのすら難しい。どんな状況になったら、お酒程度の事で、そんな深刻な事態になるのだろうか。

ベティは、回していた指を下ろして、話を続ける。

「そういうわけで、お酒関連の施設は全部国の管理下にあるって事になってるんだよね。だから、自治都市の管理内でも、蒸留所内は国の法律優先なんだ。それで、この辺りは、国の区分では寒冷地って事になってるんだよ。そして、もっと寒い山奥の方では、冬場に身体を温める為に子供にもアルコールを与える習慣があるから、寒冷地には特例が適応されてるんだって。レオンの村でも、普通に子供の時からアルコール飲んでたでしょ？」

「あ、はい」

「国の区分だと、ユースアイもレオンの村と同じって事になってるんだよねー。まあ、低地の人から見たら一緒なのかもしれないけど、ユースアイは結構新しい町だし、低地から来た人も多いからそんな習慣はないんだ。だから、ユースアイの法律では普通に16歳まで

飲酒禁止。それなのに、蒸留所内は国の寒冷地特例で飲んでもよしうん、不思議だねー」

「なるほど・・・」

要は、蒸留所内は法律上ユースアイではないという事らしい。なんとなく屁理屈のような気もするが、レオンも同じ寒冷地特例の恩恵を受けていたわけだから、人の事をとやかく言う筋合いはない。

ただ、一応一言だけ言っておこうと思った。

「それは分かりましたけど、ベティさん」

「何ー？」

「子供がウイスキーをストレートで飲むのはまずいと思いますよ・・・下手すると倒れるだけでは済みませんから」

ウイスキーはアルコール度数が40を超えるものも珍しくないのだ。大人でも危険な状態になる事もあるくらいだから、身体の小さい子供は尚更である。

ベティは楽しそうに言った。

「飲んだって言っても、ちょっとだけだし。でも、あれで味を覚えたのは確かだよね」

「・・・お祖父さんはとんでもない事を覚えさせましたね」

「何？もしかしてレオンはお酒ダメな人？」

「いえ、飲めない事はないですけど」

「そっかー。じゃあ、レオンが初めてダンジョンクリア出来たら、祝杯だねー」

嫌な予感しかしない提案だった。

「祝杯って、あの、僕は別に・・・」

「我ながらいい事思いついたなー。どうせなら、みんな呼ぼうか。うんうん。みんなお酒強いからね。きつと凄い事になるよー」

「なるよーって・・・」

凄い事ってどんな事だろうか。とりあえず気になったのは、血を見る事になるのかという事。そして、ならないまでも、怪我をしないうで済むだろうかという事だった。ベティとガレットがいるだけで、

半ば予想が出来る事だったが。

本当に凄惨になるかもしれない。凄惨という意味で。

「・・・とりあえず、魂の試練場のクリアまでとっておいて貰えませんか？」

レオンは控えめに、そう口にした。

その言葉を言い終えた、その時だった。

何の前触れもなく、その音は聞こえた。

最初は、どこか遠くで雪崩が起きたのだろうかと思った。腹に直接響くような低い音。山の唸り声の様だった。

レオンとベティは立ち止まる。

2人がいるのは、ユースアイからかなり離れた場所である。町はだいたい後方に見える。周囲にはもう畑等はなく、ただ丈の低い草地が広がるだけである。元々、こちら側には農地が少ないのかもしれない。

見晴らしだけは抜群にいい。

「・・・獣の声だった？」

ベティがこちらを見て聞く。いつもの彼女の笑顔はなりを潜めていて、どこことなく不安げな表情だった。

それを見て、レオンは自分の表情を認識した。

見た人が不安になるくらい、怖い顔をしていたんだ。

「いや・・・」

笑おうとは思えなかった。狩人生活の長かったレオンにははつきりと分かったからである。

あれは獣の声じゃない。あんな声で鳴く獣は、あの山にはいない。そうになると、他に考えられる可能性は、そう多くはない。

そこでまた、地響きの様な音が聞こえる。

レオンは驚いた。

とんでもなく近い。

そして、音はすぐに終わらなかった。

どんどん近づいてくる。

黙ったまま、ベティの腕を左手で掴んだ。

「え？何？ちよつと・・・」

少女の狼狽えた声に構わず、レオンは体勢を低くする。ベティに背を向けて、右手を短剣の柄に持っていた。

近づいてくる地響き。そして振動がはつきりと伝わってくる。

まさかとは思った。だけど、もう疑いようがない。

何か地中にいる。

しかも、かなり大きいやつが。

あと数秒もすれば、ここに到達するだろう。

武器はある。だけど、鎧がない。戦えるだろうか。

だが、レオンの決断は早かった。

「逃げて」

自分だろうか？と疑うくらい無機質な声だった。同時に、背負っていた矢筒を地面に放り出す。

「え？」

背後の彼女が戸惑っているのが分かる。だけど、もう待っていていられなかった。

レオンは左手でベティの身体を突き飛ばした。彼女の身体が自分から離れる。

「逃げて！ベティ！」

その声のわずか後。

自分の二の腕くらいはあるつかという程の太さの針が、突如地面から飛び出してくる。

レオンの顔めがけて。

咄嗟に右後方に倒れ込む。避けたつもりだったが、もしかしたら腰が抜けたのかもしれない。だが、すぐに左手について反動で立ち上がった。体勢を整えながら、周囲を観察する。

そこで見てしまった。

針だと思ったのはほんの一部で、実際には黒い木の幹の様な物の先に、同じ黒い針が付いていただけである。針自体はそれほど太く

ないが、それでも槍の穂先くらいはあった。その針を操る黒い幹は怪しく蠢いている。

それだけでも十分気色悪いが、それに拍車をかけるものがあった。目玉。

そうとしか例えようのないものが、地面から顔を出しているのだ。生えていると言った方がいかもしれない。

その周囲は地面がめくれてしまっていて、幸か不幸か、目玉の動きがよく分かる。キョロキョロと辺りを観察しているようだ。大きさは人間の物どころではなく、明らかにどの生物のものより大きい。生物ではないのだ。

いつか戦う事になるはずだった。その時に緊張しないように、あるいは恐れないように、心の準備をしていたはずだった。その成果なのかは分からないが、とりあえず、緊張も恐怖もそれほどではない。だからといって、もちろん嬉しいわけがない。

まさか、こんな所で会うなんて。

目玉の周囲の地面が崩れていく。

地震のような地響き。

やがて、地中からせり上がるようにして、それは全貌を表した。

サソリという虫によく似ていた。同じ様な地を這う体勢に、大きな鋏状の前脚。長い尻尾の先には鋭そうな針。ただ違うのは、その大きさが、高さで2メートル、全長は尻尾を入れれば軽く5メートルを超すくらいはあるという事。鋏以外の脚が4本しかない事。

そして、通常なら顔にあたる部分に、大きな目玉がひとつだけしかない事。

見たらもう疑いようがない。こんな生物はいない。

間違いなく、モンスターだった。

レオンは右手にスローイングダガーを握る。左手にも握っておくが、投げるのは無理だ。投擲には相当な技術が必要で、レオンはただ右手でしか投げられない。左手に持っていても、持ち替えの時間

を短縮する程度の意味しかない。

武器はダガーが3本とショートソード。これ以外には何も準備していない。

その一本目のダガーをレオンはいきなり投擲した。

狙いは目玉。一番弱そうな部位だったからである。

だが、サソリ型のモンスターは、あつさり左の缺でそれが弾いた。機敏かつ的確な動き。

巨体に似合わないその動きに驚きつつも、早くも困り果てた。

自分の装備があまりにも少な過ぎるのだ。もっと武器や道具があれば工夫しようがあるが、それもない。近づこうにも、鎧がないから強気には出られない。かといって、弓もないから遠距離だと決定打がない。投擲程度の速度だと見切られてしまうのだ。

隙をつくしかない。

2本目のダガーを腰から抜こうと思った時だった。

目玉の周りで紫の光が軌跡を描く。

信じられなかった。

幼い頃に、母親に一度だけ見せて貰った事があった。あの時は青白い光だったが、今のも間違いない。

魔法だ。

そう気付いた時には遅かった。

球形だったモンスターの目玉の輪郭が突如歪む。

直後、レオンの身体はバランスを崩しそうになる。

音は普通に聞こえる。だけど、視界がおかしい。水の上に垂らした油が広がっていくように、中心から歪んでいく。

魔法の効果だという事には、すぐに気付いた。

もちろん気分は良くない。だけど、目を瞑ったらもっと酷い事になる。

その予感が、レオンの気力を保っていた。

モンスターが近づいてくるのを音で判断する。虫が動き回るような小さな音ではないが、ぬかるんだ地面のせいで、音の大半が吸収

されてしまっているようだ。

何を恐れるべきなのか、向こうの武器で注意すべき物は何なのか、必死に考えた。

尻尾の針だ。

歪んだ視界に黒い面積が増えたとき、咄嗟に身体を右に捌く。視界が曖昧だから、上手く動けたのかよく分からない。

左側で風を切るような音が響く。

上手く避けられたのか。

だが、その一撃で終わりではなかった。

腹部に衝撃。

後方に飛ばされる。地面から足が離れて、宙を浮く程のパワーだった。

地面に倒れ込む。

腹部の痛みに耐えながら、必死に息をした。それと同時に、頼りにならない視界は諦めて、耳の方に神経を注ぐ。

地を引きずる音が近づいてくる。

速い。

勘弁して欲しいと思った。あるいは、諦めて楽になりたいと思ったのかもしれない。何の前触れもなく、アレンの言葉を思い出す。最初は誰でも負けたいと思っている。きっと用法は間違っているけれど、今の自分と少なからず共通点はあるような気がした。

だけど、レオンは諦めない。

それが父からの教えだったから。

自分かとどめを刺す動物達。彼らは最後まで目を逸らしたりはしない。最後までじっとこちらを見ているのだ。

それが生きるという事だ。

父の声が聞こえた気がした。

「レオン！」

ベティの叫ぶような声。

危機感が体中を駆け巡る。

左手を地面に叩きつけ、その反動だけでその場から離れた。
わずかに遅れて、地面を抉るような音。

右手をついて体勢を起こしながら、内心助かったと思った。思わずベティにお礼を言いそうになる。

だけど、いつまで避けていられるだろうか。

この目眩ましの魔法がどれくらい続くものなのか、レオンには判断出来ない。魔法を使った事はおろか、効果を体験したのも今が初めてなのだ。予測なんて出来るわけがない。

モンスターの足音は容赦なく近づいてくる。

諦める気はない。だけど、手が何も思い付かない。

焦りが顔を出す。

だが、突然、モンスターの足音が乱れたような気がした。

レオンは訝しんだ。普通にこちらに迫ってくる感じではない。脚を地面に擦り付けているような、ともすればのたうち回っているような、そんな感じた。

その時、突然レオンの視界が戻った。何の予兆もなかった為、魔法が切れたのだと気付くのに時間がかかった。

そして、目の前の光景に驚く。

そこにいたのはサソリ型のモンスター。そこまでは当然だが、視界が戻ってみると、それは本当にのたうち回っていた。十分気持ち悪い光景だが、それよりもレオンは、モンスターにも痛覚があるんだなとぼんやりと思った。

痛みの原因。それは、モンスターの目玉を見れば明らかだった。

その中心を、矢が数本も深々と貫いている。

よく見ると、それは今日自分とベティが背負っていた矢にそっくりだった。自分のはとくに放り出してしまったから、もしかしてベティの矢だろうか。

だけど、彼女は弓を持っていなかったはずだ。そう考えながら、レオンはベティを突き飛ばした方へと視線を向ける。

なんだか随分久し振りに見た気がするベティは、今も尻餅をつい

たままの体勢だった。大怪我をしている様子はないので、とりあえず安堵する。彼女の矢筒は背負われたままだ。

彼女は自分とは反対側を見ている。

レオンもそちらを見た。

最初は誰もいないと思った。だが、よく見ると平原の遙か彼方に、馬に乗った人物がいる。

その人物が馬を駆りながら、弓を構えたように見えた、その一瞬後。

感じたのは、視界で捉えきれない程の速度で飛来した何か。

「え？」

思わず声に出るほど驚いた。

モンスターの目玉に刺さった矢がいつの間にか増えている。それを確認している間にも、次々と吸い込まれるように突き刺さっていく。中には、貫通し過ぎて、やじりが見えてしまっているものもあった。

レオンはもう一度馬の位置を確認した。軽く200メートル以上は離れている。あんな距離では、狙いに正確に命中させる事はもちろん、これだけ深々と刺さる勢いが残っている事もあり得ない。ましてや馬を駆りながらとなると、想像も出来ない領域の腕前だ。

だが、状況から考えるとそれしかない。何故なら、他には誰もいないのだから。

目玉を蜂の巣にされたモンスターはほとんど動かなくなった。

やがて、身体中から紫の煙を出したかと思うと、空気に溶け込むように薄くなつて、あっという間にその姿を消した。

助かったとは思わなかった。

この信じがたい弓の腕を見せられて、ただ呆然と、何もいなくなつたモンスターの跡を眺めていた。

支える瞳

昨日の雨の影響なのか、それともいつもこうなのか、湿っぽい空気が漂う場所だった。

平原にぼつりと建っている、廃屋と呼んでも差し支えない小屋。むしろ、建物というよりも、休憩所と呼んだ方がいいかもしれない。誇張でもなんでもなく、四隅の柱に屋根が乗っているだけの建物である。昔はちゃんとした壁があつたのかもしれないと想像が出来るくらいには壁らしき物が残っているが、それもほぼ半壊状態。文句なしのオンボロ小屋である。

ただ、そもそも屋根さえあれば十分だったのだろう。その小屋の中心あたりに、岩を加工して作つたらしい、地下扉がある。レオン達がいるのはその中だった。

扉と同じ岩で出来た階段を下っていくと、まず事務室らしき部屋にたどり着く。テーブルやイスはもちろん、棚や水道もある。壁も床も石材だから、暖かみも何もないが、不思議と寒くはない。ろうそくの明かりが、廠かで幻想的な雰囲気を出していて、ちよつとした非日常を味わえる不思議な場所だった。どこかで匂った事のあつんとした香りが、うつすらと漂っている。

レオンは、この部屋にひとつしかないイスに座らされて、ベティに傷の手当てを受けているところだった。彼女は狩人だからなのか、なかなか手慣れた様子だった。

「擦り傷とかはともかく、お腹は平気なの？」

右手首に包帯を巻きながら、ベティが聞く。彼女は片膝をついた姿勢だった。その方が巻きやすいのだろうが、自分だけイスに座っているこの状況は、なんだか申し訳ない。

一応、空いている左手で腹部に触れてみる。

「ちよつと変な感じですけど・・・痛くないので、たぶん平気だと

思います」

モンスターの巨大鉄によって、身体が吹き飛ぶくらい殴打された腹部だったが、骨はおろか、内出血している様子もない。違和感があるにはあるが、きつと打撲程度だろう。

その返答に、ベティは少しムツとしたようだった。薄暗い上に陰になっていたので、表情がよく分からない。

「そういうのは危ないと思うな」。町に戻ったら、一応医者に見て貰った方がいいよ」

「え？ いや・・・そんなに大した事ないですよ。寝て起きたら元通りだと思います」

「痛くないって、無理してない？ あんなに吹き飛んでたのに」

「いえ、全然」

「本当？ ちょっと触ってみてもいい？」

「え、あ、はい・・・あの、拳を握るのはやめて下さい」

そう言つと、ベティは笑った。どうやら突っ込み待ちだったらしい。あっさりと拳を引っ込める。

「そう言うベティさんこそ、大丈夫ですか？」

最初に思いつき突き飛ばしてしまったのが、レオンは一番気になつていた。だが、それがなかったとしても、突然モンスターに襲われたわけだから、動揺していてもおかしくない。

「私は平気。レオンのお陰で無傷だったからね」

ベティは明るく答えたものの、少し元気がないような気がした。

この場所の雰囲気のせいかもしれないし、自分が心配しているせいかもしれない。だけど、もちろんそれで納得出来るわけがない。

「・・・すみません。僕につき合ってもらったから、酷い目に遭わせてしまつて」

後悔の念でいっぱいなのレオンだったが、ベティは優しい表情でそれに応える。

「それって逆だよな」

「え？」

「レオンがいたから助かったよー。ありがとう」

思いも寄らない言葉だった。

自分がここまでの道案内を頼まなければ、彼女が怖い目に遭う事もなかったのに。

「いや、そんな・・・」

ベティはそこで立ち上がって、両手を腰に当てた。顔は優しいまままだ。

「分かってないなー。ここまで案内してあげるって、私が請け負ったんだから、レオンが気にする事ないでしょ？それどころか、あんな大きいモンスターを相手に私を守ってくれたんだから、ありがとうっていうのが普通じゃない？」

「守ったっていうか・・・あんまり守れてませんでしたけど」
事実、自分だけだったら完敗だっただろう。

ベティはそこにやりと笑う。

「そうだねー。レオン、あんまり強くなかったね」

「・・・ですよね」

武器や鎧がなかったとは言える。だけど、それは言い訳というものだろう。準備万端だったとしても、あの目眩ましの魔法を使われたら、負けていた可能性が高い。

がつくり肩を落とすレオンに、ベティは顔を近づける。

「でも、格好良かったよ」

思わずドキツとするような大人びた声が、耳元で囁かれる。

当然とすべきか、レオンはこれ以上ないくらい慌てふためいた。元々バランスの悪かったイスごと、後ろに倒れ込む。

そんな過剰反応に栗色の瞳を大きくしたベティだったが、すぐに笑顔に戻る。

「ダメだなー。こっちは全然免疫出来ないねー」

「・・・お願いですから、僕で遊ばないで下さい」

身体とイスを起こしながらレオンが言った。とにかく心臓に悪過ぎる。目眩ましの魔法なら視界だけで済むが、こちらは思考が止ま

るからもつと質が悪い。

ベティは悪びれる様子もなく微笑んだままだった。

「いいでしょー？だって、格好良かったのは本当だし」

「格好良くないですよ。というか、格好良かったとしても普通に言っただけさ」

「さっきのは普通だと思うなー。なんなら、普通じゃない方を聞いてみる？」

「・・・すみません。さっきのが普通でした」

レオンはすぐに折れた。これ以上の衝撃は心臓が保たない。

それで満足したのか、ベティは一息吐いて、この部屋唯一の木製の扉の方を見る。その扉の向こうにある物が、この地下空間で最も重要な物なのだ。

即ち、ウイスキーの蒸留所。

「それじゃあ、治療も済んだし、ホレスに挨拶しよつかー」

「あ、そうですね。さっきのお礼もしないといけないし」

レオンは立ち上がりながら同意する。

その言葉を聞くと、ベティは何も躊躇せずにその扉の方に向かう。彼女は子供の頃からここに入出入りしているのだ。十分に勝手知ったる場所だと言えるだろう。

彼女の後ろに、レオンも続く。

木の扉の向こうに入ると、そこはまさに酒蔵といった様相だった。先ほどまでいた事務室らしき場所もそこその広さがあった。生活しやすいかはともかくとして、広さだけなら十分一人暮らし出来る程である。だが、こちらの酒蔵の方を見ると、それも氷山の一角だった事が分かる。

とにかく目に入るのは、棚によって綺麗に整列された酒樽の山だった。人1人が入れるくらいのおおきな樽が、横倒しの状態で所狭しと並べられているのだ。他にも、蒸留用の道具なのか、巨大な木製の器具や箱が積み上げられているが、それすらもほんの一部。とにかく酒樽だけで、ニコルのガレージはおろか、もしかしたら、ガ

レット酒場くらいのスペースは占拠されているかもしれない。もちろん、高さは一階分程度しかないのだが、広さは相当な規模のものだ。

その酒樽を収納している棚。それによって通路が仕切られているようなものだが、扉のすぐ正面の通路の奥に、1人の男が壁にもたれて座り込んでいる。どちらかというと、しなだれかかっているという感じかもしれない。足を投げ出して、どこか気の抜けた感じでぼんやりと近くの酒樽を眺めているように見える。

正直、レオンには違和感があり過ぎた。さっきの神業の射手はどこに行っただのか。もしかして双子の別人だろうか。

一応周囲を見渡してみる。もちろん、視界のほとんどは酒樽によって遮られているのだが、他の人の気配はなさそうだった。

そんなレオンをさし置いて、ベティはさつさとその男性の方へ歩いていく。しばらくしてからそれに気付いて、レオンもその後続いた。

たどり着くまでの十数秒間。男は微動だにしなかった。

「ホレス。さっきはありがとう」

ベティが抑えめの声で言う。

その声に、ようやくその男はこちらを向いた。

なんというか、恐らく中肉中背の人なのだ。むしろ、少し上背があるから、体格的には恵まれているはずである。だけど、どこことなく彼が貧相に見えてしまうのは、ボサボサの髪と、年季が入り過ぎている服装、そして、まるで魂が抜けてしまったかのような、無造作な座り方のせいに違いなかった。

そんな彼の唯一の明るさ。それは間違いなく彼の瞳だった。

髪に半分隠れているが、確かに彼の瞳は、右目だけエメラルドのような碧色。左目はベティと同じブラウンの瞳。

瞳の色が左右で違う人がまれにいるとは聞いていたが、実際に見るのはこれが初めてだった。

「気にするな」

ぶつきらばうな声だった。不機嫌なのか、それともこれで普通なのか、レオンには判別しかねるところである。

ベティはそんな口調にも構わず、親しげに会話を続ける。

「気にするなつて言われても、気にすると思わない？ ねえ、お礼は何がいい？」

「礼なんかされたら困る」

「別に困らないでしょー？ キスくらいでいい？」

一番動揺したのはレオンだっただろう。言われたホレスの方は無表情そのものだった。

「安売りするものじゃない」

「安売りじゃないでしょー？ だって、命の恩人なんだし」

「命の恩人なら、そっちの彼の方だ。お礼なら彼にしたらどうだ？」
とんでもない提案だった。

密かに、いつでも逃げ出せるように準備していたレオンだったが、ベティはこちらを振り向きもしなかった。それどころか、どこか不満そうな口調になる。

「ホレスは、私がレオンにキスしてもいいわけ？」

「ベティの自由だ」

「何それー？ 私のフィアンセでしょー？」

さすがに、レオンはその言葉を無視出来なかった。

「あのー・・・」

ベティとホレスがレオンの方を向く。

「・・・今、フィアンセつて言いました？」

「うん」

あっさりと頷くベティ。

レオンの頭の中では、なぜかフィアンセという言葉の定義を確認する作業が始まっていた。もしかしたら、婚約者という以外の意味もあったかもしれない。それどころか、もしかして、婚約者という意味だと思っていたのは自分の勘違いだったかもしれないと、そんな意味不明な疑問が頭の中を駆け巡っていた。

もちろん、そんな勘違いはない。

それをどうにか受け入れた瞬間、レオンの身体は驚きの声をあげるべく、止まっていた空気を思いつきり吸い込んだ。

そこに、男の声がタイミング計ったかのように水を差す。

「ここで大声は出すな」

急な要請だったが、なんとか、声ではなく息を吐き出すにとどめる事が出来た。

そんなレオンの様子を見て、ベティは可笑しそうに笑う。

「もしかして、レオンは私にフィアンセがいてシヨックだったのー？」

言われてみて、腕を組んではたと考えてみたが、しばらくして首を捻る。

「・・・いえ、あんまり？」

ベティは腰に手を当てる。だが、顔は笑っていた。

「それはそれで、ちょっと傷つくなー」

「あ、いえ。もちろん、驚きはしましたけど」

フォローのつもりだったが、あまり意味をなしていなかった。

そこでまた、ホレスの声が割り込む。

「フィアンセといっても、もう無効だ」

「無効・・・？」

そう言われても、レオンにはよく分からない。

その様子をみて、ベティが説明する。

「さつき、私のお祖父さんの話をしたでしょ？」

「あ、はい」

あの後モンスターに襲われたわけだが、もちろん忘れてはいない。ここで子供だったベティにウイスキーの味を覚えさせたという、ある意味で罪人である。

「ホレスはね、そのお祖父さんのお気に入りだったんだよね。ちょっととした縁で知り合って、この手伝いをしてくれてたんだ。えっと・・・もう何年くらい前からだったっけ？」

「15年」

素っ気ない答えにも、ベティは慣れた様子だった。

「その頃はまだ私も小さかったから、ずっとお祖父さん1人だったんだよ。だから、きつと少し寂しかったんじゃないかな。息子がいれば後を継がせたかったんだろうけど、女の子ばかりだったし。だから、ホレスが手伝ってくれるようになって、きつと息子っていうか、まあ、後継者にしたいと思ってたんだよね。ホレスは見込みがあるって、よく言ってたし」

「俺はそれほどでもない」

「そんな事はいいの」

ホレスの呟きにベティがすぐさま言い放つ。手慣れた会話で、本物の兄妹みだった。

「それで、ずっとお祖父さんとホレスが2人でここを切り回したんだけど、3年ちよつと前くらいに、お祖父さんが体調を崩しちゃって、まあ、なんていうか・・・もう仕事には戻れないって事になっちゃったんだ。もういい歳だったからね」

ベティの表情は明るいが、どこか笑顔になりきれていない。まだ3年程しか経っていないのだから、無理もない。その人とベティには思い出がたくさんあるようだから、尚更である。

「あの、ベティさん。別にいいですよ。僕、そんな話になるとは思わなかったの・・・」

レオンの言葉に、ベティは少し照れたような笑みを浮かべた。

「いいのいいの。えつと・・・あ、そうそう。それで、いよいよ最後つて時に、何かお祖父さんを喜ばせたいと思ったんだよね。それなら、ホレスがここの後継ぎになるって事が決まれば、安心出来るだろうなって思って、もう思いついたその日に、ホレスのところまで行って、すぐに病室まで連れて行って、私達婚約しましたーって」

なんというか、子供みたいな話だが、レオンは素直にベティらしいなと思った。呆れるよりも前に、思わず笑ってしまった。

ベティもそれにつられたようで、いつもの笑顔に戻った。

「あの時は、私はまだ結婚出来ない歳だったからねー。もう1年遅かったら、勢いで結婚してたかもしれないなー。ホレスも別によかったでしょ？」

「そうだな」

当たり前みたいに聞いたら、当たり前みたいな答えが返ってきた。

「いや、あの・・・結婚ですよ？」

レオンが怖ず怖ずと確認すると、ベティはきよとした顔をする。

「そうだけど？」

「えっと・・・結婚ってあれですよ。夫婦になるっていう」

また言葉の定義をついつい確認してしまう。

「当たり前でしょー？他にケツコンっていったら、すぐに拭き取ったらそうでもないけど、後になつたらこびりついて取れなくなる、お父さんの喧嘩の後にいつの間にか増えてるあれの事くらいじゃない？」

ベティにしてみたら、確かに血痕はそういう物かもしれない。

「そうじゃなくて・・・普通は、結婚って好きな人同士がするものですよね？」

その質問に、ベティは真顔で答えた。

「私、ホレスの事好きだけど」

何の偽りも感じられない、堂々とした宣言だった。

ベティはホレスの方を向いて聞く。

「ホレスも私の事好きでしょ？」

「そうだな」

またもや、当たり前みたいな会話だった。

レオンはたつぷり間を空けてから、慎重に言葉を選んで聞いた。

「・・・あの、僕が気付いてないだけで、ベティさんとホレスさんは恋人同士なんですか？」

「うっん」

「違う」

同時に、同様の答えが返ってきた。

レオンはなんとか、納得のいく答えを導きだそうとする。その数秒後にはあえなく破綻したのだが。

「・・・すみません。僕にはついていけないみたいです」

正直に敗北宣言する。

2人がどういう関係なのか、さっぱり分らない。

あっけらかんとした口調で、ベティは言った。

「それよりも、レオンはここに来た目的を忘れてないー？」

そうだった。すっかり忘れていたのは事実だが、今ならすぐに切り替えられる。とりあえず、現在の摩訶不思議な難題を忘れ去りたいという思いが強過ぎる。

レオン本人が聞く前に、ベティが勝手にホレスに尋ねた。

「ホレスー。レオンが弓と笛を教えて欲しいんだって」

全く見当違いではないが、かといって正解とは言えない。正確には、狩人としての戦闘について、アドバイスして欲しいというのが正しい。

だが、レオンが訂正するより前に、ホレスの答えがあつた。

「いいだろう」

こちらを見るわけでもなく、隣の酒樽を見つめながらの返事。

わずか数秒で、話がまとまった。

「よかったねー」

ベティの言葉はとりあえず置いておく事にして、レオンはホレスに確認した。

「いや、あの・・・いいんですか？」

「ああ」

「こういうのもなんですけど・・・お忙しいんじゃないですか？」

「暇な日もある」

「そうかもしれませんが・・・別に僕の為に使わなくても」

そこでホレスはこちらを向いた。向いたのは碧の右目だけだったが、それだけで彼の全てがこちらを向いたような、それほどの存在

感があつた。

「レオンだったな」

やや気圧されながらも、レオンは頷く。

「は、はい」

「ベティの命の恩人だ」

意外な一言である。ベティに言われた時も戸惑ったが、ホレスの口からその言葉が出るのは尚更違和感があつた。

「いえ、僕は何も・・・助けたのはホレスさんですよ。どちらかというと、ホレスさんが僕の命の恩人です。本当にありがとうございました」

その言葉にも、ホレスの碧の瞳は微動だにしない。

「俺はとどめをさしたただけだ。俺がいなくてもベティは逃げられた。だから、助かったのはレオンのお陰だ。本当に感謝している」

全然感謝している口調でも体勢でもない。だけど、きつと不器用な人なのだろうとレオンは思う事にした。

「逃げられたかは分かりませんが、ベティさんがここまで来たのは僕が頼んだからなんです。だから、あれくらいは当然というか・・・本当は、見習いとはいえ冒険者なんですから、倒せないといけないんですけど」

「ダガーを使っていたな」

突然の話題変更に、戸惑いつつも頷く。

「え？あ、はい・・・まだ習いたてですけど」

「アレンに言われたのか？」

「そうですけど・・・」

「なるほどな」

「・・・はい？」

そこでホレスはベティの方を向いた。

「ベティ。これからはレオンと一緒に来い」

何の脈絡もない言葉だが、やはり慣れているのか、ベティはすぐに答える。

「それはいいけど、毎回一緒は無理だと思うよ。レオンはこれからダンジョンにも挑戦し出すから、結構忙しくなると思うし」

「・・・分かった。遅いようだったら俺が迎えに行く」

「ホレスが？それって、私を心配してくれてるの？」

「当たり前だ」

ベティは照れたように苦笑する。ホレスの前ではよく見せる表情なのかもしれない。

「そんなに心配しなくてもいいよー。あんなモンスターはそうそう出ないと思うし。だいたい、今まで出た事なかったしね」

「一応だ。絶対に1人では来るな」

「はいはい。心配性だねー」

諦めたようなベティの口調。お互いの事をよく知っているのだろう。会話を聞く度に、その印象が強くなっていく。

そこでふと、2人の関係が分かった気がした。

「レオン」

ホレスの声に、レオンの思考は中断された。

「あ、はい」

「狩人としての弓という事なら教えられる。ベティの護衛を頼むよ
うで悪いが、俺のところまで来て貰えれば出来るだけの事は教えよ
う。元々、野外でしか教えられない。わざわざ出向かせるようだが、
理解してくれ」

その言葉で、レオンの推測はほとんど確信に変わった。

「いえ、教えて貰えるだけでも十分です。それで、あの、ホレスさ
ん」

「どうした？」

「ホレスさんにとって、ベティさんってどんな存在ですか？」

回答はやはり早かった。

「幼馴染み。それか、妹か。いずれにしても大切な人間だ」

やっぱりそうだった。恋人というよりも、そちらが近い。ある意
味夫婦にも近い存在なのかもしれない。家族同然の付き合いという

事なのだろう。

そこで、ベティの声が響く。

「恥ずかしい事聞くよねー。そんな事確認してどうするの？」

そちらを見ると、どこかにやけた顔をしていた。からかう気満々である。

どう答えたら被害が最小限で済むだろうか。そう思案していた時、ホレスが不意に、懷から笛を取り出す。オカリナに似ているが、穴が少ないように見える。片側しか見えないが、2カ所しか確認できない。薄苔色の不思議な楽器だった。

「あ、吹いてくれるの？」

ベティのどこかわくわくとした声。

「ああ」

「こんな時間に珍しいね」

「今日は特別だ」

その言葉に、ベティは微笑んでレオンの腕を掴んだ。

「何ですか？」

「いいからいいから。座って座って」

腕を引っ張られて、強引に床に座らされる。石材だから冷たいかと思ったが、意外にも少し熱を持っていた。

2人並んで、ホレスの方を向く。演奏者の方かというと、笛に口を当てて、じっと目を瞑ったまま動かない。精神統一しているのだろうか。

「ホレスはね、よくウイスキーに笛の音を聞かせてるんだよ」

「・・・どうしてですか？」

「味が良くなるんだってさー。だから、ここも大声厳禁なんだよ」

「へえ・・・」

聞いた事のない話だったが、職人が言うのだから、きっとそうなのだろう。

そこで突然、笛をくわえていたホレスが口を開く。目は瞑ったままである。

「これはウイスキーの為じゃない」

ベティは笑顔でそれに返事をする。

「じゃあ、何の記念？」

「記念じゃない」

「あれ？レオンとの出会い記念じゃないの？」

「それもいいが、観客はもう1人いる」

少女の瞳が一瞬大きくなる。

「・・・へえ。珍しいね」

「これくらいしか出来ない」

「本当に心配性だなー」

今日何度目かの、ベティの照れた声。

それを受け止めるようにして、笛の音がその片鱗を見せ始める。

決して高くはない、身体に直接響いてくるような素朴な音。それをどこか寂しげな旋律で彩るのだが、不思議と暗い印象は全くない。悠久の自然に、或いは母の腕の中に抱かれるような、心休まるメロディ。身体中を癒しの音色が包み込んでいく。

その笛の音に酔いしれながら、レオンは演奏する青年と隣に座る少女を見た。

さっきの会話を思い出す。

通じ合った2人の会話だから推測で補うしかないが、やはり兄妹だと考えると分かり易い。兄は、明るく振る舞っている妹の事が心配なのだろう。あんな体験をすれば、本当は辛かったはずなのだ。その心の負担を和らげる為の演奏なのではないだろうか。そんな優しさそのものの音色に聞こえる。

家族。

笛の音にのせて、レオンも自分の村に思いを馳せる。まだ村を出て半月程しか経っていない。ホームシックになるには早過ぎるが、この2人を見てこの音色を聞くと、否応なく故郷が恋しくなってくる。

だけど、それにはまだ早過ぎる。

ついさっきの戦いを思い出す。文句なく、自分の完敗だった。次に戦う事になった時、自分は勝てるだろうか。もし傍に誰かいたら、その人を守るだろうか。

逆の懸念もある。あの時ベティがいなかったら、自分は針の攻撃を避けられなかっただろう。彼女の声があったから、咄嗟に避けられたのだ。それだって、確信があったわけではなく、ほとんど勘みたいなものだった。

あんなのがダンジョンにはうようよしているのだろうか。

そんな場所で、自分はたった1人でも生き残れるのだろうか。やめるなら今のうち。

そんな考えが頭を過ぎった時だった。

最初はそういうメロディーなんだと思った。だけど、違った。

笛の音が次第に遅くなっていく。音色だけではない。他の音も、感覚も、時間でさえ、勢いを失っていくのだ。ゆつくりと、だが確かに停滞していく世界。

それを認識していたレオンだが、どういうわけか身体が動かなかった。意識だけが遠くから見ているような感覚。

そしてついに、時が止まる。

だが、それも一瞬だけだった。

気付いた時には、時は元に戻っている。

笛の音は元の旋律のまま。

ホレスは目を閉じている。ベティはこちらを見ていない。何も気付いてないようだった。

だけど、レオンは確かに感じた。

今何か起きた。

そして、確かに見た。

時が止まった一瞬。その時自分の視界を支配したのは、この蒸留所の風景ではなかった。

そして、その場所でじつとこちらを見ている存在。

行儀良く座って、じつとこちらを見ていたのは、白毛に紅眼の力
ーバンクル。

今のは何だったのだろう。

笛の音はまだ続いている。

その癒しの旋律も、今のレオンの耳にはどこか遠くの音色のよう
に聞こえた。

酒場の主人と行商人

ガレット酒場の朝は早い。

それは、ここが宿屋の食堂も兼ねているからとか、また、冒険者は日の出前の時間に立出する事が多いからという理由もある。だが、もしそんな理屈を本気で信じている人がいるとしたら、それはきつとこの酒場の事をよく知らない人だろう。ここはそんな客目線の発想をするような店ではないのだ。

この酒場の朝が早い理由。それは、単純に酒場の主人のガレットが早起きだからである。

彼の場合、日の出前に起きるのは当たり前。睡眠時間が3時間を越すことはほとんどない。仕事の為とかではなくて、そういう生活習慣が身についてしまっているのである。

元冒険者であるガレットにとって、睡眠は短い程良い。特に、魔法を使うジーニアスは精神的負担が多い為か、睡眠時間が長い傾向がある。夜の見張りは基本的に、彼のようなアスリートの仕事なのだ。無駄に長い睡眠は他のメンバーの負担になるし、何より、寝ている間は無防備だから、寝ていても落ち着かない。その頃の癖が抜けないままのガレットは、長い睡眠が出来ない身体なのである。

それだけなら、彼が早起きであるというだけの話で済むのだが、ガレットには欠けているものがあつた。

一言で言うなら、それは配慮、あるいは遠慮である。

早朝だから静かにしようなどという発想が彼にはない。冒険者にしてみたら当たり前の事なのだが、酒場兼宿屋の主人となつた今でも、困つた事に変わらない。何かしてないと落ち着かないという事なのだろう。客はおろか、家族だってまだ寝ている時間でも、平気で廊下をうろろする。うろろするだけならまだ良いが、掃除や片づけを始めたりする。特に、何か捜し物があると、妻や娘を起

こして聞く事もある。本人達はもう慣れてしまったわけだが、その話し声を聞かされる客達の方はそうではない。

端的に言えば、朝から落ち着かない。

そういう場所だから、ここに宿をとる一般の客はほとんどいない。初めてここに泊まった一般人は、次からは大抵他の宿をとるし、そもそも、ユースアイの人々は親切だから、一般人が宿を探している場合、ガレットの宿場を紹介する事はない。

代わりに、冒険者が宿を探している場合には、迷わずここを紹介する。何故なら、冒険者の生活習慣が身につくからである。さらに、明日の出立が早い場合でも、寝坊する事はまずない。仮に自分達で起きられなくても、主人自ら起こしにくるからである。多少身体にダメージが残る起こし方だが、他の宿屋ではこうはいかない。夜遅くに帰ってきた場合でも、ガレットはすぐに飛び起きて出迎えてくれるし、そもそもほとんどの時間起きているわけだから、閉め出しされる心配もない。好意的に見れば、冒険者向けの宿屋だと言えるだろう。

そんなガレットの店だが、1階のフロアのほとんど全てが酒場兼食堂となっている。そこで冒険者達が、酒を飲んで語り合ったり、羽を休めたりするわけだが、そういう場合、多くの客達はテーブル席を使用する。というのも、冒険者の多くはパーティを組んでいるからで、イスが3つしか用意されていないカウンター席は、4人以上が理想とされる冒険者パーティには少な過ぎるのである。

カウンター自体の広さはもつと多くのイスを置くのにも十分なものだが、ガレットはそれ以上のイスを置こうとはしない。その理由を一言で説明するのは難しいが、簡単に言えば、冒険者達と必要以上に馴れ合いたくないからである。馴れ合ってもお互いの為にならない。志半ばで冒険者を引退した自分にとっても、これからより高みを目指す冒険者達にとっても。

その為、現在カウンター席を利用する人間といえば、まだ仲間がいない見習いのレオン、たまに遊びにくる自分やベティの友人達。

それから、今座っている行商人の男くらいである。

ガレットはカウンターの中から、座っているその男を見下ろす。男は2つのグラスに注がれたウイスキーを交互に飲み比べているところだった。

旅人にしては頼りない体つきで、道中で強盗に襲われたらどうするのだろうかといつも思うのだが、町中にいる時には恵まれた外見だと言えるだろう。相手に警戒心を抱かせないのはもちろん、実は整った顔立ちでもある。客に取り入るには有利な武器となっているに違いない。服装も当然くすんだり汚れたりしているわけだが、こういった職種の間人には珍しく、意外に気を使っているという事だった。これは、本人に聞いたわけではなく、妻や娘の意見である。少し無精髭をのばしているが、それもファッションのうちという事なのだろう。人当たりがいいのは間違いない。

彼は自分の事をガイと名乗っているが、本名ではなく、覚えやすいからそう名乗っているという事だった。そして、実を言うと、彼こそがこの町までレオンを乗せてきた男である。ついさっきこの男に確認もしたし、レオンが住んでいたような山奥まで行くような行商といえば、彼くらいのものである。まだ若い男だが、その若さに見合ったフロンティア精神と、しっかりとした商売眼を併せ持っている、なかなか大した男である。

ガイは両方のグラスとも二口しか飲まなかった。それもそのはずで、これが彼の仕事の一部だからである。

しばらくして、彼は顔を綻ばせながら言った。やや苦笑気味と言っている。

「・・・同じ場所で作ってるのに、どうしてこんなに違うんだろうなあ」

彼が味見していたのは、ガレット酒場自家製のウイスキーである。彼の妻の父親が始めたという、こだわりの銘酒だ。

「そんなに違わねえだろ」

ガレットが吐き捨てるように言ったが、ガイは全く意に介さず続

ける。見かけによらず、この男は度胸もある。

「いやいや。分かる人には分かるんですって。ホレスの方は小川のせせらぎみたいな繊細さがあるけど、オッサンの方は土石流……」
眉がぴくりと動いたのが自分でも分かった。

「てめえ、本人を目の前にして土石流ってな……覚悟してるんだろうな？」

怒気を込めた眼で睨むと、ガイはあっさり両手を挙げた。だが、顔は笑っている。

「そういう荒々しい方が好みって人もいますよ。この口の中で荒れ狂う感じはなかなか出せないって」

「てめえなあ……それで褒めてるつもりか？」

ガイは口元を上げる。

「もちろん。悪い品だったら、買い手なんてつかないし」

「その買う奴も買う奴で、何を好き好んで、そんな土石流を飲みたがるんだ？」

「都会人は刺激が欲しいんでしょうね」

「じゃあ、ホレスの方はどんな奴が買うんだ？」

「それはまあ……違いが分かる人でしょうね」

自分のは出来が悪いと遠回しに言われたような気がしたので、もう一度睨んでみたが、今度は効果がなかった。どうもやりにくい相手である。

ガイは周囲を見渡してから、ガレットに聞く。

「今日はベティちゃんは何？ホレスのところですか？」

世界広しといえど、ベティの事を今もちゃん付けで呼ぶ男はガイだけである。

ガレットはグラスを片づけながら低い声で答える。

「レオンの鎧が出来たとかで見に行っちゃったんだよ。付き添いつていうか、仕事をサボる口実みたいなもんだ」

「へえ……レオンはどんな感じですか？」

「どうってなあ……これからようやくダンジョンに挑戦ってとこ

るだから、何とも言えねえだろうな。まあ、なるようにしかならねえよ」

「いや、そうじゃなくて・・・例えば、息子としてどうですか？」
思わぬ質問に、ガレットは鼻で笑った。新しいグラスを手に取りながらガイの方を見ると、彼も楽しそうな表情だ。

「まあ、息子としてなら、どこに行ってもやっていけるだろうよ。うちもたまに手伝って貰ってるが、よく働uksi、人当たりもいいしな」

「やっぱりそうですよねえ・・・俺も、ここに連れてくる時、そう思ったんですよ」

「そういえば、そんな話をあの馬鹿娘から聞いたな。弱そうだ弱そうだって、皆に言われたらしいんだが、連れてきて貰った行商の男にもそう言われたってな」

娘のベティは、そういう情報を聞き出す事にかけては天才的と言ってもいい。

悪びれる様子もなく、ガイは可笑しそうに笑った。

「本当に弱そうですからねえ。最初はジーニアスかと思ったんですけど、魔法は使えないって言うし・・・だから、一応少し心配してたんですよ。というか、最初に会った時、止めとけって言おうと思っただくらいで。だけど、レオンの両親と知り合いだったから、断るのも悪いし」

氷を入れたグラスにウイスキーを注ぎながら、ガレットは軽く答える。

「あいつのご両親がお得意さんだったか、それが母親か姉が美人だったか、どうせそんな理由だろうが」

ガイは微笑む。肯定の笑みだ。

「美人っていう事なら、それはもう・・・レオンの母親ですからね、愛想が良くて優しい人ですよ。そうだ。それで、聞きました？」

ガレットはウイスキーの入ったグラスをガイの前に置く。

「何をだ？」

いつの間にか、ガイは真剣な表情だった。

「実は、つい最近、新ダンジョンが見つかったんですよ。それが滅多にないような規模のものらしいんですけど、その入り口がユースアイからも結構近いそうで」

思い当たる節があり過ぎる話だった。

「おい。そのダンジョンの入り口、まさか、ここから西の方か？」

目を見開いたガイの表情を見れば、その答えも一目瞭然だった。

「あれ・・・知ってました？西っていうか、正確には北西の山奥の方なんですよ。どちらかというところ、こっちよりも、山を越えた向こうの方では、結構な強さのモンスターが出るようになったみたいで、今ちよつとした厳戒態勢だとか」

ガレットは右手を額に当てて、大きな溜息を吐いた。

「てめえは・・・こういう時はちつとも役に立たねえんだよなあ」
役立たず呼ばわりされたガイだったが、困惑しているのは明らかである。

「いや・・・なんか知りませんが、俺、間が悪かったですか？」

あさつての方を向きながら、ガレットは言い放った。

「こつちにも出たんだよ」

「モンスターが？」

「当たり前だろうが。もつと早くに聞いてたら・・・いや、もういい。てめえに期待しても仕方ねえ。それよりか、ギルドの情報網はどうなってるんだ」

「いやいや。何かあったんですか？あれ、西つて言えば・・・もしかして、モンスターに襲われたの、ベティちゃん？」

西にはさっき味見させたウイスキーの蒸留所があり、そこにベティが度々通っている事くらいはこの男も知っている。相変わらず彼の勘は鋭いが、今更働いても意味がない。

さすがに驚いた表情のガイはさておき、ガレットは心中穏やかではなかった。そんな情報があるのなら、ギルドから注意勧告があってもいいはずだが、それが全くなかった。一言でも情報があれば、

いくらでも対処方があったはずだ。

だが、ガイはその辺りの心情も読み取れたらしい。こちらの勘は捨てたものではない。

「いや、ケイトさんは悪くないですよ。この情報をここまで持ってきたのは、たぶん俺が一番手ですからね。入り口が判明したのは、本当について先日なんです。それまでは、山のどの辺りかなんて全然分かってなかったわけですから。あの山脈、結構広いですからね」

「そんな情報が、何でギルドよりも先にてめえにまわってくるんだ？」

「大した事じゃないですよ。何の偶然かは知りませんが、山奥でたまたま乗せた冒険者達が、その入り口を見つけた人達だったっただけです。まさにその帰りだったらいいんですけど、移動手段の方をモンスターにやられて途方に暮れてたらしいんですよ」

「・・・てめえはそんなモンスターが溢れる山奥をうるちよろしてたのか？」

「いやあ、そんな事知りませんでしたからね。堂々と通ってたら、意外に会わないものなんですねえ」

他人事みたいに言ったが、一歩間違えたら命がなかったのは確実である。ただ、ここで笑い飛ばせるというのが、彼がただ者ではないという何よりの証明かもしれない。

ガイはグラスに口をつけてから、話を戻す。

「そういうわけなんで、そろそろギルドにも報告が来て、手練れの冒険者が押し寄せて来ると思いますよ。まあ、山の向こうの方が大々的に募集してると思いますから、こっちはそれほどもないと思いますけど」

「そのダンジョンの規模がどれくらいかは分かるか？」

「いや・・・その人達も入り口を見てきただけらしいんで。そういう依頼内容だったらいいですね」

ギルドからの依頼だったという事だろう。普通、ダンジョンの入り口は冒険者が勝手に見つけるから、そんな依頼が出る事はほとん

どない。逆に言えば、それだけギルドの憂慮する案件だということだろう。

難しい顔をしている酒場の主人に、ガイは少し間を取ってから聞いた。

「・・・その、ベティちゃんが襲われたモンスター、倒したのはホレスですか？」

ガレットは惘然として答える。

「ああ」

「強さはどんなものだったかは聞きました？」

「矢を13本使った」

「あいつらしい表現ですねえ。でも、13本っていつたら・・・」

そこでガイの言葉は途切れたが、言わんとする事は分かる。ホレスの矢は正確無比であり、普通の獣なら1本あれば急所を射抜く。急所がはつきりしないモンスターでも、普通は5本もあれば十分事足りる。その倍以上使ったという事だから、それだけ強力なモンスターだったという事だ。

「・・・どうも嫌な感じだな」

ガレットの呟きに、ガイが軽く聞く。

「元冒険者の勘ですか？」

「行商の勘は何て言ってるんだ？」

「ここは安全」

「・・・根拠は？」

「勘だからなあ・・・と言いたいところですけど、実はひとつだけいい材料があるんですよ」

方眉を動かしたガレットに、ガイは微笑んで言った。

「レオンは、実はただ者じゃないんですよ」

「何？」

確かに、前世を見た事がないという意味ではただ者ではないし、強力なモンスター相手に恐れもなく立ち回ったというのは、聞いた時は思わず感心した程だ。だが、ガイの口振りではそれだけではな

さそうである。

たつぷり間を取ってから、ガイは自信満々の口調で言った。

「あいつは伝説になる男なんです」

同じくらいたつぷり間を空けてから、ガレットは半眼になって聞いた。

「・・・根拠は？」

「俺の勘」

「帰れ」

グラスを下げようとするガレットを、慌ててガイは止めた。

「いやいや！今は冗談」

「今のは？どうせ他に理由なんかねえだろうが」

「あるある！」

「分かった。とりあえず聞いてやる」

「そう言いながら、グラスから手を離さないのは何で？」

「いいから言ってみやがれ」

ガイはそこで困った顔になった。

それを見たガレットは、口元に笑みを浮かべる。全然明るくない笑みを。

「・・・ガイ。こちらも家族の命が賭かってるんでな。お前の戯れ言につき合ってる暇はねえんだ。これ以上つまらねえ冗談を言いやがったら、二度と馬鹿な事が言えねえ身体に矯正してやるから楽しみにしてる」

「いや、冗談ではないけど・・・ただ、あの、最後まで怒らないで聞いていただけませんか」

「そうだな。最後まで望みは聞いてやろう」

「最後って・・・」

「何だ？もう言い残す事はないか？」

ガイは瞬時に両手を挙げて、後ろに飛び退いた。ウイスキーよりも命を優先したようだ。なかなか賢いと、ガレットは少し感心した。それを見届けてから、黙ってグラスを片づけると、不意にガイが

近寄ってきた。まだ話があるようだ。

「・・・何だ？」

思いつきり不機嫌な声で言ったが、ガイは少し微笑むだけで、それを受け流す。

「レオンの村。サイレントコールドの故郷なのは知ってますよね？」

「それがどうした？」

「これは本当は秘密なんですけど・・・レオンが知らなかったら話しておいて貰えますか？」

ガレットは眉を動かす。どうやら真面目な話らしい。

ガイは小声で話を続ける。

「実は、レオンの村には、サイレントコールドが作ったアーティファクトがあるって話なんですよ」

アーティファクトとは、魔法によって作られたアイテムの中でも最上位の物の総称だ。一般人はもちろん、冒険者でも一生お目にかかれない事が多い。普通の魔法のアイテムなら、ある程度のジーニアスならば作る事が出来るが、アーティファクトとなると、伝説級の能力がなければ製作不可能と言われている。まさに幻の品であり、それに秘められた力も、他のアイテムの比ではない。

「そのアーティファクトにはいろいろな力があるらしいんですが、常に作用してるのは、村を守る機能なんです。あの辺りに雪女が出るって話を聞いた事あると思うんですけど、それがまさにその防衛機能らしいんですよ。アーティファクトの力によって生み出された幻影なんですけど、モンスターとか、あと、盗賊とかの前に現れて、そいつらを魔法で氷漬けにしているらしいです。若い頃のサイレントコールドにそっくりの姿で、その魔法の力も、並の冒険者じゃ勝てないって話です」

「その村で育ったんだから、レオンもそれくらい知ってるだろ？」

当然のガレットの疑問だったが、ガイは頷かなかった。

「子供にはそういうお伽話として教えてるらしいんですよ。レオンは16歳だから成人といえば成人なんですけど、いつ教えるかは親

の勝手らしいんです。というか、レオンのご両親が、なんていうか・
・ちょっとぼんやりしてるんで、たぶんまだだろうなあと思って」
酷い言われようだが、ガレットにも否定出来ないところだった。

またベティ経由の情報だが、レオン一家は村でもぼんやりした家族
で有名だったらしい。

ガイはそこで身体を離す。微笑みながら軽く左手を挙げた。

「じゃあ、そういう事なんでよろしく。ボトルの方は、明日取りに
来ますんで」

それだけ言うと、出口の方へと歩いていく。

ガレットは腕を組んでそれを見送っていた。

相変わらず、食えない男である。

結局、ガイが何故こんな話をしたかというと、レオンの村がその
北西の山脈のどこかに位置するからだろう。ガレットは行った事がないから分らないが、ガイは何度か訪ねた事があるらしいから、
場所を知っているのだ。

つまり、これから新ダンジョンの話が広まれば、当然レオンの耳
にも入る。そうになると、レオンは自分の故郷の事が心配になるだろ
う。それでも、村にある程度の防衛機能があるという事を知ってい
れば、ある程度は安心出来る。

もちろん、彼は行商人だから、ただの親切心だけだとは思えない。
自分やレオンに対して誠意を見せたと捉える事も出来る。彼はそれ
くらいの計算が出来る男であり、そうでなければ、あの若さでたっ
た1人、行商を続ける事は出来ない。

そう捉えられる事もまた、お互い承知の上である。商売人とはそ
ういうものなのだ。

「あれー、ガイさん来てたの？」

ガイが出口にたどり着こうとした時、扉が向こうから開いた。そ
こに立っていたのは、新品の皮鎧を着たレオンと、ベティ、そして
鍛冶屋で働くりディアの3人だった。ばったり出くわす格好になっ
たわけだが、当然というべきか、最初に口を開いたのはベティだっ

た。

「お久しぶり。ベティちゃんもリディアさんも綺麗になったね」

齒が浮くような台詞だが、ガイは平気な顔で言える男なのだ。

「何で私だけちゃん付けなのー？」

「レオンも鎧が出来たんだって？」

「私の質問は！？」

ガイはあっさりとそれも無視する。扱いに慣れているというか、完全に遊んでいる。付き合いが長いわけでも深いわけでもないのにここまでの事が出来るのは、きつと相性の問題だろう。

レオンは慣れない状況に戸惑っているようだった。いつもベティに振り回されているわけだから、無理もない。

「えっと・・・」

ガイはそんなレオンの肩に手を置く。あまり体つきはよくないが、それでも身長はガイが一番高い。

「鎧はよく似合ってる。だがな、レオン。二股は程々にしておけよ。鎧と一緒に、2人同時なんてのは無理があるんだ。ベティちゃんとはかく、リディアさんみたいな美人を見て、思わず手を出してしまった気持ちは、分らないではないけどな」

完全な濡れ衣だったが、ガイがわざと言っているのは明らかだった。声がやや大きいのは、多くの人間に聞かせる為だろう。

酒場中の視線が、出入り口の扉に集中する。

「私はともかくって何ー！？」

怒った様子のベティはともかく、レオンとリディアは完全に固まっていた。好奇の視線を一身に浴びているのが分かっているのだ。レオンは顔が青くて、リディアは顔が赤いという違いはあるが。

「じゃあな。みなさんお元気で」

普段通りの口調でにこやかにそう言うと、ガイは颯爽と店を後にした。

酒場には、変な空気が残っていたが。
ガレットは溜息を吐く。

これは一体何のサービスなのだろうか。さっきのアーティファクトの話のように、何か利点があるのだろうか。

考えても答えはない。あるはずもない。

ただの遊びに違いなかった。

そして、結局、この事態を処理するのは、自分の仕事のようにだった。

「ベティ！レオン！あの馬鹿の戯れ言はいいから、とっとと報告しやがれ！リディアの仕事が止まっちゃうだろうが！」

ガレットの店内を揺るがす声が、凝り固まりそうだった空気を一喝で吹き飛ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6452y/>

夢色彩のカーバンクル

2011年12月5日21時52分発行